

Fate/Grand Order —flowering night—

紅劉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

女の話しよう。

誰よりも高みを目指し、約束を果たすと誓った女の話——

藤丸立香が花騎士ワールドでモミジと世界を救う話

カルデアと花騎士が手を組み、聖杯探索へ

【注意点】

この小説は、Fate／Grand OrderとFLOWER KNIGHT GIRLのクロスオーバー二次小説です。

以下の内容が含まれているため、これに該当する場合は読むことを推奨しません。

・時系列として、FGOは第一部クリア後の話です。ネタバレが豊富なため。まだクリアしてない方はクリアしてからの方がいいです。

目次

プロローグ 「英雄は棺桶に眠る」	1
第1話 「栄枯散華庭園 スプリングガーデン」	25
第2話 「カルデア騎士団」	53
第3話 「その人が世界で一番でも、私が世界で一番です」	63
第4話 「お酒は二十歳になってから」	80
第5話 「エドモン探偵事務所」	96
第6話 「花騎士は英霊に勝てない」	112
第7話 「枯生花」	128
第8話 「英霊華」	140

プロローグ 「英雄は棺桶に眠る」

女の話をしよう。

誰よりも高みを目指し、約束を果たすと誓った女の話——

女はひたすらに、前だけを見てきた。

何に対しても見向きすることなく、横道に逸れることもなく、一人で荒野を歩いていく。

一番になる。

ただそれだけのために。

誰もが一度はその理想を求めただろう。

勉強でも武術でも、しかし現実を見ればそれは余りにも眩いものだ。

故に、断念するものだ。自分では頂に至れないと、諦め、摩耗し、胸に抱えた理想の自分を捨てていく。

だが、その女だけは違った。

己を捨てた。

——己を捨てた。

——己を捨てた。

はたから見れば愚かなのかもしれない。その在り方は間違っていると糾弾されるだろう。

だがこれが、彼女の望んだことであれば、幸せであるならば、止めることはあつてはならない。

女の天秤は酷く傾く。

片方の計り皿は伸し掛かったその重さに耐え切れず今にも亀裂が走りそうな程に。

女は捨て去ることもなく、顔色一つ変えることもなく、前だけを見据える。

そうして、女が通った後には冷えきった小さな欠片が零れ落ちていた——。

一を斬った。

——十を斬った。

百を斬った。

暗い暗い闇夜の舞台。月は雲隠れし光を頼りに出来ないこの戦場に駆り出た女の姿は、まさしく夜叉そのものだった。

紅蓮の甲冑を腕腰に纏い、翠緑から深紅に移り変わるマフラーが荒々しく靡く。五感を研ぎ澄ませ、虎の如く縦横無尽に駆け回る。

女が携える得物は太剣に銃の要素を組み合わせた大型のガンブレード。両手で構え、柄を力強く握りしめる。

重い腰を落とし下段の構えを取り刀身を後ろに流し、機が熟せば押し寄せる敵を無情に斬り上げる。同時に灼熱の焰が渦を巻いて周囲を悉く焼き払う。その場にあるもの全てを破壊するかのような奔流が吹き荒れる。

蹂躪だった。敵わないと恐れ慄き逃げ惑う敵すら躊躇いなく、不要となった紙を破り捨てるように女は斬った。

風が唸る。踏みしめた足が地を蹴った後には、枝分かれした敵が死を悟る前に消滅していく。もはや戦地に立ち尽くす姿は女のみ。しかして、その勇姿を称える者は誰一人としていない。

たった一人、毅然とした佇まいで夜空を見上げる夜叉には付き添う者も、従える者も隣に立つことは未だにない。

友がいけないわけではない。孤高であるためでもない。

友情もある。仲間もいる。そして——姉がいた。

静かに呼吸を整える。燃え上がった炎は既に鎮火し、寒空の下で女はもう一度息をついて戦地を見渡す。

薙ぎ倒された木々、無数の屍、焼け焦げた跡、灰になった小さな花。決して居心地が良いわけではない。自らが抉ってしまった爪痕を罪と捉えても後悔することはない。

褒められるために戦うのではない。見返りを求めるために戦うのではない。

国のために戦うのではない。人々のために戦うのではない。

世界を守るためでもない。

では何のために？

「一番になるために」

約束を果たすため、天命にも等しい呪いを女は帯びている。人は目的のためならばどんな手段でも執り行う。

そこに代価が、犠牲が必要だと分を弁えているから。歴史がそれを証明している。であれば罰せられることもない。

女は自らの行為を正しいと信じて疑わない。それが姉のためなのだからと。約束を破ることはすなわち、自身の存在意義の否定にして姉の拒絶。

故に破却することは許されない。免罪符など求めはしない。

夜は長い。またいつ襲撃に見舞われるかわからない。軽く埃を払い落とし大剣を背負った彼女は再び歩き出す。立ち止まることはないその足で悠々と、しかしどこか重い足取りで女は戦場を後にした。其は置いていかれた残り華。大切な思い出を胸に抱き、約束した誓いを果たすべき者。

花騎士——モミジ。

×

人理継続保障機関フィニス・カルデア。人類の未来を語る資料館、通称カルデアと呼ばれるこの機関は標高6000メートル、雪山の地下に造られた地下工房だ。時計塔天文科を牛耳る魔術師の貴族、アニムスフィア家が管理しており人類絶滅を未然に防ぐ為の各国共同で設立された特務機関。

この地下工房で彼女、マシユ・キリエライトとはある一室の前に立っていた。両手に2つの淹れたての紅茶を持って入室する。

自動開扉され、マシユの目に最初に映ったの彼女が最も信頼し最も多くの困難をともに乗り越えてきた先輩、藤丸立香だ。

時刻はとうに午後を過ぎているというのに彼は未だ毛布を被り静かに寝ている。気持ちはわかる。

外は晴れ晴れと太陽が照り続けており、太陽を遮る雲すらないこの清々しい青空のもと、昼寝をすることは是非もないことだろうと。

しかしここは地下工房。日光すら届かないこの部屋で、冬眠する熊

のように太々しく寝るとはいただけない。

仮にもマスターなのだ。主が規律を守らずしてどうすると、マシユは紅茶をそつとテーブルに置き、藤丸の前に佇む。

起きる気配を微塵も感じさせない彼を強制執行で目覚めの儀式を執り行った。毛布を力任せに剥ぎ取り、枕を一気に引き抜く。

エンジンがフル回転するように藤丸の体は宙返り高速スピンの。当然受け身が取れることもなくベッドにダイブ。

そのあまりの衝撃に目を覚ました彼に襲い掛かったのは身に覚えのない痛みだった。

「おそようございませ先輩。昼ですよ」

「お、おそようございマシユ・・・」

どこか吐き捨てられるように挨拶を交わす彼女に、先輩足る藤丸は痛みを悲鳴を上げることよりも背筋に寒気を覚え、振り返ることが出来ぬまま挨拶を返す。

殺気みたいなオーラすら感じ取った彼は何とか鎮めようと作り笑顔で話を持ち掛ける。

「ど、どうしたんだいマシユ。顔が、顔がなんか怖いよ?」

「そうですか? いえ、私は先輩の怠惰な在り方を治そうとしたまですよ。」

先程の先輩の姿をナイチンゲールさんやエミヤさんに見せたらどうなるか、先輩ならきつとおわかりになるでしょうネ」

まるで死刑宣告。ギロチン台に設置されて生死がマシユの手に握られているようだ。

「す、すみませんでしたあ!!」

この場合、正直に謝るのが正しい。マシユも鬼ではない。誠心誠意、心を込めて謝罪すれば理解してくれるだろう。

「と、今の先輩は思っているかもしれないませんが、今回は心を鬼にします。詠みがハズレましたね先輩」

マシユは手にしたブザーを鳴らしテーブルに置く。その音に反応し、ものの数秒で駆け付けた看護師とおかんは藤丸に正座するよう言いつけ、数十分ひたすら叱りつけられた。

「マシユ、覚えとけよ」

「そうですね。私も少しやり過ぎました。そこは素直に反省しています」

説教が終わり、再び2人だけの時間が流れる。

「そういえばマシユは何しにきたんだ？」

「私ですか？そうでした。こちらをどうぞ先輩」

テーブルに放置してた紅茶をベッドに居座る藤丸に手渡す。既に冷え切り、立ち昇っていた湯気すら見る影はどこにもない。

「マリーさんから譲っていただいた紅茶なんです。

林檎と薔薇をブレンドした自慢の高級品とか。

冷めてしまっていますし淹れ直しに——」

藤丸からカップを受け取ろうとすると、彼はどこか穏やかな笑みを浮かべて呟いた。

「いや、このままでいい」

「——先輩？」

藤丸は思い出した。紅茶を見た時、あの運命の出会いを昨日のことのように。

——『はい、入ってま——って、うええええええええ!? 誰だ

君は!? ここは空き部屋だぞ、ボクのさぼり場だぞ!? 誰のことわりがあつて入ってくるんだい!?!』

彼、ロマニ・アーキマンもまた飲んでいたので。誰に邪魔されることなく当然の如く仕事をさぼって。

多めに盛り付けられた苺のショートケーキを頬張り、自分で淹れた熱い紅茶を悠々と。

偶然にも藤丸はその場に居合わせてしまった。思えばあれは必然だったのだろうと痛感する。

ほんの僅かな時間過ぎたあの時、ロマニ、いや、Dr. ロマンは藤丸にコーヒーを淹れてくれた。

——『所在無い者同士、交友を深めようじゃないか』

まだ新参者である藤丸を彼は受け入れ、コーヒーで乾杯しカルデアについて教授してもらったことはごく普通に思えるかもしれないが、

今となつては藤丸にとってかけがえのない大切な思い出なのだ。

紅茶から漂う酸味がかつた甘い香りを満喫し、ゆつくりと飲み干す。今あるこの時間も彼がいたからこそあるもの。ならば、彼の分まで楽しまなくては。今あるこの瞬間を、大切に。

「おかわりいいかな？ 今度はもう一つカップを増やして」

「先輩・・・了解です。ただいま持つて——」

カップを受け取ったマシユが部屋を後にしようとした時、着信音が響き渡る。

ブザーではなく、藤丸が手首に装着している通信機から同じリズムを刻んで鳴り続ける。

この和やかなムードで横やりを突くのはどこの誰かと着信相手の表記を見ると彼はため息をついた。

ダ・ヴィンチちゃん。つまりはレオナルド・ダ・ヴィンチ。

知らぬ者はいないだろう。画家にして万能の天才と謳われた彼、いや、彼女こそ現カルデアの全指揮権を握る召喚英霊第三号。

藤丸たちとともに魔神王ゲーティアによる人理焼却を阻止した頼れる英霊。今やDr. ロマンが不在のカルデアではこのダ・ヴィンチがリーダー的立場を取り仕切っている。

そんな天才リーダーからの通話を断るわけにもいかず、藤丸は渋々通信を受け入れた。

通信機からモニターが映像として表示される中、ウェーブかかった黒髪の長髪をした女性が笑顔でチャオチャオくと手を振ってくる。間違いない、ダ・ヴィンチちゃんだと藤丸は額に手を当てる。

『ヤッホー、起きてたかい藤丸？』

「起きたというより起こされたんですけどね。それで、用件は何ですか？」

『大至急中央管理室まで来てくれ。』

ここで説明するより直接見てもらったほうが早いからさ。あとマシユは来なくて大丈夫。用があるのは藤丸だけだからネ♪』

それじゃまた。意気揚々と指パツチンして通話を切った彼女に藤丸はどこか寒気を覚える。きつと碌なもんじやないと。今までの経

験が鳥肌を伝って警鐘を鳴らす。

「ご愁傷様です、先輩」

憐れみの目、冷ややかな目、どちらも見て取れるように感じるがそれ以前にまたも殺気染みだオーラを醸し出しているマシユに藤丸はさらに鳥肌がピンと立つ。

「もしかしておこななの？」

「知りません」

スパッとカッパを取り上げて退出するマシユ。ダ・ヴィンチちゃんの余計な一言が口惜しく感じるも後の祭り。

藤丸は仕方なしにベッドから立ち上がり、不本意ながら指定された場所へ足を運んでいった。

中央管制室

擬似地球環境モデル・カルデアスが設置されているカルデアの中枢部。カルデアスとは平たく言えば複写機である。惑星には魂があると定義付け、その魂を複写するそれはまさしく擬似天体。つまりは小型化された地球のコピーだ。

その複製された青白い球体をダ・ヴィンチは傍観していた。何一つ異常を見せないこの贋作、以前は血のように赤く染まり、人類滅亡の危機を表していたが今では静寂な海のように平静だ。

「平和だなー」

ふと、つい思ったことを呟いてしまった。人理焼却事件以来、今では何事もなく日常を過ごしているのも、藤丸立夏、マシユ・キリエライト、数多の英霊、カルデア職員一同、そして——いるべきはずの優男の奮闘あってこそだと、彼女は指折り数えて確認する。

今あるこの温かな日常を彼にも見せてやりたい。そう思った矢先、管制室のゲートが開いた。

「ただいま到着しました、ダ・ヴィンチちゃん」

世界を救った英雄様のご到着だ。と、彼女は感情に浸るのを止めて藤丸のほうへ振り向いた。

「おや？ 意外と早かったね。マシユ嬢がついて来なかったのは驚きだ」

「誰のせいだと、いやオレにも原因はあるんですけど。それよりどうしたんですか、見せたいものがあるって?」

「ふふふ・・・それはねえ」

ダ・ヴィンチが左手を軽く上げる。それを確認したカルデア職員が一齐に持ち場についた。逐一モニターを確認しながら手慣れた様子で機器類を操作していく。すると、藤丸の前に黒塗りのフェルトで覆い被された何かが現れた。

「・・・なにこれ?」

呆然とする藤丸を余所にダ・ヴィンチはフェルトを鷲掴みする。

「見たまえ! これぞ、私が四六時中なんやかんやで完成させた新型コフィン。その名も『カロンクスI世だ!!』^{フリーモ}

フェルトを勢いに任せて捲り上げる。藤丸が目にしたものは寝かされた漆黒の棺型をしたそれだった。

「棺桶じゃん!! 360度あらゆる角度から見てもまんま棺桶だよ!」

「いやあ作るの大変だったんだよ。ほら、レイシフトした時によくスカイダイビングしてることあるじゃないか」

言われてみれば確かにと藤丸は納得する。

現に第七特異点バビロニアではそうだった。ウルク市に敷かれた防御結界による強制退去、つまりはウルク市への転移を拒絶されたのである。

人理修復開始直後に上空二百メートルからの空中落下、紐なしフリーフォールバンジー。そんなことを死因として書かれてしまえば末代までの恥だ。

「この新型コフィンはそういう非常事態に備えた対衝撃用ポッドと理解してくれていい」

「なるほど、それについてはわかりました。でもそれってコフィンごとレイシフトするってことじゃ」

「その点については大丈夫。このコフィンはレイシフト成功時に必要とされたその瞬間に自動で展開されるんだ。

欠点があるとすれば意味消失ですぐ消えることぐらいかな」

「かなって・・・」

不安がさらに募っていく。

「物は試しと言うだろう。善は急げだ。今すぐ乗りたまえ♪」

開かれた棺桶にダ・ヴィンチは半ば強引に藤丸を押し込んだ。抵抗するにも相手は英霊。

並みの人間では力で到底及ばない。仕方ないと諦める。そこでもたダ・ヴィンチが余計なひと手間を加えなければ。

ガシヤンと何か鉄同士がぶつかり合う音が響いた。何だろうと手足を動かしてみるものの全く微動だにしなかった。視線を向けると手首足首に不要な枷が四肢の自由を奪っている。

「どういうことかなダ・ヴィンチちゃん？」

ダ・ヴィンチは何も答えない。棺桶の蓋を閉じ、南京錠で施錠する。「・・・そういうことだよ藤丸」

今度は右手を上げる。それを確認した職員は毎度行ってきたシステムを起動させる。

レイシフト。コフィンに搭乗した人間を擬似霊子化、魂をデータ化させて現在とは異なる時間軸へ転移させる云わばタイムトラベルのことである。

これにはさすがに藤丸も冷や汗を掻く。今まではマシユとともにレイシフトしてきたのだ。

それが今や一人、付き添いのサーヴァントは誰一人としていないではないか。それに――。

「いや！ これは無理だよダ・ヴィンチちゃん！

だってこれ棺桶なもの！ 花添えられてるもの！」

「ただの飾りですー。別に意味なんてありません。二つの意味で」

「悪ふざけにもほどがある！ この人でなし――」

途中、新型コフィンに搭載されたスピーカーから聴きなれた音声ガイドが流れてきた。

『アンサモンプログラム スタート。霊子変換を開始 します』

始まってしまったと藤丸は愕然とする。だが手段は残っている。

「令呪」

サーヴァントへの絶対命令権にしてマスターの証。

これを使用して英霊をこの場に呼び寄せれば救出してもらえると考えた藤丸は出し惜しみなく使用しようと試みるが、その必要はなかった。

中央管制室のゲートが開き、猪突猛進の勢いで接近するマシユの姿が目に見えたからである。

「御用！御用改めます！ 無事ですか先輩!!」

「ちえっ、もしかしなくても感づかれちゃったかなこれは」

舌打ちする彼女を前にマシユはしたり顔を決める。

「当然です。薄々嫌な予感はしていましたが虫の知らせが入ってきたんですよ魔王ダ・ヴィンチちゃん!!」

「ふはははは！藤丸を助けたくばこの万能の人である私の屍を越えて行け！ 勇者マシユマロンよ!!」

「いやどうでもいいよそのコント!」

なに、打ち合わせでもしてた？ マシユにすら裏切られたのオレ!?!」

喜劇なのか悲劇なのか、上階の管制室から見ていた職員たちの中には笑う者もいれば呆れた表情を浮かべる者もいた。

『レイシフト開始まで あと3、2、1、・・・』

藤丸は完全に思考停止していた。いや、考えるのをやめた。

行先は不明だがダ・ヴィンチのことだ、きつと座標地点にサーヴァントでも待機させているのだろうと曖昧な根拠を信じざるを得ないのだ。これも宿命なのだと思うほどに。

ならばここは素直に従おうとそう結論づいたのだ。

次のアナウンスが流れるまでは。

『全工程 完了』

『人理開花指定 ——フラワリングナイト—— 実証を 開始 します』

聴きなれないボイスだった。人理開花指定、フラワリングナイト。

グランドオーダーと断言しなければならぬそれは今、新たな戦いへの道を宣言したのだ。

紛れもない異常事態。緊急事態だ。ダ・ヴィンチは指揮を執ってレイシフト中止を行う。マシユは力任せにコフィンを開けようとするもビクともしなければ傷一つすら与えられなかった。

先輩！ と叫ぶマシユの悲鳴すら遠い残響となる。

藤丸の魂がテータ化されているこの状況、彼の五感はずでに閉鎖し淡い光となって”別世界”へと転移される。

マシユたちカルデア一同の努力が空しく終わる中、鎖されていた時空間ゲートが開放される。

身体と魂が分離された今、藤丸は茫洋の光に包まれていくのであった。

穏やかなそよ風が草木をなでる。

昼下がり。柔らかな日差しの下で小鳥たちの囀りが目覚ましとなって藤丸は薄らと瞼を開く。

途端、小さな痛みが走る。頬と手に砂混じりの小石が張り付いているからだ。ハツと意識を取り戻した彼は即座に立ち上がる。

衣服についた砂埃を叩き落とし、背筋を伸ばしてウンと深呼吸する。

今自分に何が起きたのかを覚えている限りで整理し、ダ・ヴィンチ一同のショートコントに苦笑いする。

一応レイシフトは成功しているが肝心の新型コフィンの姿は見られない。成功したのか失敗したのか、はたまた意味消失して消滅したのか、今もこの先も誰にもわからないだろう。

「どこだ……」

辺りを見渡す藤丸の目に映るのは広い平地に一本の街道。他にあらとすれば田園ばかりで田舎そのものだった。

しばらく歩いていると傷んだジャガイモや折れたゴボウなどがあり、ちこちに転がっている。

これだけでも彼にとつては十分な収穫だ。自分が既知している野菜があるということは、どこかおかしな別世界に飛ばされたわけではないと安堵出来るからだ。

道中カルデアに通信を試みたはいいものの依然として応答はない。これまでの特異点でも通信できないことはややあつたため慣れてはいるものの彼は不安で落ち着かない。何せ今回は味方が1人もいない。

一騎当千、万夫不当の英霊たちも、一番長い付き合いであるマシユさえもない。孤独なのだ。

だがそんな状況下でも彼は前に進んだことがある。

この平凡な魔術師が、ごく一般の人々と変わらない彼が、ただ生きるために、死闘に打ち勝つたことがある。

故に彼はこの道を歩く。生きるために、立ち止まることはあつてはならないと。藤丸はもう一度深呼吸する。まずは出来ることから頭をひねり始めた。

「まずは情報収集だな。今が何年で、どこの国かぐら……い——

彼は気づいていなかった。田園ばかりに気を取られ、足元のみしか視界が入らなかつたからこそ今までそれに気づくことは叶わなかつた。

あまりの出来事に彼は思わず尻もちをつく。ロンドンの時計塔、建築王の光輝の大複合大神殿、ウルクのイシユタル門。どれもこれまで特異点で目の当たりにした神秘そのもの。共通しているのは”人の手によって造られた建築物”である。

一目見れば誰もが興奮のあまり歓喜し、高らかに称讃するだろう。だが藤丸が驚愕したのは自然そのもの。人の手で創られたものではない。水が、風が、土が、日が、天の恵みをもたらした自然の創造物。「世界樹だ……」

世界樹。ユグドラシルと呼ばれるそれは北欧神話に登場するトネリコの大樹。その名のとおり、世界を表す巨木であり、根は3つの世界に行き届いていると言われている。

藤丸が目にしたものはまさにその体現である。桃色の花卉を綿飴のように纏わせているその在り様は花の積乱雲だ。

世界樹から視線を下げていくと城塞らしきものが見て取れた。行く当てのない藤丸はそこに人がいると視込み腰を上げた。

「とりあえず、あの城みたいなところに行こう。見た感じだとローマのそれと雰囲気は似ているし、きつと中に城下町があるだろ」

だがしばらく進んでいくと藤丸はあることに気づく。焼け焦げたような跡、巨大なシヨベルカーで掬われたような大きい窪みがあちこち残っていることに。

さらに進むと幾重にも列をなす馬防柵や見張り台が倒壊している。散々な在り様だが藤丸にはもう見慣れていく。

酷く動揺することはなかったがこれから赴く未知の世界に寧ろ緊張で胸が張り裂けそうなのが正直なところだった。そんな彼の前にようやく人影らしきものが見えてきた。

白銀に輝く甲冑に身を包んだ中世ヨーロッパ風な騎士が数名。加えて彼らを取り仕切っているであろう銀灰の長髪をした女騎士の姿を見て藤丸の肩の荷が一つ下りた。

「ん？ その貴公、止まれ！」

緊迫した声の張り上げ様に藤丸は思わず身震いして立ち止まる。

ずかずかと迫り来る女騎士、藤丸が見る限りではその姿勢が救国の聖処女ジャンヌ・ダルクと面影が重なる。

「見かけない服装をしているがどこの国の者だ？ いや、まず貴公の名は？ 名はなんと言う？」

女騎士から漂う清澄な闘気を感じるものの、藤丸は挫くことなく面と向かって断言する。

「藤丸立香といいます。信じてもらえるかどうかはわかりませんが、オレはカルデアという組織からこの地にやってきた別の世界の人間なんです」

「フジマルリツカ？ 男だか女だかわからん曖昧な名だな。

しかし解せないことが一つ。貴公の言うカルデアとはなんだ？ そのような組織聞いたこともない。よもや貴公、敵方の間者か!？」

片手に携える剣を構える女騎士に藤丸は一瞬動揺する。騎士の氣迫に押し負けペースを奪われそうなこの状況下。

こういう時、英霊たちならどう切り返すか、藤丸は頭の中のサーヴァント名簿を閲覧し、ある一人の扇動者を手本とすることにした。

その名は、——ガイウス・ユリウス・カエサル。ガリア戦記などで名を馳せた将軍にして、“皇帝”の語源となった古代ローマ最大の英雄の一人である。

知略があり、弁舌であり、扇動を得意とする天才に藤丸は手を焼かされ苦い経験をされた。しかしその経験とは別に、藤丸はカエサルとの会話の中であることを思い出した。

——『敵を口説くには何をすべきかだ？ そうだな、一つ教授出来るとしたらそれは相手を持ち上げることだ』

——『どういうこと？ それって逆に有利にさせるんじゃないの？』

——『調子に乗った者ほど扱いやすいものはないぞ。好き放題出来るゆえ、自ら墓穴を掘らせることもな。例えるなら、藤丸の時代にある娯楽本でいう”ドラえどもん”と一緒にだ。彼から力でねじ伏せて借りた秘密宝具に頼るマル太に待つのは破滅の連続であろう』

——『やめてください。いろいろと苦情（物理）が来ることになるからそれ以上はダメ絶対』

——『要はな。足元を掬えということだ。それを生かすも殺すも藤丸、貴様次第だ』

ハハハハ。と、ある意味笑えない冗談を口にしながら聖女様から逃げ延びた彼に、今さらとなつたが心の中で敬礼を贈った藤丸。異世界の騎士相手に覚悟を決めるため自分が今知るべきことを整理する。

”まずはこの人から情報を聞き出さないと。この世界のことも、さつき見た戦火の跡についても。むしろ聞きたいことはこっちのほうが山のようにあるんだ！”

藤丸は内心で熱く独りごちした。

「この世界の騎士様はすごく仕事熱心なんです。異国から来たという疑惑だけでここまで警戒しているとはさすがです。国のため、民の

ため、ここまで嚴重な警備を・・・感服しました。どのような鍛錬を積まれてきたのでしょうか？」

「な、なんだ急に」

「オレ、騎士様に憧れているんです。オレの知り合いにも騎士がいるのですが背中にすら追いつけなくて困っているんです。どうかお教え願えませんか！」

「そ、そこまで言うのなら仕方がないな！ うん。仕方がない！」

あつ、紹介が遅れたな。私はハクモクレン。貴公の言う通り騎士ではあるが、ただの騎士ではない。花騎士——フラワーナイト——である。」

”フラワーナイト
花騎士？”

そのような騎士は聞いたことがないと藤丸は目を丸くした。

聖騎士などならまだわかるものの、花騎士というキーワードには全く心当たりがないことに彼は情報マトリクスがようやく開示されたと達成感に浸る。

「花騎士？ 他の騎士様とはまた違うのですか？」

「うむ。貴公もここに来る途中で見えたであろうあの世界花、ブロッサムヒルが」

”世界花？ あの世界樹に見えた巨木は世界花というのか”

「花騎士とは、世界花の選定に認められた強者のことを指す。」

世界の守護者として人類の敵である害虫を排除することこそ我らが使命・・・だった」

ハクモクレンはしばらく口を紡いだ後——、

「あの者たちが現れるまではな」

彼女は強く下唇を噛み締めた。そこへ頃合いを見計らってか、城門から駆けつけてきた一人の兵士がハクモクレンに告げる。

「伝令。ブロッサムヒル”女王”、いえ、ブロッサムヒル”皇帝”からです」

「なに、陛下から？」

「はっ。その者を、カルデアのマスターを王宮に案内せよと」

ブロッサムヒル王宮 中庭

藤丸はハクモクレンから丁重にブロッサム王宮へと案内された。大理石やモザイクなどにより絢爛華麗に装飾されたその豪華さ足るや、まさに栄華繁栄を表している。そんな王宮の中庭に、ハクモクレンの後に続いて足を踏み入れた藤丸はさらに驚愕することとなった。王宮で目に入った多くの桜の大木を余所に、この中庭は薔薇の造花で埋め尽くされている。天井からは魔術によるものなのか、薔薇の花弁が舞い漂う。もはや、彼を呼び出したのが誰なのかは藤丸自身見当がついた。

「恐れながら申し上げます皇帝陛下。フジマルリツカを此処に連れて参りました」

ハクモクレンが片膝をついて面を下げる。彼女の前にいるのはこの国を統べる王にして――、

「そう畏まらずともよいハクモクレン、面を上げよ。そして、――うむ。遅いではないか立香。」

よくぞ参った、――栄枯散華庭園 スプリングガーデン――へ」

ブロッサムヒル皇帝、ネロ・クラウドイウス。かつて第二特異点において藤丸を客将として迎え入れ、ともにローマの危機を救った暴君、帝政ローマ第5代皇帝である。男装を装った赤い舞踏服を身につけ、玉座に身を預けている。

「ネロ陛下!! どうしてここに? それに――」

「うむ。立香が聞きたいことはよくわかる。」

余も二週間ほど前に痛いほど味わったからな。聖杯から知識を与えられることもなくこの世界の情勢、民、政を、それはもうヴェスリオスの噴火の如く学業に励んだからな。

それから城門前での対応はすまなんだ。ハクモクレンたちに立香のことを伝えておかなかったゆえ苦勞をかけてしまったな。

本来ならば余自ら出迎えねばならんのだがそこは許せ。今の余は猫の手も借りたいほど超、超、スーパー忙しい身であるゆえ!!」

最後に誇らしげな顔をしたネロを見たことで、本当に自分が知っているネロ陛下だと確信した藤丸は安堵した。

一人ではなかったのだと、彼は心の底からネロに感謝した。

「お知り合いなのですか？」

ハクモクレンが恐縮するところでネロは頷くと、藤丸の右手を取り高らかに上げる。その手の甲に宿る赤い紋様は、マスターとサーヴァントとの契約の証。すなわち、令呪である。

「これを見よ。これこそ余と立香との繋がり！ 絆である！」

この者こそ、人類史を救うため立ち上がり、我ら数多の英霊とともに戦場を駆け抜け、未来を勝ち取った大英雄！藤丸立香である！！」

ネロは満面の笑みを浮かべるも、藤丸は気恥ずかしさのあまりネロから顔を逸らした。

「どうした立香よ。貴公は紛れもない勇者、もちつと堂々としてよいのだぞ？」

「あはは……。それよりネロ陛下はどうしてここに？」

カルデアとも通信出来ないし」

「通信については余はわからぬ。民衆の前でリサイタルを披露していたらいつの間にかこの世界に立っていたのだ。ナゼカナ！」

本当、余の歌を絶賛していた民たちに申し訳ない」

それはある意味民たちにとっては救いだったと同情する藤丸だったが決して口にはしなかった。なぜなら彼女の歌唱はとにかくヒドい。某国民的青ダヌキのアニメのあのキャラよりヒドいのである。音痴も極めれば殺人ボイスとなるのだろうかと疑問に浮かぶほどに。

「まあ、余の話は今置いておくとして。この世界のことには実際に経験すればわかるだろう。ハクモクレン、貴公に勅令を言い渡す」

再度、片膝をつくハクモクレンにネロは顔をしかめているものの命令を告げる。

「これから藤丸を連れて”ミムイスの湖畔”へ向かえ。

そこでこの世界の何たるかを心身骨身に刻ませてやってくれ」

承知しましたとハクモクレンが顔を上げると――、

「それとな……。け、決してそなたと立香、二人でとラブ的なことをするでないぞ！ よいな！ 絶対だぞ！ 絶対だからな！」

ハクモクレンはポカンと口を開いたまま呆然としていた。仮にも

ブロッサムヒル皇帝である統治者が子供のように駄々をこねているのだ。騎士の彼女からして見れば、この光景はありえない。

「ハ、ハクモクレン・・・さん？」

恐る恐る藤丸が彼女の前で手を振ってみるとハクモクレンは我に返ってすぐ立ち上がりネロに敬礼する。

「はっ！ 皇帝陛下直々の勅令。謹んで承ります。決してそのようなトラブルにはならないよう最善の注意を払います！」

会話が噛み合っていないというか、どこか抜けているというか、このような謁見は二度と見ることはないだろうと、藤丸は呆れたままハクモクレンとともに王宮を後にした。

ミムイスの湖畔

ブロッサムヒルの南一帯に広がる巨大な湖。その畔がミムイスの湖畔と呼ばれており、古くから漁業の場として利用されていたが今では人の姿は見受けられない無人の湖畔。すでに日は沈みかけており、夕日を照らす湖が水平線の向こうに沈む太陽のように美しく眩しく煌いている。

「まさか貴公が皇帝陛下と主従関係を築かれているとは思ひもしなかつたぞフジマルリツカ」

数名の兵士を引き連れ湖の畔に沿って歩くハクモクレン一行。ここに来るまでの道中、何事もなく無事にたどり着いた藤丸だったが誰一人口を開くことがなかつた。彼自身何か会話をしようと試みはあつたが、彼らの”何かに対する嚴重な警戒”を崩すことはあつてはならないとだんまりを決め込んでいた。それが今、彼女の開口一番により緊迫した重たい空気が一瞬にして弾け飛んだ。

「オレも驚きですよ。まさかネロ陛下が先にこの世界に来ていてブロッサムヒルという国の皇帝になっていたなんて」

「皇帝陛下は二週間ほど前にこの地に降臨なされたのだ。たった一人で戦場を謳歌し、瞬く間に怨敵を駆逐し、ブロッサムヒル女王を窮地から救ってくださったのだ」

誇らしげに語る彼女と同様に付き添いの兵士たちも陛下には感謝

し足りないのと次々と口にする。これも彼女のカリスマが引き付けるものなのだろうと藤丸は納得した。しかし今の話を聞いた彼に一つ疑問が浮かぶ。

「どころでどうしてネロ陛下がブロッサムヒル皇帝とされているんだ？」

「ブロッサムヒル女王は害虫の襲撃によって致命傷を負われている。そのため、女王自ら皇帝陛下に代行を任されたのだ。今では——っ、全体止まれ！」

突然の号令にも関わらず兵士たちは前進を止める中、藤丸だけ遅れて足を止めた。

「どうしたんだハクモクレン、何かあったのか？」

「ああ。よく見るんだフジマルリツカ。

あれがこの世界の、人類の敵だ」

人類の敵。そう断言した彼女は剣先を“悪”に向ける。

その全貌は、まさに異形の怪物。ハエのように捉えられるが、藤丸の知るそれとは違う。刺々しい形相、低飛行で湖の水面を滑走し剥き出しの鉤爪を研ぎ合わせながら藤丸たちに急接近してくる。

「あれが”害虫”だ。無差別に人を襲い、喰らい尽くす。それだけが奴らの存在理由だ」

剣を構える。それを合図に兵士たちも一斉に得物を構える。

「いいか？　そこで大人しく傍観しているがいくフジマルリツカ。

貴公がこの世界の救世主足らんとする者ならば——、我らの戦、しかと刮目せよ」

眼前の敵を、花騎士ハクモクレンは見据える。害虫との距離は既に50メートルを切った。中段の構えで佇む花騎士を前に、害虫はさらに羽を急速に加速させ、禍々しい奇声を上げながら突撃してきた。

「全員、私の後に続けえええ!!」

怪物に臆することなく花騎士と兵士たちは害虫に立ち向かった。先手を取ったのはハクモクレン。敵の鉤爪を斬り落とし、続けて剣先を翻して腹部へ打ち込んだ。害虫は痛みに堪え切れず悲鳴を漏らす。しかし害虫に情けは不要。長槍を持った兵士たちが次々と敵の急所

を貫いていく。害虫は悶え苦しむ。四肢は切断され、羽は根元から雑草を抜くように引き剥がされ、トドメにハクモクレンが容赦なく首を断ち切る。その徹底した害虫退治に藤丸は瞬きする暇さえなく、在りのままに起こった戦いを目に焼き付けることしか出来なかった。勝鬨を上げる兵士たちを余所にハクモクレンが藤丸のもとに帰還する。「とまあ、こんな具合だな。この私、花騎士と兵士たちが力を合わせ害虫を始末する。どうだ？ シンプルでわかりやすいだろう？」

「あ、ああ……」

確かに理解した。花騎士の戦闘力、統率の取れた兵士たち。そこに問題は何一つとしてなかった。しかし、藤丸はどこか違和感を覚える。

”あつけなすぎないか？”

嫌な予感がする。と、藤丸は湖の周辺を見渡した。依然として敵影は見当たることはなく静寂に包まれたままである。変わったことがあるとすれば、既に日が沈んでいることのみだった。

「ハクモクレン、害虫つて普段は一匹で行動するものなのか？」

「いや、基本は何匹かで群れを成している。それがどうかしたか？」

「群れだつて!？」

次の瞬間、藤丸たちの周囲を囲むように夥しい数の害虫たちが暗闇の茂みから奇襲を仕掛けてきた。

先程倒したハ工型の害虫の姿も見られるが、それだけでなくイモムシやアリなどの姿をした害虫たちが殺意を持って数で制しにきたのだ。

兵士たちが絶叫する中、ハクモクレンが一喝する。

「怯むな！ 陣形を立て直せ！」

互いに背を預け不意を突かれぬようにしろ！」

押し寄せる敵を次々と薙ぎ倒すハクモクレンの顔には焦燥が募っていた。始めに倒したあの害虫が囷であるということに何故気づけなかったのかと。情けない。と、自身を戒める彼女の顔が一層曇る。

ひたすらに剣を振るう腕も次第にスピードが落ちていく。

「何やってるんだ！ 斬り上げろハクモクレン！」

背後から聞こえてきた指示に彼女は考えるより先に体を動かし、言われるがまま斬り上げる。瞬間、突進してきたイモムシ型の害虫を真つ二つに引き裂いた。花騎士である彼女に対し命令を下したのは――

「何の真似だ？ フジマルリツカ」

「何の真似って、これがオレの戦い方なんだ。勝手なのはわかってる。けど今はオレの指示に従ってくれないかハクモクレン」

何を馬鹿なと答えるつもりが、ふと皇帝陛下の言葉が頭を過る。

”これを見よ。これこそ余と立香との繋がり！ 絆である！”

この者こそ、人類史を救うため立ち上がり、我ら数多の英霊とともに戦場を駆け抜け、未来を勝ち取った大英雄！藤丸立香である！！”

冗談半分聞いていたあの発言が、今となっては真実味を帯びてきた。思えば彼らが害虫を討ち果たした時、その勇姿を称讃するかと思えば害虫の行動原理を問いたり、藤丸の指示がなければ彼女はまともに直撃を受けていた。

これらのことにハクモクレンは藤丸に対して異世界から来た新参者でありながら的確な状況判断が出来るかと推測した。つまり、軍師の才があるとハクモクレンは見込んだのである。

「ふつ．．．、いいだろうフジマルリツカ。今だけ貴公の剣となろう！」
「ああ、行くぞハクモクレン！」

そこから先は藤丸の指示通りに彼女は動いた。合わせて兵士たちも彼女に続いて迅速に行動する。ハクモクレンが前線で害虫を相手取る中、兵士たちは藤丸を中心に円陣となっている。

円陣は三層と重なっており、最前列は剣で敵を切断し、二列目は槍で刺突、三列目は空中から来る敵の攻撃を払う。これぞ藤丸がある英霊から編み出した陣形、呂布奉先が宝具『軍神五兵』が持つ”斬・刺・撃・薙・払”の特徴を隊列ごとに役割を持たせた難攻不落の陣である。

しかし依然として敵の数が減っているようには誰にも見えなかった。次々と茂みの奥から湧いてくる害虫たち。それもあがるが藤丸には腑に落ちない点が一つあった。

”どうして害虫を囿にし、包囲網を築き上げることが出来たのか”

害虫とはいえ今ここにいるのは三種類。ハエ、イモムシ、アリ。害虫という点では仲間であるが、種族としては違う。統率など取れるはずがない。つまり――、

「害虫を使役している親玉がいるのか？」

それも知性のある生物だと藤丸は確信した。でなければ、ただの害虫がここまで念密に事を成せるわけがないと。

だが肝心の親玉を見つけるにも既に夜。街灯などの頼れる明かりはあるはずもなく、見つけるのは極めて困難である。今こそ陣形でどうにかなっているが兵士たちの体力も限界に近い。

ハクモクレンもまた前線で害虫を斬り倒してはいるものの疲労が溜まるばかりだ。このままでは全滅するのも時間の問題であった。

「どうすれば・・・」

その時だった。激しい轟音が鳴り響き、一つの火柱が夜空に昇っていく希望の焰が。その衝撃が害虫たちにも伝わったのか、動きが止まったその瞬間を藤丸は見逃さなかった。

兵士たちの陣を抜け、衝撃に動揺して戸惑う害虫たちの群れの中を掻い潜り、藤丸はハクモクレンの肩に手を置いた。

「ハクモクレン、ここは任せた！」

「なに？ どうするつもりだフジマルリツカ!?」

「あの火柱のところに行ってくる。大丈夫、オレ悪運には強いから!!」
そういう問題ではないと止めに入ろうとしたところで害虫たちの再行動が始まった。攻撃を仕掛けられ藤丸の後を追えない彼女は彼の無事を祈ることしか出来なかった。

藤丸は害虫たちの攻撃を回避しながら火柱のあった方角へ足を進めていく。このような状況、第七特異点の絶対魔獣戦線と比べたらどうとういうことはない、そう自身に言い聞かせながら彼は奥へ、奥へと突き進んでゆく。火柱があつた地点まであと少し――、

「ギシャアアアアアアアッ!!」

背後から追撃してきたイモムシ型の害虫がダンゴムシのように身体を丸めて回転してきていた。生きた車と相手をするのはマズいと、さすがの藤丸も咄嗟に茂みの中に飛び込み身を隠す。

害虫は回転の勢いに任せて藤丸がいた場所を通り過ぎていく。それを確認した藤丸は安堵のため息をついた後、再び走り始めた。

草木を掻き分け、暗闇にも目が慣れてきた中、彼はようやく火柱の位置にたどり着いた。

既に火は治まつており、周囲からは焼け焦げた跡に硝煙の臭いが散漫している。そして灰塵と化した害虫たちの死骸もまた数多く残留していた。間違いなくハクモクレン同様、花騎士と呼ばれる戦士がこの近くにいる。

「誰かいるなら返事をしてくれ！ オレはカルデアのマスター、藤丸立香!!」

この近くで害虫に襲われてて迎撃する人手が足りなんだ。手を貸してくれ!!」

切羽詰まった頼みの綱を敷くが返事はない。風が草木を揺らすだけ。

だが諦める選択しがないのが藤丸立香である。すうつと息を吸い込み、肺を目いっぱい膨らませると、今度は拡声機の如く喉が潰れるほど声を張り上げた。

.....がさがさッ!

何かの音がどこからともなく聞こえてきた。この焦土の中で今いるとすれば花騎士だけだと思っっている藤丸は肩を下ろして息をついた。これで助かったのだと、ハクモクレンたちを救えると。

だが現実是非常である。藤丸が目指した希望が正体を現した時、それは藤丸に不意の一撃を与えた。背後からの突然の攻撃に藤丸は向こう際まで弾き飛ばされた。ハ工型の害虫。体長4メートルはある大型の害虫を前に、藤丸は対抗しようにも武器も何もない。そればかりか背中を打った衝撃で身体感覚が僅かに麻痺している。

「ギギギギ.....」

じりじりと詰め寄る害虫。もうダメかと夜の森で殺されるのを覚悟したその時だった。

彼が、彼女が、運命と出会ったのは――。

「やれやれ。あそこまで叫ばなくても聞こえていますよ。」

「それでは余計に害虫を呼び寄せてしまうだけです」

一閃。煌く星々の彼方から、流星の如く此方へと飛来してきたそれは害虫に防ぐ暇を与えずに一刀両断に処した。逆巻く風が収まる。雲隠れしていた満月が姿を見せ、誰何の声の主を輝かせる。

「問います。あなたが、私を呼んだマスターですか？」

大剣を背にした深紅の女は、その真名を口にした。

「私はモミジ。一番の花騎士を目指す者です」

第1話 「栄枯散華庭園 スプリングガーデン」

月光すら撫で返すようなその日輪の姿に男は絶句した。呼吸も、瞬きも、無意識の中で行われる行動そのものすらすべてを忘れ、彼は一人の女を見据えている。女が武装しているそれは宛ら日本の武者を思わせる装束に、大剣を軽々と背負っている。碧をした自然の色から流れるように紅に染まるマフラーを靡かせる凜とした佇まい。二鈴の着いたリボンを髪飾りとし、瞳を見ればそれは今にも燃え上がるような深紅の双眸。その面影からはある騎士の王と重なる。

要するに、モミジはその名の通り、紅葉の如く美しかったのだ。

『問います。あなたが、私を呼んだマスターですか？』

頭の中で木霊する。

何度聞いたか定型句。

されどこれこそ誓いの儀。

「お、オレは藤丸立香。君を呼び出したマスターだ」

その答えに彼女は一度目を閉じ、一つ間を置いて瞼を開いた。

「・・・そうですか。それで、私は何をすれば？」

「この先の湖にオレの仲間が今も害虫たちと戦っているんだ。力を貸してくれないか？」

「それは命令ですか？」

「命令？ 命令というよりお願いなんだけど」

「了解です。最善を尽くします」

「あ、ああ。頼むよ・・・」

頼もしい花騎士だと、彼は心の中でガッツポーズをする。遠くからでも見えるほどの火柱に、先程の大害虫を一刀の下に処断した迅速な速さと細い剛腕からなる尋常ならざる剛力。恐らくハクモクレンすら軽く凌駕するだろうと過大評価するものの気になる点が一つある。直感が促すのだ。”これを無視するな。”と警告が鳴り響く。

”彼女は笑わない。おまえが彼女を救えと”

「聞いていますか？」

ズイっと顔を覗き込むモミジに藤丸は思わず飛び退く。

「ナ、ナニカナ？ えーつと・・・」

「モミジでいいですよ。呼び捨てで構いません」

「じゃあモミジ。なにか問題でも？」

「先程の叫びが原因で害虫がこちらに攻め寄せてきています。このままでは救援へ向かうのに多少時間がかかってしまいます。そこで、私から一つ提案です」

「提案ってどんな？」

「・・・少し失礼します」

しやがみこんだ彼女はおもむろに藤丸の腰へと手を回す。

「ち、ちよつとモミジさん!？」

「動かないでください」

大荷物を脇に抱えるように女性に抱きかかえられた藤丸は羞恥心に駆られるあまり顔を覆い隠す。

「殿方にしては軽いですね」

「ほつといてください。ところでここからどうするんですか？まさかとは思うけど——」

「はい。大方、想像通りだと思いますよ」

膝を曲げて態勢を低くする。大剣に手を掛けた後、両足に力を入れた瞬間にはそこにいたはずの二人の姿はなかった。あるとすれば、大地を蹴った衝撃で巻き起こった砂塵のみ。

脚力のみで木々の間を跳び上がり、既に地上から10メートル以上は超えている。その高さを維持しながらモミジは木々に跳び移りながら湖へと進む。

「すごいなモミジ。オレと大剣を提げてるのにこのスピード。疲れすら見せないだなんて（胸が顔に当たってるのは黙っておくとして）」

「当然です。このくらいどうということはあります。私は花騎士として一番でないといけないので」

「一番の花騎士？」

「・・・それが約束なので」

それ以降彼女は口を紡いだ。どんな質問でもだんまりを決め込み、結局湖に辿り着くまで会話が成立することは叶わなかった。何かタ

ブーに触れてしまったのかと藤丸は反省するも見当がつかない。

次に地上に目を下ろした時には、既にそこは湖だった。だがその地上との高さが20メートルを超えている。7階建てのマンシヨンの屋上から見下ろしているようなものであり、一般人なら肝が冷えても仕方ない。

「ちよつと、大丈夫なのコレ!? ちゃんと着地成功するんだよね!?

しかもまだ害虫うじゃうじゃいるんですけど!!」

「心配いりません。私に任せてください」

フリーフォール真つ只中、モミジは大剣を掴み取り前方へと持つてくると大剣の柄にある引き金に指を掛ける。

「トリガー・オン」

掛け声とともに彼女が引き金を引くと大剣に裝飾された松葉色のレンズが紅葉色へと変色した。同時に藤丸が見た火柱のそれと同じ、燃え滾る紅蓮の焰が刀身に宿る。

その様は藤丸自身もよく目にしていた。何せ今やブロッサムヒル皇帝陛下であるネロ・クラウディウスもまた、彼女自身が作り上げた芸術至高の剣に炎を灯すのだから――。

「消えろ」

炎を纏ったその剣を一振りしたが最後、その一閃は炎の渦となって悉くを焼き払った。空中降下による奇襲に害虫たちは気づく間もなく忽ち炭化へと変わり果てて逝く。それを余所にモミジは炎の渦で発生した上昇気流を利用し、ゆっくりと地上に足を着いた。世界花の恩恵によりモミジ自身は炎の熱の影響を受けることはない。担がれたままにいる藤丸も彼女の所有物として扱われているためか世界花の恩恵の影響下にあり、熱さでやられることはなかった。

「このまま一気にあなたの仲間たちの救出を行います。よろしいですか?」

モミジが指差す先にはハクモクレンたちの姿があるものの距離が離れている。藤丸は彼らの安否が気になりだったが応戦する兵士たちの掛け声が耳に入ってきたことで少し気を休められた。

「ああ。けど合流したら後退しながらブロッサムヒルに撤退する。頼

まれてもいいかな?」

「了解。それではいきます」

大地を蹴り上げる。風と一体化したようにモミジは一直線に突き進み敵陣を突破する。牙を向けられれば即座に斬り下ろし、必要とあらば害虫を踏み台として回避し、時に害虫を身代わりの盾とした。それも、藤丸を抱えたままの状態で。

あまりにも戦闘に特化している。その動きはもはや藤丸のよく知る英霊そのものだ。もしかしたらアーサー王最強の円卓の騎士にして湖の騎士ランスロットと同等かもしれないと藤丸はそう思わずにはいられなかった。

「モミジ、君は本当に何者なんだ?」

彼女の顔へ見上げてみると、ここまで来ても未だ息を切らすことなく平然としている。悪く言うつもりはないが藤丸は彼女のその在り方を異常に感じてしまう。

最初に見た火柱の火力はサーヴァントのセイバークラスによく見られるスキル”魔力放出”のそれと類似している。武器や身体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出することで能力や威力の向上を可能とするスキル。

今こうして炎剣を揚々と振り回してはいるものの、炎を纏わずだけでも相応の魔力を放出している。世界花の恩恵があるとはいえ長時間魔力を放出したまま戦い続けるのは危険極まりない。いずれタンクは空となり、歩くことも立つこともすらもままならなくなる。にも関わらず彼女は顔色一つ変えることなく戦っているのだ。謂わば、疲れを知らない機械そのものである。

そんな機械を停止させるため、害虫たちが次から次へと津波となつて押し寄せてきた。モミジを危険視したのだ。突然現れたイレギュラーに蹂躪されるのを防ぐために害虫たちは一丸となつて彼女に総攻撃を仕掛けに出る。

「マスター……いえ、団長。少しの間だけ私の後ろに隠れてください」

再び炎の渦を巻き起こす。敵の侵入を許さない結界とも呼べる自然の防御壁の中で彼女はそつと藤丸を降ろした。

「このままでは罅が明かないので私があなたの道を切り開きます」
「何か策があるのか？」

「策？いえ、ただの強行突破です」

片腕だけで振るっていた大剣を両手で構える。上段の構えとともに剣に纏う炎は至上の高みを目指して増大し獐猛な烈火となる。やがて炎は刀身へと凝縮していき、刃は赤く赫耀する。

「お答えします。私が何者なのか？ そんなの決まっていますよ」

声は穏やかに。彼女は坦々と告げる。

「邪魔な奴は消す。往く手を阻むものは何人たりとも残さず駆逐し殲滅する」

両腕に渾身の力が込められる。炎剣はさらに輝きを増していく。

「それが私、一番の花騎士を目指すもの。モミジです」

引き金を引く。刀身からは炎が奔り、焰の嵐が吹き荒れる。

「絶剣——紅炎爆葉刃ツ!!」

紅葉が舞う。最大魔力で放出された炎の奔流は蒸発周囲の害虫を呑み込んでいく。放出時に加速していく魔力の炎は沸騰する湖を蒸発させ、害虫たちを等しく灰塵と化す。微粒子すら残すことなく、魂そのものを断ち斬るかのように。

全てを喰らい尽くす滅却の焰を目にした藤丸は呆気に取られていた。その輝きを前にして震え上がらないものはいない。花騎士も、兵士も、害虫も、分け隔てなくその業火に恐れ慄くだろう。しかし藤丸は違った。恐怖することも、戦慄することもなく、男はその炎を美しいと歓喜する。

男の手には一枚の紅葉。温かな熱を帯び、音を立てることもなく紅葉は蝋燭の火を鎮火するように消えた。伝わってきたのは炎への絶望でも散っていった害虫たちの悲鳴でもない。どこか重たい、正反対の冷たい何か。

「ハクモクレンツ!!」

藤丸はモミジが斬り開いた道を頼りにハクモクレンたちと合流してきた。彼らの周りに害虫は見当たらず、既に安全圏となっている。

「無事だったかフジマルリツカ！」

「戦況は？」

「案ずるな、全員無事だ。それより一刻も早くここを離れるぞ。またいつ襲撃に見舞われるか」

「わかってるー！けどモミジが」

走ってきた行路に振り返る。モミジは一人で害虫の進撃を大剣一つで凌いでいるがその動きにふらつきがしばしば見受けられた。魔力の使い過ぎが原因だと誰もが見抜けるほどに。

「彼女を助けないとー！」

藤丸は慌てて駆けつけようとした直後、ハクモクレンに手首を掴まれ引つ張られた。

「ダメだ。ここはあの者に任せて我々は撤退する」

その落ち着いた冷酷な響きに藤丸は反感する。

「どうして!?!」

「当然だ。貴公は客人であり、ネロ皇帝陛下の主。そして我らの世界を救うために此処へ現界した救世主なのだろう？みすみす死なせる者が何処にいる?」

「そ、それは・・・」

「世界を救ったならばわかるだろ？少数の犠牲で多くの生命が救われる無情の摂理を」

世界は残酷だと彼女は嘆いた。そのとおりだと彼も嘆く。無慈悲だとも。

——でも、だからこそ、

——諦められない。

藤丸は勢いに任せてハクモクレンの手を振り解き、がむしやりに走り出した。目指す先は炎の激流。今にも枯れそうなモミジのところへ。

「フジマルリツカ！」

生まれと命令するも彼は耳を貸さない。

「くそつ、貴公たちは先にブロッサムヒルに戻りこのことを皇帝陛下に伝えて応援要請を頼む！」

「し、しかしそれではハクモクレン様が」

「私とて花騎士だ！彼らを連れて戻ってくる。早くいけ、これは命令だ!!」

そうして檄を飛ばした彼女もまた、藤丸を追ってひた走っていた。

モミジの身体は既に限界を迎えていた。

魔力の残量すら底を尽きかけている。魔力放出による炎すらも作り出せる回数は指で数えるほどしかない。

風前の灯火。ついには害虫の攻撃すら容易く受けてしまう始末。大剣で防ぐも力で押し負け、後方へと空高く吹き飛ばされた。

思えば、どうして彼を助けたのか。彼女には一番の花騎士になるという約束があるというのに。気がつけば自ら死地を選ぶほどに、しんがり殿を果たしてまで守ろうとした自分に理解が苦しむ。

始めはただの気紛れに過ぎなかった。手当たり次第に害虫を討伐している中、偶然にも男の救援要請が聞こえてきただけ。助けるつもりなど微塵もなかった。他者との関わりを持ちたくなかった。面倒事に巻き込まれるのは御免蒙ると。それなのに彼女は救ってしまった。無意識の内に害虫を斬り捨て、何も考えないまま男に振り向き、まるで何か大切なものを、失くしたものを見つけたかのように――、

——『問います。あなたが、私を呼んだマスターですか?』

月光の下には一人の少年。それなのに何故だろう、女の瞳にはもう一人の影が見える。霞がかかったその影は、今は遠きうたかた泡沫の理想。追い求め、隣に立つことすら叶わない姉の姿が重なり合うその在り得ない幻想に、妹は可能性を見出したのだ。

これが運命だと妄信し、彼の隣であればいつか夢見た奇蹟に立ち会うことが出来ると、彼女は一つの賭けに出たのだ。

故に剣を取る。モミジは剣を杖代わりにして立ち上がった。彼の傍にあるにはこの程度の敵は倒さなくてはとならないと強迫観念につき動かされる。

「私が、一番であるために」

引き金を引く。残りの魔力が地に突き立てられた大剣に注ぎ込まれる。剣先から迸る炎は地を這いずり周り、土竜の如く幾つもの火柱

が出現した。それとはまた別に剣を抜き取り大地に向けて横一線に振り下ろす。放出された炎と刃との摩擦熱が連鎖し炎の壁が聳え立つ。式段構えの防壁に害虫たちはどうしようもなく後退し、一部は遠回りして追撃に向かった。

「私が、一番・・・」

いよいよもって魔力切れ。立つのがやつとの状態の中で、モミジは思わず膝をつく。意識が朦朧とし、ついには倒れようとしたその時、視界が一瞬真っ白になった。眠ったわけではない。手探りで握ったのがつしりとした誰かの手。

「しっかりとくれモミジ」

顔を上げれば、そこには藤丸の姿があった。

彼はモミジの肩に手を回し、引き摺るように歩いている。

「すみません団長・・・。力及ばずで」

「何言ってるんだ。モミジのおかげで兵士たちは無事だったよ。本当に助かった」

「けど結果として、あなたの足を引っ張ってしまっています・・・」
自分で歩けますからとモミジは振り払おうとするが力が入らない。
「無理しないでくれ。君は十分戦ってくれたんだから今度はオレの番だ」

重い足取り。モミジだけならまだしも装備や大剣を合わせて担ぐとその重量は百キログラムを超える。それでもなお藤丸は懸命にモミジを連れて退却しようとしている。

申し訳なくうなだれるそんなモミジにまた一人、手を差し伸べる者がいた。

「まったく。世話が焼けるぞフジマルリツカ」

交代だと言い切り、藤丸からモミジを引き継ぎ軽々と担ぎ上げる。無論、商隊は同じ花騎士であるハクモクレンだった。

「救援、感謝するよハクモクレン」

「感謝など不要だ。我々はこの者に命を救われた身。ならばこの命はモミジ、貴公のために使っても構わないのだからな」

しかしだな。と、彼女は続けて口にする。

「この状況下で単独行動するのは控えてくれ。貴公に何かあれば私では責任が取れないのだからな！」

「そ、それについては・・・反省します」

走り去りながら叱られる光景にモミジの口元はほんの僅かにだが笑みを浮かべていた。

害虫が追ってくる気配はなく、三人は道中ですれ違った商人の馬車に乗り込み命からがらブロッサムヒルへ落ち延びたのだった。

ミムイスの湖畔

「——ああ。あれがカルデアのマスターか」

今や誰もいない湖畔にて、一人の姿が水面に映っている。

顎に手を当て、何か考え事をしているかのようにその者は静かに口を開いた。

「小手調べのつもりでたった少しの害虫どもを向かわせたが、いやはや彼は中々どうして興味深い」

ククククと、闇夜の中で笑いを堪える。

だがそれも限界がきたのか、激情のあまりにその者は歓喜の雄たけびを上げる。

「アツハハハアハハツハアッ!! これが!? このような小童に敗北したというのかゲーティア!! なんて、なんて愚かなんだ!! 蟻が像に踏みつぶされるがごとく、人の血を求めた蚊が叩き潰されるかのよう、貴様は強者であるはずが敗者の側であったと? 滑稽だ! 滑稽過ぎるツ!! 道化にも程度があろうにあの無能王がアああアああアツハハハハハハ!!!」

腹を抱えて笑いに笑う。幼子のようにゲラゲラと、しかし途端に、彼の嘲笑はピタリと止まった。

「だがあれはなんだ? 花騎士モミジだと? あれほどの花騎士がまだ他にいたとは、私の調査もまだ不十分か。今一度情報洗い直す必要があるな」

チツ、と舌打ちをするその者の顔は酷く眉間にシワを寄せる。

「忌々しい。忌々しい。忌々しい忌々しい忌々しい花騎士どもめ!!」

いや、世界花もそうだ!! 最後の手段に出たのか知らんが英霊どもを呼び寄せるなど味な真似をしゃがって!! どこまで私を愚弄すれば気が済むのだああああああああああッ!!」

ガンガンと乱暴に足踏みする。何度も何度も繰り返し、気が済むまで苛立ちを踏み鳴らした。

「まあいいでしょう。この世界が減びるは必定。精々抗い続けろ。破壊と再生を繰り返し、爪先から頭の天辺に至るまでじっくり削ぎ降ろされるがいいさ。」

しかしカルデアが絡んできたとなると厄介ですね。早急に手を打つとしましょう」

この日を境に、庭園の楽園は、————スプリングガーデンは牢櫃と化す。

逃げ道などもはや在りはしない。

入るものはご自由に、拒むことなど一切あらず。

ただし、出ることは叶わずと知れ。

此処はそういう世界となった。

いや、——千年前からそうだったのかもしれない。

” ようこそ。——栄枯散華庭園 えいこさんかていえん スプリングガーデンへ”

×

ブロッサムヒル王宮 客室

気がつけば、オレはベッドの上で寝ていたようだ。

カルデアとは違う、セレブリティ御用達の高級感溢れるベッド。

見慣れない天井に見知らぬ部屋。

だが豪華すぎる。綺麗すぎる。一言で片づけるなら王室だと言っても過言ではない。

いったいどうしてこうなったのかと、記憶を辿ろうとした時——、「あつ、気がつきましたか団長。おはようございます」

隣から聞き覚えのある声が耳に届いた。

同時に、今まで何があったのかがフラツシユバツクとなつて襲つてきた。

ありえないレイシフトのこと、別世界であること、花騎士と害虫という存在のこと。

事の顛末に至るまで全て映像となつて確認できた。

しかし妙な違和感が襲つてきた。

”団長”、というマスターとはまた別の呼び名に困惑したがこの声が誰のものであるかはすぐに思い出せた。

「おはようモミジ。体の方はもう大丈夫なのか？」

「おかげさまで。団長のおかげで私の魔力も幾分回復出来ました。本当にありがとうございますでした」

椅子から立ち上がつて頭を下げる彼女にオレは手を横に振る。

「いやいや、オレのおかげじゃないよ。ハクモクレンが君をここまで連れてきてくれたんだ。礼なら彼女に言つてくれ」

「ええ。彼女にもお礼を申し上げます。そのハクモクレンさんですが、伝言があります。

”今回は危険な目に合わせてしまつて済まなかつた。不躰がましいが縁があればその時はよろしく頼む”とのことですよ」

「ハクモクレンらしいね。礼を言いたいんだけど会いに行くことは出来るのかな？」

「難しいですね。ここ最近、害虫の活動は活発で、警備の人員も人手不足です。聞けば彼女はブロッサムヒルの警備隊長。そう安易に会合するのは難しいと思います」

やっぱり難しいか。

それは仕方ないとして、今何時か些か気になる。

「そうです。忘れていました。朝食の用意が出来たと、先程メイドの方から報告がありました」

もう日が昇っていたのか。

目覚めてから時間も経つたおかげで今では小鳥たちの朝を告げる鳴き声が鮮明に耳へ入ってくる。

「立てますか団長？」

モミジが手を差し伸べてきた。

これは断るわけにはいかない。

彼女もまた一人の騎士なのだから恥をかかすわけにはいかない。

「ありがとう。助かるよ」

手をしっかりと握る——はずだったのだが、起床したばかりなのか手に力が入らず——

そのまま床に転げ落ちてしまった。

「だ、大丈夫ですか団長？」

うん、クリーンヒット。

顔面から落ちたのは痛かったがおかげで目が冴えてきたのもまた事実。

すぐ立ち上がって何ともないと平然を装った。

が、空気が重い。

何か、何か話題で切り抜けないと！

——あつ、そうだ。

「と、ところでさつきから気になってたんだけど。オレのこと団長って呼ぶけど団長って何なの？」

決して苦し紛れに咄嗟に思いついたわけではない。

昨日も今も、モミジが“団長”と何度か呼称してきたのが気になっただけだ。

そういえばそうでしたね、とモミジは続けて口にする。

「あなたはこの世界の常識をまだご存じですね。ハクモクレンから聞いていますよ。異世界から来訪してきた英雄だと。団長のことを知らないのも無理もないですね。」

この世界では花騎士が人類を守るために害虫と戦っていることは言うまでもありませんね。では、その花騎士を統括しているのは誰だかわかりますか？」

「まさか、それが団長だと？」

「正解です。団長は花騎士を束ねて騎士団を結成しています。今や騎士団は欠かせない存在。各地で日々花騎士と協力して害虫駆除を

行っているわけです」

・・・ふーむ。

つまりはマスターと一緒にいうわけか。

それなら納得の領きも出来る。

どこの世界もリーダーは必要不可欠なんだなと思つた矢先に――

バンツ！

と、部屋の扉を力任せに開く音が室内に響いた。

「遅いではないか立香！」

ズンズンと怒りを露わにしながら歩いてくるネロ陛下。

何か癩に障るようなことでもあったのだろうか？

「いつまで余を待たせるのだ戯け！せっかくの朝食も既に冷めてしまったわ！これには余の宮廷シェフ一同も激おこ！」

あわわわ。

陛下の額にツノが！ ツノドリルが見えまする！

さつきモミジが朝食の件を伝えてくれたけど、まさか皇帝陛下と一緒にしてのブレークファーストだったのか!?

すみませんすみませんとオレは何度も頭を深く下げた。

「冗談だぞ。待つのも飽きたのでな、こうして余自ら呼びに来たのだ」「すみません皇帝陛下。これからそちらへ向かうはずだったのですが、私が彼に団長について説明していたので遅くなつてしまいました。申し訳ありません」

「む？。そうか。モミジがそう言うのであればそうなのであろう。世話をかけてすまなかつた」

あれ？

なんかやけに彼女に対しては甘いような――

「ネロ陛下、モミジのごとご存じなので？」

「ご存じもなにも昨晚貴公と一緒にここに連れて帰つてきたではないか。立香が眠っている間にいろいろと武勇伝を語り合つたのだ。」

これが中々盛り上がったな。モミジも余と同じく炎を纏う戦士ときた。であれば、親近感が湧く！

今までのセイバーはビームだったりワープだったり即死という名

の悪即斬とやりたい放題!

最近ではなんだ? DX聖剣エクスカリバーというのか? 余もああいう宝具を作りたい! 欲しい!!」

いけない、それ以上いけない。

自分の世界にダイブするのはいいけども、今そうなつては面倒このうえない。

「ネロ陛下、本日の朝食はいかような?」

「む? イカなどないぞ? 何はともあれ早く食堂に行くぞ立香。スープでも飲みながらこれからのことについても話さねば」

これからのことか……。

昨日は全く考える余裕すらなかったな。

ただ目の前のことでいっぱい。

この世界に来た時にも感じたけど、誰かが隣にいたことがこんなにも心の支えになるものなんだなと感慨深い。

「何をしておる立香。早く余について来ぬか」

「団長、どうぞこちらへ」

いつの間にか二人は部屋の外でオレを待っていた。

そうだ。まずは腹ごしらえだ。

この世界に来てからまだ何も口にしていないんだった。

「はいはい。今行きますよ」と

ブロッサムヒル王宮 食堂

ホント、さすがと言うべきか。

縦長の高級テーブルの中央にある燭台を中心に色とりどりの料理が並んでいる。

ライオンの顔の剥製が大理石で出来た壁に飾られてるけどこれはたぶんネロ陛下の趣味なんだろうな、ネロちゃんライオン好きだし。

第三再臨の姿なんて――

いけないいけない、今は食事中だった。

手始めに湯気が立つスープを一口。

「……美味しい」

思わず呟いてしまった。

「そうであろう？　そうであろう！」

何せ余の手作りなのだ！　もーっと味わって食すが良いぞ!!」

「え!?　陛下自ら?」

それはすごい。見た目はただのオニオンスープ、しかもこれを調理したのがネロ陛下というのだから当然箔が付いてより美味に感じる。

いつの間にこれほどまでのレベルに？

いや、というより料理出来るんですね陛下。

「モミジもどうだ？　このサルティン・ボツカも余の自信作だ！

トッピングにケツパーをかけてみるのもまた格別だぞ」

「は、はい。そちらもありがたく戴きます」

なんか押しつけがましく見えるけど陛下があれだけ推しているということはそれだけモミジのことを気に入ったのだろう。

美少年でも美少女でも美老年でも、美しくあればなんでも寵愛を受けるに値すると豪語していた記憶がある。

「さて、それでは早速だが本題に入ろうと思う」

片手のナイフを指でクルクルと回しながら陛下は仰せられた。

「これからのことだが、朝食後に立香にはウインターローズである調査をしてもらいたいのだ」

「ウインターローズ?」

頭の上にハテナが浮かぶ。

そこへ当然のようにモミジが解説を始めてくれた。

「ウインターローズは雪が絶えることのない白銀の国です。そこで見られる雪景色は大変美しく皇帝陛下もお気に召すかと」

「うむ！　口にするのは悪いが実際余もブロッサムヒルではなくウインターローズで女王になりたかった！

ウインターローズ、冬のバラ、すなわち薔薇の皇帝である余に相応しい！」

ああ、それは確かに同情してしまう。

しかしウインターローズか。現代でいうロシアみたいなところだよな……。

うわ、間違いなく寒さで死にそう。昨日のことのように覚えている

よ、クリスマス、プレゼント、トナカイ、サンタム・・・、うつ、頭が。

「団長、大丈夫ですか？ 顔色が青ざめて・・・」

「苦い経験があるのだ立香にも。でだ、ウィンターローズでの調査と
いうのはな。」

” 聖杯探索” だマスターよ」

!?

・・・いや、何となく想像はついていた。

今さら驚くまでもない。今までずっとそうだったのだから。

聖杯を回収して特異点の修復を行う。それがグランドオーダー。
魔術世界における最高位の使命だ。

「もしかして、オレがこの世界に来たことと何か関係があるんですか
？」

「大いにある。今まで関係なかったことなどあるまい」

「ごもつともです。でもどうして聖杯がウィンターローズに？」

「それがな、その聖杯のことなのだが・・・、七つあるのだ」

・・・はい？

聞き間違いかな？

「聖杯が七つ？」

「驚く必要があるか？ というか、今さら聖杯が一つや二つ増えたところ
で変わらぬであろうに」

「変わりますよ！ 仮にここが特異点だとして聖杯が七つもあるのは
前代未聞です！」

冗談でも笑える話じゃない。

聖杯一つ回収するだけでも過酷だというのに。

「すみません。聖杯とはどのようなもののですか？」

「あらゆる願いを叶える願望機。と、聞こえはいいが実質厄介な代物
でな。これが元凶となって様々な異常事態を引き起こされるのだ」

「願いを叶える、ですか？ 本当にそのようなものが」

「限度もあるがな。それはそうと立香よ。これを受け取るがよい」

モミジに聖杯の説明を終えた陛下が一枚の紙切れをカードでも投

げるかのように渡してきた。

見れば、紙に書かれているのは何かの地図のようだが。

「朝食を済ませたらそこへ行くがよい。貴公の助けとなるものが待っておるぞ」

「もしかして、陛下以外にもここにサーヴァントが？」

「さて、どうか」

もったいぶる陛下はグラスに注がれたワインを優々と口に運ぶ。

オレも他に何か食べるとしよう。

「聖杯、ですか……」

不意に、モミジの呟きに耳が反応した。

今の話を鵜呑みにすれば、誰だって欲しくなるのは決まっている。だからこそ、聖杯戦争なんて物騒な殺し合いが行われたりする。モミジにも叶えたい願いがあるのだろうか？

一番の花騎士になることが彼女の目標であることは知っているが、果たしてそれを聖杯で成就していいものかどうか。そこはモミジ次第か。

「皇帝陛下、お願いがあります」

「む？ 藪から棒にどうした？」

よいぞ、何でも申してみるがよい。貴公には我がマスターが大変世話になったからな。たいていの願いは聞き入れようぞ」

上機嫌な皇帝陛下にモミジは礼を言う。

改まってどうしたのかと聞く耳を立ててみる。

「私も、その……聖杯探索に——」

「よいぞ」

「即答ですか陛下よ」

頼む前に了承しちゃったよこの王様は。

「もとよりそのつもりで話しておったのだぞモミジよ。いや、こちらも手を回せる花騎士がおらぬでな。何せ未だ害虫の侵攻は沈まぬばかりか、この都市の復興作業にも人手や時間がかかる。

そこへ、フリーランスの花騎士である貴公が来てくれたのだ。これはもはや運命であろう！」

フリーランスの花騎士？

つまり、騎士団に所属していない花騎士ということか。でもどうしてだ？

あれだけの強い魔力を持ち合わせているのに在籍していないなんて。何かワケでもあるのか？

「立香、異存はないな？」

モミジとともに聖杯探索の任務、いや、クエストといったほうが冒險らしくてよいな。クエストのほう、任せたぞ！」

RPGか何かに影響されたのかな？

何であれ言われるまでもない。

「じゃあ改めてよろしく、モミジ」

「ごちうこそ、よろしくお願いします団長。命令には逆らいませんので何でも申し付けてください」

ん？ 今——

「何でもすると言ったなモミジよ！」

「どうして陛下が反応するんですか！」

「お決まりであろう！」

何でもする。略して”ナニする”を使うとはやはり余の目に狂いはナカッタ!!」

略になつてませんしその目は曇っています。

しかし命令には逆らわれないと断言したからには——、

目線が欲望に負けてモミジの胸に行き着く。

デカイ。マシユより大きいのではないだろうか。

いやデカイ。とにかくデカイの一言に尽きる。

Oh、アノ胸ニ飛び込ンデミタイデース！

「マスター、鼻の下が伸びておるぞ」

いかんいかん。危うく理性蒸発するところだった。

なんにせよネ口陛下からのクエストどおり、聖杯探索して回収しない。

オレは朝食にも関わらず、勢いに任せてテーブルにある料理へ次々と手を伸ばしていき満足するまで腹を満たした。

「おお、そうであった！ 大事なことを忘れていた！」
手のひらに拳をポンと乗せる陛下。

何か重大なことでもあったのだろうか？

「立香、モミジ。ついてまいれ！」

中庭で儀式を執り行うぞ！」

陛下が席から立ち上がった次の瞬間、モミジの体が前触れなく浮いたのが目に見えた。

その時にはすでにオレも宙に浮いており、抵抗も空しく終わる。

オレもモミジも、どうやらネロ様に襟首を掴まれているようである。

オレたちは飼い犬に付けられたリードを引っ張られるように、童心へ帰られた陛下に連れまわされたのであった。

ブロッサムヒル王宮 中庭

振り下ろされたオレたちがいる場所は、昨日訪れた中庭だった。

今日も今日とて薔薇の花弁が風に身を委ねて辺り一面を舞い踊っている。

——にしても苦しかった。

襟元を引っ張られるのだからそれは首も締まるしまる。

見ればモミジもケホケホっとツライ咳をしていた。

ネロ様の筋力ランクはDと低いのに侮れない。

無理やり散歩させられる犬の気持ち少し共感出来たよ。

だがそんなことはお構いなしでネロ陛下はるるんと鼻歌混じりで壇上に駆け上がる。

「急で済まなかったな二人とも。しかしこれから行う儀式は貴公らにとって大変重大なことなのだ！」

「重大なのはわかりました。それがいったいオレたちにどう関係しているんですか？」

「うむ。儀式というのはだなマスター、いや、余もモミジに習って団長と呼ぶべきか。団長と花騎士との間に魔力供給のパスを繋ぐことにある」

魔力供給、文字通りマスターがサーヴァントに魔力を供給すること

である。

サーヴァントは魔力がなければ現界を維持することが叶わない。だからこそサーヴァントはマスターからの魔力供給というバックアップが必要不可欠なのであり、無下にマスターを殺されないよう警戒するものなのだ。

実際、もし昨日の夜、オレとモミジとの間に魔力供給のパスが通っていたら彼女が倒れることはなくスムーズにブロッサムヒルへ帰還出来ただろう。

「確かに、パスを通すことが出来ればこの先の戦いでモミジへの負担も少しは軽くなる……。でもどうやって繋ぐんですか？」

「そんなの決まっておろう」

ネロ様がこつち来いと手招きする。

オレとモミジは互いに顔を見合わせる。

どちらも不思議な表情を浮かべていたが指示通りに壇上へ上がる。そこでようやく気付いた。

床に水銀で描かれた魔法陣の紋様。消去の中に退去、四つの退去の陣が刻まれた英霊召喚の陣がそこに在った。

魔法陣の後ろには一つの祭壇が、その上に月桂冠が置かれている。冠を手にした王様はモミジの頭にひよいと被せると――

「さあ、余の勅命である！」

今、この場で、誓いの口づけをするのだ！」

——はい？

なんですとおおおおとおおおおおおお！

「何をしておる？ この程度が出来ずして世界が救えようか？ 否！」

「否！ じゃないですよバカ王！」

なぜに？ 何故ベーゼなにゆえの形でなければいけないのですか？

そここのところk w s k！」

「命令とあれば私は構いませんが」

「ほらご覧なさい！ モミジもこう言っ——」

え？ 今なんて——

人の尊厳を、選択の自由を縛ってまで、オレはそこまで求めてない。
こんなのは間違っている。

そう結論付けた時――、

「――もうよい」

陛下がオレたちの間に割って入ってきた。

「すまぬな。少々貴公らを試させてもらったぞ」

「試したって、こんな悪趣味な方法ですか？」

オレは少し声を荒げて言った。

「許せとは言わぬ。しかし必要なことだったのでな。立香もここに来る時に見たであろう。この王宮とともにある世界花を。」

フロッサムヒル

この世界は世界花に認められてこそ守護者の生業が成せる。

余はその代行者だ。そも、此処に現界出来ているのも余が世界花によつて召喚、契約したことに他ならない」

「待ってくれ。世界花と契約？」

「じゃあ今オレとのパスは繋がっていないのか？」

「安心せい。契約といつてもその内容が違うだけだ。立香とのリンクは途切れてはおらぬ。」

「どうやら世界花はカルデアのパイプラインを接合したようだな。」

「今の余はカルデアからの魔力供給を世界花によるパイプラインを通して得ておるのだ。」

ユグドラシル

「――本当に、我らの世でいう世界樹だ。異世界にまで根を張り、こうして救済を求めるとは、英霊として捨ておくわけにはいかぬであろう」

悠長に語るネロ陛下。

この世界に英霊が限界出来る仕組みシステムについてはわかった。

だがまだ理解できないことがある。

なぜ世界花に認めてもらうための方法がベーゼでなければいけなかったのか？

「それとな。先のベーゼの件だが、アレは貴公らが不純でないか確かめるためのものだったのだ」

「不純、ですか？」

「そうだともモミジ。戦士は常に純粹でなくてはならぬ。邪念や私利私欲に囚われることのない真白の心を胸に抱くことが不可欠なのだ」
それは確かに一理ある。

そんなものを持ち合わせている者に世界を任せてはいられない。
「ん？もしかして儀式はこれで終わりですか？」

「まだ誰も終了の鐘は鳴らしておらぬぞ立香。」

とは言ってもほぼ終わりだがな。

では立香よ、召喚の陣の中央に立つがよい。そして令呪が宿りし手を天に掲げよ」

陛下に誘導されるがまま、オレは令呪を掲げた。

瞬間、それまで穏やかだった風が強風を巻き起こした。

窓はガタガタと揺れ、装飾された木々とともに二重奏を奏でる。空で浮遊していた薔薇の花弁はより一層鮮やかに舞い踊っている。

唐突な突風で一瞬目蓋を閉じてしまったが、開いてみれば令呪は赤い閃光を輝かせていた。

太陽のような温かさを感じる。

次第に光は強く増し、気がつけば視界は真っ白になった。

——夢を見ている。

夢と言っても視界に映るのは白い世界。

地面も、空も、海も、本当に何も無い、一面真白の無空の世界。あるとすれば、今あるこの意識と、二人の人影。

一人は、清廉そうな少女。

一人は、その背中を追う無垢な少女。

背中を追う少女は言った。

「——と肩を並べて戦いたい」

清廉そうな少女は言った。

「騎士学校で一番になったらね」

そうして背中を追う少女は、清廉そうな少女に置いていかれた。

残された少女は唯一人、剣をもって走りゆく。

その先には何もないというのに。

その先には誰も待つものはいないというのに。

——少女は一人、剣をもって荒野を駆けてゆく。

気がつけば、正しい光景が前触れなく目に入ってきた。

態勢は変わらないままだ。

オレは令呪に目をやる。輝いていた令呪は今ではすっかり電池が切れたように輝きを失っている。

「これで儀式は終わりだぞ立香。ご苦労であったな！」

背中をバンバン叩いてくる陛下には申し訳ないが、オレは今見た光景が頭から離れなかった。

儀式とかそういうのは問題じゃない。

ただ、あの夢の続きが気になって仕方がない。

「モミジよ、立香から魔力を受けているのがわかるか？」

「はい。確かに団長から魔力の供給を感じます。

でもどうしてでしょう？ 私は何もしていませんが」

「花騎士は世界花の恩恵を受けているであろう？ それと同じだ。

カルデアから流れる魔力を世界花が受け取る。

そこから世界花とパスを通した立香に令呪を通して供給する。

立香の傍にいる限り、魔力供給が途切れることはないが、遠ざかれれば供給量が遅れてしまうのが難点だがそこは問題視する必要はあるまい。

ほれ立香、いつまでボケっとしておる！」

考え込んでしまっていたオレに陛下はさつきより強力な平手打ちを見舞う。

背中に衝撃が迸り倒れそうになったが、足を踏ん張って何とか持ちこたえた。

「ではあとは任せただぞ立香、モミジよ。

余が貴公らに今してやれることはこれだけだ。

ウィンターローズへ行き、聖杯を回収してくるのだ！」

キリツとドヤ顔で決めるネロちやま。

もしかしてそれが言いたかっただけなんじゃないかと疑ったが過

ぎたことは水に流そう。

——それからして、身支度を済ませたオレとモミジはネ口皇帝陛下に旅立ちを祝福されながら王宮をあとにした。

×

ブロッサムヒル 城下町

さて、儀式を終えたオレたちは王宮から離れて観光がてら城下町を見て回っている。

ウインターローズへ行く前に、朝食時にネ口陛下から投げ渡されたメモ。これに書かれた地図を頼りに目的地へ向かっているわけである。

さすが都市国家だけあって人通りも多く賑わっている。

食事中に聞いた話だが、二週間前にここブロッサムヒルでは害虫による大規模な襲撃に見舞われ多くの被害にあったようである。

そのせいか、周りの建物には破損した箇所が幾つも傷跡が残っている。

それでも今こうして町の復興のためにと日々汗水流して働いている人々の姿からは諦めない鋼の意思を感じさせられる。

ウルクの時と同じだ。うなだれている者は一人としておらず、絶望することなく最後まで生きようと戦いを放棄することのなかった戦士たちだ。

「すごい活気だな・・・」

「ええ、私もここに来るのは久方ぶりですが、ここまで生きる活力で満ち溢れているとは思いませんでした」

いや、それにしても——

「花屋が多いね」

武器屋に喫茶店、書店やアパレルショップ、青果店など多くの店舗が見られるが、何故か花屋だけが他とは違い多く点在している。

「当然です。この世界では花騎士に憧れを抱く人が多いので花を求めて止まない人が絶えません。花のない家は枯れるように衰退して滅

ぶと、変な迷信まで広がるおかげで花屋は毎日商売繁盛ですよ」

「最後のはちよつとアレだけど、それほど人々に愛されてるんだね。花も、花騎士も」

「そうですね。ですからそれだけ私たち花騎士もご期待に応えないと——、あつ、その角を右に曲がれば目的地に到着します」

モミジが指差す場所にはデカデカと看板が掲げられている。

なんだアレは・・・よく見ればそれは文字、ではなく壁画じゃないか。

加えて、あのライオンのように物静かに居座った姿から見て取れる神々しさは間違いなくSPHINX^{スフィンクス}！

ここには似つかわしくない異文明の象徴が描かれているのは現実か？

認めたくないがこれは現実。夢まぼろしの如く নয় ではない。是非もないネ！

「団長？ どうかしましたか？」

膝をつかれて・・・足の調子でも悪いのですか？」

「い、いや。そうじゃないんだけどさ」

どうあれ行くしかない。

もう誰が待っているか検討はついてるけども。

オレは両手をついて腰を高く上げる。

これぞ、現代人の誰もが構える始まりの型、クラウチング・スター
トー！

空想のピストル音が鳴った！

ならばあとは走り切るまでだああああッ！！

「団長、どうしたんですか急に!? 待ってください団長!!」

ブロッサムヒル建築ギルド ラムセス

「よくぞ来たな、藤丸立香！ そして可憐なる花騎士よ！」

屋根にピラミッドがデザインされた、黄金色の煉瓦で建築された施設にその男はいた。

室内はさつきまでいた王宮と比べたら流石に狭く感じるが、オレとしてはこっちのほうが好ましい。

さすがに中は金ピカで染まっつてはいないものの、エジプトで見られる壁画が壁全域に描かれている。所々にスフィンクスの石像だったリアヌビス神の置物、ぶつちやけ言っつてしまえば室内は、ザ・エジプト。

個人的にソファーに置かれているメジェド神の特大ぬいぐるみが、この摩訶不思議ワールドを和ませる唯一の救いと見た。

しかし褐色の肌に太陽の色をした眼を持つこの神王。フアラオ

いつにも増してテンションが高いのは気のせいだろうか？

王自ら出迎えるというのも信じがたい光景だったが何か裏でもあるのか？

「やっぱりあなた様でしたか、太陽王オジマンディアス様」

「太陽王？」

「知らないのも無理ないよ。この王様も、オレやネロ様と同じく別世界から来たんだから」

「そうなんですか。初めまして、花騎士のモミジです。団長がいつもお世話になってます」

「これはこれはご丁寧なことだ。我が名は太陽王オジマンディアス。神にして太陽。地上を支配するフアラオである。余のマスターが世話になったようだな」

ん？ あれ？

フアラオこんな感じだったっけ？

なぜに互いに握手する？ そんなキャラじゃないでしょ王様！

それになんかお母さん同士の挨拶みたいに聞こえるんですけど。

やっぱりなんか変じゃないか!?

「と、ところでどうしてオジマンディアスがここに？」

「言っつたとおりだ。余はこの宮殿で建築ギルトとやらを始めてな。本来ならば余がこの国を支配下に置くべきなのだが、民と同じ背となり同じ枕の下で暮らすのもまた一興。

故に、建築王たる余の才を以て復興支援に肩入れしている」

なるほど、要は暇を持て余した神の遊びというわけね。

けどオジマンディアスが支援協力しているとはどういう風の吹き

回しだ？

・・・考えるのはやめよう。

さっきのスフィンクスの看板といい、きつと変な理由だろう。
気まぐれならまだいいほうだ。いや、そうあってほしい。

じゃないとイメージが崩壊する。ニトクリスもたぶん泣くけど肯定する。

「さて、おまえたちがここに来た理由はわかっている。これからウインターローズへ向かうのであろう？

とは言うが、図つたのは余と赤王なのだが。

モミジだけではウインターローズまでの道中は荷が重いと判断し、余の花騎士^妹を貸してやろう！」

あれ？ 今花騎士に変なルビが振られてなかった？

「我が花騎士^妹の名を、心底に刻むが如く拝聴せよ！」

サボテン！ 此処へ！」

堂々と高らかに呼ばれたその花騎士は、部屋の奥から除くようにひよつこりと出てきた。

白色のベレー帽を被っており、淡い緑色をした前髪が彼女の顔を申し訳程度に隠しているように見える。

鋼の武装をし騎士のような出で立ちをしてはいるが内気な性格なのだろうか、その姿勢はどこかおどおどとしておりちよつと可愛らしい。

「花騎士の・・・サボテンです。

その・・・、^{兄上}ファラオの妹・・・です」

——う、うっうんツ。

オレは心の中で咳払いをしたあと、死んでも後悔のないよう一喝した。

「なに自分の趣味押し付けてんだこのバカファラオがああああああ
あッ!!!」

第2話 「カルデア騎士団」

「あー、すみませんでしたファラオ・・・」

オジマンディアスにツツコミを入れたらこうなりますよね。

『ファラオに歯向かう愚か者めがッ!』

と、逆に吠えられてファラオの背後に召喚されたミニサイズの顔のないスフィンクスからビーム攻撃されました。

どれくらいの威力かというと、日焼けサロンの熱を直接顔に当てられる。

うん、そんな感じ。とにかく熱さにやられたおかげで顔中汗まみれだ。

「あの、大丈夫・・・ですか?」

倒れたオレにタオルを手渡してくれたサボテンに感謝する。

しかし手際がいいような気がする。

もしかして最初から仕組まれていた計画だったのか?

「よくやったぞサボちゃん。ウィンターローズから帰還したら熱々のパエリアを賜す」

「ありがとうございます。・・・兄上」

「あのお、サボテンさん。ファラオとはどのようなご関係で?」

それと、ファラオの言いなりにならなくて大丈夫ですよ」

タオルを丁寧に折りたたんだサボテンは答えた。

「サボテン、でいいですよ。兄上は私たちを窮地から救ってくれた・・・英雄なんです。」

二週間前、私は最前線で・・・害虫たちの進撃を阻止する任務に・・・あたっていました。でも数は増える一方で・・・そこへ、巨獣の群れを率いるファラオが、助けてくれました」

「最初は気紛れであったのだがな。益荒男どもならともかく、あのような醜穢の汚物に女子供が蹂躪されることを余は捨て置けぬわ」

さすがファラオ。何かと文句は言うものの、ファラオとしての芯はとおしている。

「けど、サボテンに兄上と呼ばせるのは——」

「最初は冗談で言ったつもりだったのだ。だがオジマンディアスでは長いとサボちゃんに告げられたのだ。

であれば、呼び名を考えねばならぬ。それゆえ兄上と呼ぶよう伝えただのだ」

やっぱりおまえが原因かい！ サボテンは反対しなかったのか？

いくら助けられたからといって見知らぬ男に兄上と呼ばせようとする輩にいうとおりにしなくてもいいのに。

「兄上と呼ぶのは・・・呼びやすかったから、だけど」

やはりそういうことか。うん、納得した。

オレも人のことは言えないな。

フアラオって呼ぶのも結局は呼びやすいし・・・いや、そうじゃないな、単に彼がフアラオフアラオと連呼するせいだと思う。

呼び名には親しみが込められるものだ。

サボテンが否定することなく兄上と呼ぶのもきつと彼なら安心できると感じたからなのだろう。

「私以外にも。兄上と呼ぶ人もいれば、兄者とか、旦那とか、金ピカとか、いろいろと呼ばれてる。信頼、されてるから」

このとおりだ。サボテンだけでなくこの町の人々からもフアラオは愛されている、

それは、彼が持つ絶大なカリスマ性だけでなく、生前フアラオとして民を支え、慈愛を浴びせてきた太陽としての輝きが眩しく飛び込んできたせいなのかもしれない。

「当然。余は偉大なるフアラオであり、須らく民を等しく支配するものである。

だが此度の余はおまえたちとともに同じ穴の貉である。

ならば余と肩を並べることが許す。隣に座することを許す。余の配慮、みな等しく受け取るがよい」

いつにも増して本当に上機嫌で在らせられますな。これから雨でも降るのかな？

いや、それは困る。今からウィンターローズへ旅立つというのにい

きなり足止めを喰らうわけにはいかない。

とにかく、今見た限りではこのファラオはここで上手くやっていけそうだし、何の心配もすることなくこの地を後に出来る。

「それじゃあファラオ。オレたちはそろそろ行きます。ブロッサムヒルのこと、お願いします」

「よい。既に手は打つてある。ブロッサムヒル城外に余の”獣”を野放しているからな。迂闊に手は出せぬ」

それはまたトンデモないホームセキュリティ、いや、キャツスルセキュリティだ。

ファラオが謂う獣とは、スフィンクスのことであり、サーヴァントに匹敵する力を有している。その大きさは大型トラック以上の巨体。オレが知ってる限りではファラオのスフィンクスは何十匹もいるわけだから、それらが警備していると確かにブロッサムヒルは安寧を約束されたも同然ということになる。

「ありがとうございますファラオ」

「藤丸が気にすることではない。余は放し飼いでいるだけだ。サボちゃん、余の友を頼んだぞ」

「はい。熱々のパエリア、期待してます」

オジマンディアスに重ねて礼をしたオレは建築ギルドから引きあげた。

この世界に来て二日目から別の国に移動というのは酷な話だが仕方ない。

今はモミジとサボテンが頼りだけどオレもしっかりしないとな。

「じゃあこれからよろしく願いますよサボテン」

「うん。任せて。けど、モミジはまだ、出てきてない」

「あれ？ ほんとだ。ファラオと話してるのかな？」

何か変なこと吹き込まれていないか心配だったが杞憂に終わった。入口の方へ目を向けてみると、モミジが颯爽と駆け寄ってきたのだ。

「すみません。遅くなりました」

「気にしなくていいさ。それよりファラオに何か言われた？」

問いを投げかけてみるとモミジは普段通りの落ち着いた表情で答えた。

「いえ。特に何も」

その瞳は一層輝かせている。激しく燃え滾る炎のように見えたり間違いなく何か告げ口されたな。

「あの、そろそろ向かいましょう。今の、ウインターローズは、不規則な吹雪が・・・起こるから。それに、ウインターローズまで、乗せてくれる馬車を、待たせている、から」

「そうなの？　じゃあ急いで乗りにいかないよ。走るぞ二人とも！」

「あつ、また急に！　待つてください団長！　道わかってるんですか！？」

ブロッサムヒル　城門前

というわけで道などわかるはずもなく、オレはサボテンの案内に従うまま後をつけていき、町の窓口までたどり着いた。

いつもならこの城門を通って商人たちが行き交う様を見られるとサボテンが教えてくれたが、害虫の襲撃を恐れているせいか今では見る影もない。

そのせいもあつてか、待たせてある馬車はすぐに目に入った。

屋根がついているわけでもなく、ただ荷物を荷台に乗せるためだけの、平たく言えば軽トラのようなもの。恐らく輸送用の荷馬車なのだろう。

余程教育が行き届いているのか、馬は手綱などの馬具が外されており、荷台の傍で足をたたんで寝ている。

その隣で、馬の鬣たてがみを撫でる女性の姿があつた。

ふんわりとした金色のショートヘアをしており、ジャンヌと同じく頭部に装飾品を付けている。聖女、というよりは詩人のように感じるが、深緑の鎧の下に生地薄いワンピースを着こなしている。ジャンヌと同じく気品と貫禄のある田舎娘といったほうが正しいのかもしれない。

「お？ 待ってたよサボちゃん♪」

「サボテン、です。その、呼び方は兄上だけ」

子どもみたいにはしゃいで手をブンブン振っている彼女が今回オレたちをウィンターローズまで連れて行ってくれる人物なのだろうか？

「紹介します、団長。彼女は」

「あつ。いいよサボちゃん。挨拶くらい自分でするから。」

というわけで紹介に預かりかけたアカシアよ。輸送任務専門部隊、つまり私が立ち上げたアカシア隊のリーダーなの。だからといって堅苦しいのはなし。気軽でお願いね。

私のことはアカシアって呼び捨てで構わないから。

キミたちのことはネロから聞いてるんで説明不要だよ。フジマルリツカとモミジでしょ？ よ・ろ・し・く・ネ♪ はい、以上。終わり！」

これはまた、さっきのファラオと同じく自己中心で我儘なタイプだなきつと。

で、間違いなくこの人は、実力はあるけど色々とめんどくさい人種だ。

「すみません。アカシア隊って具体的にどのようなの？」

「具体的に？ そうねえ、主に花の蜜を運ぶのだけど、基本は頼まれた物、必要としている物なら何でも運ぶ、運び屋っていったほうがわかりやすいかな？」

ニコニコと笑って説明してくれるのはありがたいけど説明が大雑把過ぎる。

「さてさて、よっこらしょつと。それじゃ早速出発しよつか。人数は三人でいいのかな団長さん？」

「いやいや四人だからね。人をパシリにしといて忘れてもらっちゃ困るよ」

突然背後から聞き覚えのある声が耳に伝わってきた。

振り向けばそこには、両手に袋いっぱい担いでいるガンナー、ビリー・ザ・キッドの姿があった。

この西部のガンマンは変わらずにこやかな笑顔をしている。

「久々だねマスター。とうとう君もこつちの世界に来てしまったんだね」

「おかげさまでね。ダ・ヴィンチちゃんにしてやられたんだよ。」

「ビリーの方こそ、どうしてここに？」

「僕は気がついたらその荷馬車に乗せられていてね。雇い主の彼女に拾ってもらったんだよ」

「雇い主？ アカシアが？ 他に行く当てなかったの？」

「マスターの言いたいことはわかるよ。でもここの方が何かと落ち着くから構わないよ。はいこれ、マスターの分」

そう言つて唐突に何かを差し出された。

見ればそれはそれは見事な飾り付けがされたオシヤレな弁当箱。

白米に野菜の天ぷら、ポテトサラダにはミニトマトが被せられており、その隣には春巻きが寝かせてある。そして極めつけはこれだろう。お子様なら誰もが喜ぶタコ様ウィンナーとウサギを模った林檎。弁当箱の周りはツメクサやオシロイバナなどといった蜜を吸える花で埋め尽くされており、中央には満開のタンポポが飾られている。

職人の努力が伝わってくる。これは広々とした草原とかにピクニックで食べれば最高ではないだろうか。

「ありがとう。もしかしてこれを買に行つたの？」

「そうさ。ウィンターローズまで着くの時間に時間が掛かるから弁当買ってきてくれと彼女にね。ちなみにお代は王様に押し付けたよ」

「ちやつかりしてるなあ。つて、ネロに請求したつてその弁当いくらなのさ?！」

「はいはい。おしゃべりはそこまで！」

オレたちの輪に割つて入ってきたアカシアはビリーが下げている袋からささつと弁当を取り出しモミジとサボテンに手渡しした。

「いろいろ話したい気持ちわかるけどそれは道中でもできること。立ち話は時間の無駄よ。キミたちを送り届けることだけが私の仕事じゃないんだからね」

さあ乗った乗つたとアカシアがオレの背中を無理矢理押してきた。

乱暴なのか、強引なのか、なんだかはつきりしないけど、ビリーがこの人の隣にいる理由に察しはついたよ。

彼女は自由奔放なんだ。ビリーも自由に生きる気ままな性格だから性に合うのだと。

「はいはい。全員乗ったわね！ ビリーよし、リツカよし、モミジよし、サボちゃんよし！」

「だから、それは」

「以上！ それじゃあ張り切ってウィンターローズへしゅっぱー…、えーっと」

アカシアが手を振りかざした途端、電池が切れたように動きが停止した。

言葉が詰まったようだけど、何か忘れたことでもあるのだろうか？

「そういえばリツカ。キミが団長なんだよね？ 騎士団の名前はなんていうのかな？」

「騎士団の名前？」

「あれ？ いやいや騎士団の名前だよ。たとえば…テンプル騎士団とか！ どう!？」

いやいやいや、どこの十字軍の護衛だそれは。

しかし騎士団の名前か。団長と呼ばれるてはいるけど騎士団を作った覚えはないんだけどなあ。どうしたものか。

「騎士団の名前？ そうですね…、団長がもといいた世界で、務めていた組織名でいいと思う？」

オレの前に座っているサボテンがさらっと助言を提示してくれた。恐らくカルデアのことを言っているのだろう。

「…カルデア騎士団ですか？」

続いてモミジが隣でポツリと呟いた。

「カルデア騎士団か。…うん。じっくり来るしオレにとっても馴染み深い。これでいこう！ いいかな二人とも？」

そう決定したオレの決断に二人は顔を見合わせた。

「私は、ウィンターローズまでの案内係だけど、団長がそれでいいなら、私はいいと思うよ」

「異存在りません。私は団長に従うまでです。ですが、カルデア騎士団……、ええ、とても素敵な団名だと私は思います」

「ふふっ、どうやら決まったようね」

アカシアの言葉にオレは頷く。

カルデア騎士団。これからはサーヴァントのマスターであるのと同時に、花騎士の団長で在り続けなければならない。

心が引き締まるのを感じる。

オレはビリーに目を向けた。これでいいかと問うように。

すると返答はすぐに念話となつて返つてきた。

——君がそれでいいと思うなら僕は反対しないよ。他のサーヴァントだつてそうさ。君は、君が信じた道を今日まで突き進んできたんだから。僕らもそれを信じて君と戦つてきた。

だから、答えはそこにあるよマスター団長。

念話が切れる。

そうだよな。ビリーの言うとおりだ。本当に何を今更、オレは恐怖していたのか？

騎士団の団長となるということは、すなわち花騎士の命を預かるということだ。

これまでの戦いで犠牲のなかった戦いはない。

人であれ、獣であれ、神であれ、必ず誰かが犠牲となつた。

サーヴァントは霊体であつて、死ぬわけではない。魔力が尽きれば英霊の座という在るべき場所へ戻るだけだ。

だが今回はどうだ？ 別世界とはいえ、オレが背負うのは命そのもの。死なせてしまえば取り返しをつかないことになる。

死者は蘇らない。だからこそ人は今ある生を謳歌する。

それをオレは奪つてしまうことになるのだ。

その資格がオレにはあるのかと、これまでの経験がオレ自身に訴えかけてきた。

足が踏みとどまる。

確かに犠牲はあつた。嘆きはあつた。悲しみはあつた。

手を伸ばせば救えたかもしれない命が、いつもそばにいてくれた命

が消えた。

我儘だと、とんだエゴイストだと罵られるだろうが。

——オレは、正義の味方^長を貫き通す。

オレが、生きるために戦って来たように。

オレが、守られて戦って来たように。

——今度は立場が変わったただけだ。

オレが、彼女たちを守るために戦うだけだ。

この先の未来が見れるように、目いっぱい太陽の光を浴びれるように。

この先の空は^{未来}続いているのだから。

「カルデア騎士団。これがオレたちの騎士団の名前です」

決心は揺らがない。

アカシアは穏やかな表情を浮かべて、ただ静かに頷いた。

「ネロの言うとおりね。キミ、本当に私たちの世界の勇者様だわ」

「陛下が何か？」

「何でもない。ベリリー、やっぱり私リツカとおしやべりしたいから変わってもらっていい？」

「そう来ると思ってたよ。全く、だから始めに僕が騎乗するって言ったのに」

選手交代。騎乗スキルを持つベリリーが華麗に乗馬する。

確か生前、彼は同僚のカウボーイや世話になった家族の前で見事なロデオの腕前を披露したらしい。

英霊となった今では、ましてや騎乗スキルを持つ彼なら任せて安心だ。

「それじゃあアカシアに代わって僕が導くよ。カルデア騎士団御一行、ウインターローズへ」

「お届けします!!」

最後の台詞をアカシアに持っていていかれて一瞬空気がどんよりしたが、構わずベリリーは馬の腹を軽く蹴った。

荷台の車輪が回り、荷馬車はガタゴトと音と揺れを奏で始める。

乗り心地がいいとは言えないがこれが旅の始まりのように感じて

ならない。

RPGに登場する勇者もきつとことういう高鳴る高揚感を胸に冒険の旅に出るんだと思うと釣られてオレも冒険心が溢れ出てきた。

空は快晴、雲一つない青い海の下、そよ風に優しく撫でられながら、オレたちはブロッサムヒルに見送られた。

第3話「その人が世界で一番でも、私が世界で一番です」

その女は、酷く嫉まれていた。

その女は、陰で疎まれていた。

その女は、ただ一人の、普通の人間として在りたかった。

女は物心ついた頃からそうだった。

見渡す限り、あるのは”貴族”というブランド名。

貴族、貴族、貴族。片手にグラスを優雅に持つて、瀟洒足る己の力を誇示することばかり。常に勝者の側でなければ落ち着かない傲慢な人種。

上を見上げれば、貴族同士で互いに嘲笑の目をしている。

下を見下せば、身分を弁えよと、公衆の面前だろうと身勝手な裁悪戯きが当然のように行われる。

それが彼女には、ただただ心底腹立たしくて仕方なかった。

——ああ。恥ずかしい。汚らわしい。いったい世界は、いつからこんなにも酷く醜く歪みきってしまったのだろうか？

気持ち悪い。

腹の底で煮え滾るこの嫌悪感はいったいつ治まるのか。

貴族様はそんなにも偉いのか？

彼女は唇を噛みしめる。

人を蔑み、人を弄び、人を玩具としか見ていないというのに。

拳を握り締める。

その玩具に支えてもらっているというのに。

双眸は憤怒を表している。

恩を仇で返すことしか出来ない恥晒しが。

——私は今もこの先も、貴族を忌み嫌う。・・・そう思っています。

その日、女は退屈だった。

することは何もなく、自分の部屋の本棚にあるファッション誌に手を伸ばし、ベッドに寝転び読み返すだけの些細な日常を送っていた。気がついた時には日は既に沈み、月光が雪を輝かせている。

カーテンを閉めない。毎日行っている当たり前の行動に従おうとベッドから体を起こした時――。

その男は、何の前触れもなく姿を現した。

――「俺を、呼んだか？」

壁窓から差し込む静寂の月灯りが、得体のしれない隠れたシルエツトを照ら出す。

漆黒の外套を纏った白人の青年。女の見立てだと背丈は百八十七センチを超えると推測できる。

ポークパイハットで見え隠れするその瞳からは、何もかも全てを否定するかのような憎しみで満ち溢れている。

怖かった。恐ろしかった。助けを呼ぼうにも体が竦む。それよりも純粹に、彼の印象を、”死神”だと女はつい呟いてしまった。

――「死神？ そんな大層なものじゃない。強いて言えば、鬼だ」男は怯える女のことなど気にする素振りも見せないまま、どこからか煙草を取り出す。

それには”焰籠”という銘柄が書かれており、太極図のような柄が描かれている。

箱から一本取り出した彼は口に咥えた。あとはライターで火をつける。それで煙草を味わうための工程は完了する。

が、青年は咥え煙草を手に戻すと突然舌打ちし――。
――「ライターを持ってないか？」

突然現れとしてその態度はなんだと女は思ったが、先程までの恐怖はウソのように消えていた。危害を加える男ではないと本能が確信したからだろうと彼女は安堵のため息を吐き、澁々手元にあったライターを手渡した。男は礼をすることもなくライターを手に取り煙草に火を当てる。

たちまち煙が上がり、青年は傍にあった椅子に腰掛け深く息をつ

く。

——「おまえ、名は何という？」

それはこちらの台詞だと、まずは自分から名乗るのが筋だと女は言った。

節度ある態度でいてくださいと女は目で意見する。

——「そうだな。おまえの言い分にも一理ある」

青年は煙草を灰皿に押し当て立ち上がる。冷たい夜風が渦を巻き、外套をはためかせる。

——「我が名は復讐者、アウエンジャー 巖窟王がんくつおうエドモン・ダンテス。恩讐の彼方より、おまえを導きに来た」

呆然。彼女は何をどう反応すればいいのかわからなかった。名を告げられるまではギリギリの思考を保っていたのに。

復讐者？ 巖窟王？ 恩讐の彼方？ なにそれ、もしかして世に聞く中二病というやつかと疑いはした。

女は直視する。如何にもこの怪しげな男がなぜここへ姿を見せたのか、疑問はいくつか浮かぶが名乗られたからにはこちらにも名乗り返さなければならぬ。

女はベッドから立ち上がり、巖窟王と名乗った男に手を差し伸べた。

「私はサフラン。貴族の紛いものよ」

×

ブロッサムヒル外郭

ブロッサムヒルから離れ、害虫と遭遇することなく着々とウィンターローズへ向かうオレたち。

アカシアが言うにはオレたちが今いる場所はブロッサムヒル外郭と呼ばれる三ヶ国の国境が入り混じる区域付近らしい。ブロッサムヒル、ウィンターローズ、そしてリリィウッドと呼ばれる自然との共生を思想としている都市国家だ。ここブロッサムヒル外郭は独特な地形で人が住みにくいため街や集落がなく、三国の気候がぶつかり合

うため作物が育ちにくい。おまけに、三つの国の責任が問われる手出しにくい領土なのだ。彼女は饒舌に語ってくれた。

——『だからここは人目を気にすることなく運搬するにはうってつけなのよ。調査とか警備の任務で来る派遣者も全然見ないし。ある意味無法地帯って感じでラツキーよね♪』

見方によつてはそうなのかもしれないが、それってつまり害虫の巣窟としては都合がいいということなんじゃないのか？

何はともあれ、今はウインターローズに辿り着くことが最優先。この問題は花騎士たちがいずれ解決するだろう。

「ちよつと聞いているリツカ!？」

不意にアカシアの声が耳に響いた。

オレは目を丸くして一瞬体がカチンコチンになったがすぐに平静を装って彼女の方へ振り向いた。もちろん彼女が何を話していたのかは一切不明だったわけだが。

「は、はい聞いてますともー!」

「よろしい。で、どうなの？ キミがいたカルデアってところは」

なんだ、カルデアについてか。どうしようかと悩んでいたけどこれならすぐお望みの答えをご用意出来ますとも。

「そうですね。カルデアは人類の未来を守るための」

「ああ違う違う。そういうのじゃなくってさ、どんな人がいるとか」

「それならアカシアそっくりな人がうちにいますよ」

「おっ？。もしかして私の子孫だったりして。いや、生き別れた姉妹とか!」

「それはない」

などと、アカシアから来るボケをオレは適当に返していく。彼女は、そりやそうかと笑いながらおにぎりを頬張る。

その傍らでサボテンは、オレとアカシアによる素人同然のコントを静聴しながら黙々と弁当を食している。

そしてモミジは、荷台の最後方でジツと空を眺めていた。

かれこれ三時間は経っているというのに、彼女は飽きた素振りさえ見せない。

「空が好きなのか？」

オレはアカシアとの会話を中断してモミジの隣に座った。見れば彼女の顔は無表情で、その瞳はきつと、空とはまた別の何かを見ているのだろうか。

「そうですね、空は好きなのでしょう。団長はどうですか？」

「オレ？ オレは、そうだな…」

記憶が過ぎる。

マシユとともに駆け抜けた旅路、そこには必ず穴があった。

天に輝く、地球を囲む光の輪。人理焼却の象徴であるのと同時に人類の営みの集合体。

その下でオレは幾度の戦場を越え、幾度の運命と出会っては別れてきた。

空を最後に直視したのは、全ての戦いを終えた後のこと。人類史の未来を守ったオレとマシユは、あの降り積もった雪山の丘で空を見上げた。あの時に感じた気持ちは、言葉では言い表せない。

「好き…かな？」

「なぜ疑問形なのですか？」

「なぜって、正直よくわかってないからね。でも、山から見る空は好きだな」

「うん。わかるなあ、その気持ち。私も山頂から眺める空は好きよ」

オレとモミジの会話にしれっと参加してきたアカシアがうんうんと頷く。

「空って自由なイメージがあるよねえ。害虫との争いが終わった暁には自由に駆け回りたいなあ」

「ダメだよアカシア。それ、ハリエンジュたちが聞いたら怒るよ」

「大丈夫よベリリー、今のは本心じゃないからね。ところで話は変わるけどリツカにはサーヴァントっていう子たちを従えてるわけじゃない？」

「そこで、リツカの一番のサーヴァントってどんな子？」

「一番？ それ、私も気になります！」

二人がぐいっと体を詰め寄せてきた。モミジに至ってはまるで磨

き上げた水晶玉のように目を輝かせている。

「わかったからとりあえず離れて！ そうだな、オレにとって一番のサーヴァントはマ——」

バキユンツ！

「……」

今、何かがオレのこめかみ一歩手前を通り過ぎた気がしたけど……。

「い、一番のサーヴァントはm——」

バキユンツ！

「マ——」

バババンツ!!

「おいしいいい!? さつきからなんだよビリー！ オレが言おうとするたびに銃撃ってくるのやめて！」

犯人がビリーであることはわかってた。始めは何事かわからなかったけど二撃、三撃と繰れば嫌でも頭が勝手に理解してしまう。

「何のことかわからないよマスター。僕はほら、このとおり馬車を動かすので精一杯だし」

「ウソおっしゃい。馬車だけで手いっぱいになるサーヴァントなんて聞いたことありません」

全く、何が面白くて撃ってきたのか。

「ごめん。この話はやめにしよう。次言いかけたら本当に撃たれそうだから」

「うーん、仕方ないわねえ。じゃあ」

アカシアが食事を終えかけてたサボテンを半ば強引にこちらへ引っ張ってきた。

「私にモミジにサボテン。この三人の中で一番好きなタイプは誰かな？」

「ああ、好きなタイプね。それならって、はあああああ!？」

また爆弾投下してきたよこの人でなし!!

しかし、ふむ……。せっかくだし見比べてみるかとオレはエデンの園へ足を踏み入れた。

まずアカシアだ。見れば見るほど聖処女と瓜二つ。この三人の中では一番誠実そうで真つ当なお姉さんに見える(黙っていければの話)。それでいて体のラインがいい。出るところは出て締まるところはしっかり締まってる美の集大成。女神すら嫉妬するのではないだろうか。自分勝手なところに難ありだけでも。

次にサボテン。まだよくわからない人だけど名前のとおり刺々しい鎧を装備しているが寡黙のせいからギヤップが生まれてより可愛く見える。それでいてスパッツ、これがまたいい。いい文明。

最後にモミジ。彼女は特にあの二つのマシユマロが大変魅力的だ。北半球と南半球が同時に味わえるその胸はきつと多くの男性を魅了出来るだろう。あとスカートの方が短すぎる気もする。要するに目のやり場に困る服装なのでアカシアといい勝負をしている。あとはそうだな、まっすぐな姿勢はいいけどちよつと度が過ぎる気もする。

——って、容姿ばかり見てないかオレ？ アンデルセンならもつとこう深く掘り下げて追及するだろうけども。

「まだですか団長？」

「こちら焦らしちゃダメよモミジ。これは男にとって一番の悩みだからね」

「団長どこか、目が」

「サボちゃん、それは我慢よ。男の人にとっては絶賛眼福タイムなんだから」

んん、くそつ。好き放題言ってくれるなこの人は。しょうがないじゃないか。両手に花とはこのこと。その中で一番を決めるのって酷な話なんだから。

「あのさ、お楽しみのところ申し訳ないんだけど」

ビリーが助け舟を出してくれた！ ナイスだビリー。この窮地を救ってくれるとはもしかして本当はクラスリーダーなんじゃないの？

「あれ、頼んだよ」

ビリーが指差す方向に目を向けると見覚えのある無数のシルエツトが砂埃を巻き上げながら近づいてるじゃないか。

「なんだ、ただの害虫じゃない。あれくらいの数、ビリーだけで片づけられるでしょ」

「いやいや、ここで君の株を上げるチャンスだよアカシア。君の活躍を見ればマスターの評価変わるかもよ」

「あー、なるほどねえ。そういうことなら」

荷車の両外側からゴトンと何かがぶつかる音が響いてきた。巻かれた布を裂いて現れたのは木の根が巻きついていて二本の長剣だ。神々しく輝かせるそれはまさに聖剣と呼ばれてもおかしくない代物と言える。

「お荷物を護るだけじゃなくて私の魅力アピールしちゃおうじゃないのー！」

アカシアの手の動きに合わせて剣も動く。恐らく魔術の類で操作しているのだろう。

いや、その前に疑問が一つ出来た。

「これ、馬車止めないでそのまま突っ込むつもり？」

「あー、大丈夫よ大丈夫。通る前に全部駆除すればいいんだから」

自信満々に語るアカシアは手首を回した。その動きに呼応して剣は矛先を害虫に向けて回転する。

「それじゃあ、いつてらっしやい！」

アカシアが腕を前に突き出す。やはり同じように剣も動きに沿って前方へ射出された。遠くから害虫の悲鳴が届いてきたがこの遠距離で当てるとはさすがとしか言いようがない。

銃の弾丸という小さなものではなく剣が弾丸となるのだからその殺傷力、破壊力は想像するだけで恐ろしい。

あつ、今気がついた。この人。聖処女ジャンヌに加えて英雄王ギルガメッシュを足して割ったような人なんだ。

「まだまだいくよおー！」

腕を縦横に振り動かすその姿は何かのパフォーマーかと思ってしまうが、その実彼女の動きは躍動に爽やかさがある。疲れた様子など微塵もなく、余裕の笑みをこちらに見せている。

「どうリツカ？ これで私が一番でしょ？ でしょ!!」

「い、いやあそれは」

「なるほど、そういうことなら私も黙っているわけにはいきません」
突然立ち上がったモミジがガンブレードを構える。トリガーを引き、膨大な炎を昇らせるがそれはマズい。非常にマズい！

確かに殲滅力こそあれどその被害は甚大になる。下手に放てばオレたちも巻き添えを喰らいかねない。

「ハウス、モミジ！」

「な!? なぜですか団長!? アカシアさんが一番を譲らないというなら私も同じです。ここで私がお役に立って私が一番であることを証明してみせます！」

「今は抑えてくれ。ここでモミジが出ると衝撃でオレたちも吹っ飛ばんじゃうから」

「……わかりました。今回は譲りますが次は負けません」

渋々と大剣を仕舞わせてしまったが致し方ないこと。ここは全部アカシアに任せたほうが得策だし。

「安心しなさいな。もう全部片付いちやうから」

アカシアが勝ち誇った表情を浮かべると人差し指をくるくると円を描き始めた。

「ちちんぷいぷい。そおーれっ♪」

今この距離なら何が起こっているのかは十分目視出来た。

二本の長剣も円を描きながら遠心力を上げている。高速回転する剣はブーメランへと役割を変え害虫の胴体を両断していく。

圧倒的だ。剣というものは使用者によってここまで化けるものなのか。

「よし！ 全部片付いたよ。はあ…、害虫には困ったものよねえ。この私に勝てるわけないのに襲ってくるんだもの」

手首を手前に引き、長剣を手元に戻したアカシアは平然と座り、弁当にあるタコ様ウィンナーをパクパクと口に運んでいく。

「リツカどうだった？ これはもう間違いなく私が一番でしょー！」

「うーん……」

確かに彼女の強さはこの三人の中では一番かもしれない。けど、今

競い合ってる一番というのは好きなタイプのことだから強さで決めるのは違う。それに、

「まだサボテンの実力を見てないから何とも言えない」

「わたしの、実力？」

「えー、なにそれツマンない」

「つまんないじゃありません。それ以前にこの話もなし！ どのみち何を答えてもあとで恐ろしいことになりそうだからー」

にしても順調に進んでいるよな。迫ってきた害虫なんかお構いなしで馬車を止めることなくすべてアカシア一人で討伐したんだから。いったいどこでそんな力を身につけたのか気になる。

「ところでさ、花騎士ってどうやってなれるの？」

「花騎士になるには、ですか？」

「そうなんだよサボテン。今疑問に思ったんだけどさ。そもそも花騎士ってなろうと思えばなれるものなのか？」

オレの質問に三人は互いに顔を見合わせる。たぶん誰が答えるか決めているのだろう。そこで、代表者となったモミジがわかりましたと口を開いた。

「花騎士はこの世界を喰らう害虫を倒すための存在。それは団長もご存じのとおりです。私たち花騎士はなろうと思えば誰でもなれる。ですが、最終的に花騎士を決めるのは世界花です」

「世界花が花騎士を決める？ 世界花に意思があるということ？」

「はい。ですが花騎士になるための評価基準は今も不明です。成績が優秀であれば誰でもなれるというわけでもなく、選定の儀セレモニーによって決められるのです」

「選定の儀？」

アーサー王伝説でいうと選定の剣を引き抜く儀式、それと同じようなものか。そう考えと花騎士になるには相当の実力を有していないとまず無理なのでは？

「選定の儀というのは、花騎士になるに相応しいと国から認められた者に与えられる挑戦状のようなものです。私たち花騎士はその選定の儀セレモニーで与えられた試練を乗り越えることで初めて花騎士フラワーナイトになれと

「いうわけです」

なるほど、ただ認められるだけではなく試練をクリアしなれないと。それも国が絡んでいるとなると尚更審査は厳しそうだ。

「けどそんなに厳しいなら花騎士に慣れる人ってそういないんじゃないか? 自称花騎士なんていたりして」

「それは無理だよりツカ。子どもならまだ許されるけど大の大人がそんなことしたら極刑ものだからね。」

「いいかい? 世界花に花騎士と認められるということは、世界に寵愛され祝福を受けるということなのよ。それを、我儘になつて自分が花騎士だなんて自称するやつは、傲慢をとおり越したただの阿呆、世界を侮辱していることと同じなのよ」

坦々とした口調でありながらも熱く説明するアカシアの言葉には意外にも説得力が溢れていた。悠然としている彼女が熱意を込めて言い切るあたり、彼女にも花騎士としての誇りがあるということか。

「それはわかったけど、試練ってどんなのなんだ? やっぱりこう、害虫を倒すとかそういうのなのか?」

「それについてはすみません団長。口外してはいけない決まりとなっているので」

掟というやつか。それなら仕方ないけど気になる。いったいどのような試練を達成することで花騎士として成就出来るのか。

モヤモヤとした疑問を払うためにオレもアカシアに倣ってタコ様ワインナーを一つ頂戴する。

「タコ様ワインナーって足から食べる派? 頭から食べる派?」
「……はい?」

何を思ったのか突然アカシアが派閥争いの火種をばら撒いた。

「私は足を一本ずつ食べていく派です」

「いや、真面目に答えなくていいよモミジ。でもわかる。オレもたまに一本ずつ——」

「わたしは、そのまま一口で食べる、けど」

「それが普通だよサボテン。何も間違つてなんか——」

「団長、それはつまり私の食道に異を唱えるということですか?」

あつ、もしかしくなくてもスイッチ入ったかこれ？

「いや、否定するつもりはないからね。単にオレは、そのまま一口で食べるのが当たり前というか当然というか」

「リツカ、それはよくない。そんな普通であることを私は良しとしない。普通ということは変化がないということだよ。そんな刺激のない在り方は面白くない。ちなみに私は一度に足を全部食いちぎる派だよ」

「言い方！ 食いちぎるとか物騒だからやめようね！ 女の子が使う言葉じゃありません！」

なんてふざけた会話が繰り返しているうちに空は白くなってきた。

木々は雪化粧で染め上げられており、馬車の進み具合も段々と疎かになってきている。もはや牛歩といつてもいいだろう。

そう、オレたちはウインターローズの国境を既に越えており、降りしきる雪の中を進んでいるのである。

景色といえば想像していたとおりの。一面が銀世界、大地すべてが白銀の雪により地表を隠されてしまっている。

「アカシア、どうやらここまでのようだよ。積雪の深さが馬車で通れるレベルを軽く超えている」

「やっぱり？ それじゃあここからは徒歩でいくしかないわね」

アカシアが馬車から跳び下りると、ズボつと足が雪に埋まる音がすることはなかった。いやなんでだよとツツコミを入れると、

「だって私、浮けるし」

そう告げた彼女はオレたちの前で見事宙に浮いて見せる。羨ましいぞそれ。それが出来れば長靴とか不要じゃないか。濡れなくて済むし進行の妨げすら無視とかもはや二鳥どころか一石三鳥ではないか。

実際、オレがモミジたちより先に足を雪に置いて立つと脛すね一まで埋もれた。出始めからこの深さとなると、道中どこかで体ごと埋もれてしまうかもしれない。

「みんな降りたね？ それじゃあビリー、国境ラインまで戻って。私はリツカとモミジをウインターローズまで届けたらサボテンを連

れて帰ってくるから」

「構わないよ。元からそういう計画だったしね」

ビリーは巧みに馬車を操り、元来た道へ方向を変える。

「じゃああとは頑張ってねマスター。影で応援してるよ。それとこれを渡しておくよ」

ポケットから取り出したそれを、ビリーはポイッと投げ渡してきた。

「これって…」

「ライターだよ。この世界のライターで、魔力を動力源に火を灯せる。それと、もう一つのそれはお守りとして持っているといいよ」

「ありがとう、助かるよ」

ビリーから受け取ったものを大事に仕舞うと、彼は何も言わずにその場を離れていってしまった。彼らしいと言えば彼らしい気もする。

さて、問題はこれからだが。

「団長、そろそろ」

サボテンから呼びかけがかかる。

そうだった。ここからは彼女の仕事だ。今でこそ雪が激しく吹雪いている様子はないが、この雪国で迷うことなく目的地に辿り着くにはサボテンの協力が必要不可欠なのだから。

「いつ吹雪が、吹くかわからない、から、みんなこれを、腰に結んで」
サボテンから手渡されたのは如何にも新品である頑丈な縄。間違はなく遭難を防ぐ為のものだ。

オレやモミジは必要としてもアカシアは浮遊出来るから縄は無用の長物だろう。

「しかしここまでする必要があるなんて、ウインターローズってそこまで劣悪な環境なのか？」

「ウインターローズはブロッサムヒルと同じように二週間前、いえ、もう十五日ですね。十五日前に害虫の襲撃を受けたんです。それ以来、ウインターローズは悪天候に見舞われて国外との貿易もままならない状態なんです」

「そうなのよ。猛吹雪に襲われることなんて今じゃ当たり前で、輸送

体が結構やられてるのよね。本当に困ったものよ」

アカシアが項垂れる様を見せるといふことはそれだけ悩まされているという事か。たぶんその悪天候も聖杯の影響なのかもしれないな。

「それじゃあ、団長、わたしが先導、するから。ちゃんとついてきて」先頭にいるサボテンが歩を進めていく。続いてオレも積もった雪を退けながら歩いていく。後ろからはモミジが辺りを警戒しながらついてきているが、オレの隣にいるアカシアは変わらずのほほんとしている。

それからしばらく、歩き始めてから既に一時間は経過したが町が見える気配は一切ない。それどころか積雪の深さが膝に到達する直前にまで迫っていた。これはもう遭難一歩手前の状態ではないだろうか。

「サボテン、ウインターローズまであとどれくらいかかりそうなんですか？」

「まだかかる。このままだと、わたしたちが雪に、埋もれるから、あれを見て」

サボテンが指差す方向には、雪のせいでよく見えないが確かに一件の小屋が聳え立っている。

「あら、小屋があるわね」

「しばらく、あそこでやり過ごして、天気が回復したら、また出発。それでいい、団長？」

「それでいこう。じゃないと本当に凍え死んじやう」

急げ急げと、オレたちは無理に走って小屋の前に到着した。小屋は木造で、よく見ればまだ新しい。最近建築されたものなのだろう。

とにかくまずは小屋に入って温かいスープでも飲みたい。オレはその衝動に駆られるがままに戸を乱暴に開いてしまった。

すると、誰もいないはずの小屋の中から、

「きゃあああああ!! オバケええええええ!!」

熱々のきのこスープが入った皿が、オレの顔面に温もりをぶちまけてくれました。

「目がああああッ!! 目に菌糸類がああああッ!!」

「大丈夫ですか団長!？」

「はわわわわっ。すみませんすみませんッ! 決してワザとじゃないんです! すみません、ほんつとうにすみませんッ!! 今お水をかけますからッ!」

「熱ッ! 熱いッ! 熱いからッ!! 人の顔に熱湯ってどういう神経してんだああああッ!!」

「ごめんなさい間違えました! 許してくださいいいいいいい!!」

ひどい目にあつた。

扉開けた瞬間、パイ投げのように顔面にきのこスープがかかるわ熱湯かけられるわ、ナニ? オレいつから芸人になったの? この鬱憤をどこに晴らしたらいいの? 教えて神様。視界がまだブヤけてるんだけども。

「さつきは本当にすみませんでした。私は、花騎士のハツユキソウといます」

「ゆ、雪女……」

徐々にはつきりと目の霧が晴れてきたおかげでハツユキソウと名乗った彼女の姿が映りこむ。稲藁で作られた草鞋の深靴を履いており、体は小柄のようだが分厚い白い着物を纏っている。それでいて深々とフードまで被っているのだから雪女と見間違えてもおかしくはない。

「チガいます! よく言われますが雪女じゃありません! いえ、そう噂する人もちらほらといますが決して雪女ではありませんからネ!」

ハツユキソウはそう言つて囲炉裏に吊るした鍋からきのこスープをお椀に装ってオレに手渡してくれた。オレは感謝を告げてそれを受け取る。ぐつぐつと煮込まれた中から掬われたばかりとあつて湯気とともにスープの香ばしいさが鼻を刺激する。

「これはまた、体の芯から温まりそうな」

「え？　そ、そうですか？　わ、私これだけは得意なんですよ。えへへ」

頬を赤く染めたハツユキソウは次々とお椀を取り出し、せつせとスープを注いでいき、モミジたちに渡していく。

「みなさんお疲れでしょう。私特製のきのこスープで温まるといいですよ。ところでみなさんはどうしてここに？　ウインターローズに何かご用事でもあるんですか？　あつ、それと出来ればお名前も」

「そうね。まずは自己紹介からよねえ。私はアカシア。で、団長たる彼がフジマルリツカ。その隣がモミジで、私の隣にいるのがサボテン。私とサボテンは彼らをウインターローズまで無事送り届けることが任務で、リツカたちは……なんだっけ？」

そこまで説明しておいて肝心なところを忘れてるのか。いや、オレから彼女には直接目的を伝えてはいないから知っていなくても当然かもしれない。

「オレとモミジはウインターローズにある聖杯を探しに来たんだ。聖杯って言ってもわからないと思うけど」

「セイハイ？　すみません、全然知らないです」

「そうだよな。ごめん、今のは気にしないで。ハツユキソウはどうなんだ？　ここに暮らしてるのか？」

「そんなわけじゃないですよ団長さん。ちよつと追われてただけなのでここに避難しにきただけです」

追われてたから避難しにきた？

「追われてたとは、害虫にですか？」

モミジが口を開くとハツユキソウは顔を横に振って否定する素振りを見せる。

「恥ずかしながら子どもたちに、です……」

なんと？　世界を護る花騎士が子どもからここまで逃げてきたと？

これ聞いた花騎士たちは笑いをとおりこして口をポカンと開いたままにいる。

「ち、ちよつと、そんな憐れみな目で見ないでください！　私だって好

きで逃げているわけじゃないんですよ」

「すみませんハツユキソウさん。きのこスープ、おかわりしてもよろしいでしょうか？ できれば大盛りでお願いします」

モミジはよく食べるな。騎士王に負けない食いつきだ。そういえば弁当を一番早く食べ終わったのはモミジだった気がする。

「いいですよ。私のスープは世界一ですからね」

あつ。待って、それは――。

「ほう？ 世界一ですか……」

火に油注いじやつたよこの娘。

そうだ。せっかくだからカルデア騎士団に局中法度みたいなやつでも作ろう。

第一条、一番と豪語するやつは花騎士道不覚悟で切腹でござる、みたいなの。

ん？ 花騎士道ってナンダ？ いやもういいかどうかどうでもなれ。

オレは花騎士たちがワイワイと騒ぐ中、ダンマリを決め込み一人静かにカルデア法度を考えこむのであった。

第4話 「お酒は二十歳になってから」

ウィンターローズ 酒場「カルーナ・ブルガリス」

雪が止んできた。外は既に夕暮れ時だが日は雲隠れを決めたままである。

藤丸たちが小屋で休息している最中、小降りの雪は荒れた吹雪へ変貌しウィンターローズを真白に染め上げていく。人がそれに出くわせば、たちまち雪の中に埋もれてしまうほどこに。

だが、ウィンターローズの都市ともなれば話は変わる。

ウィンターローズにある世界花は都市に大きな恩恵を与えているのである。それがウィンターローズの大結界。文字通り、街中全てを結界で覆い、雪の侵入を防ぐ役割を務めているのだ。それでも、人に害を及ぼすことのない小雪ともなれば話は別。小雪は結界をすり抜け、時間をかけて街中を白銀の世界に変えてしまう。

そんな街中にある一つの小さな酒場で白装束を身に纏う彼女、荊軻けいこはカウンター席でグラスに入った冷水をちびちびと口に運んでいた。その隣に同席しているのは、町娘の格好をした花騎士にしてこの酒場の主ヘザー。片側には愛用の箒を立て掛けている。ジョッキに手酌した溢れんばかりのビールを豪快に飲みこんでいく彼女の様はまさに酒豪、普段の容姿からは想像もつかないだろう。

「どうしたんですか荊軻さん？ 今日はいつものお酒飲まないんですか？」

からかいも含めてジョッキを荊軻の頬に押し当てるヘザーに荊軻は抵抗することもなく懐から一枚のリストを彼女の前に置いた。

「これは？」

ジョッキを手放し、差し出されたリストに目を通していく。そこに記載されているのはウィンターローズに居を構える上流階級の貴族や富豪である。見れば名前に横線を引かれた者がほとんど。それが何を意味しているのかは想像に難くないがヘザーは敢えて彼女に返答を求めた。

「それは私が始末した者たちだ。だが勘違いしてほしくないのは私が

やったのはその取り巻き。彼らが独自に雇っている傭兵やならず者のリーダー格だけだ」

「ひい、ふう、みい……、うーん、ざっと二十名程度ですか。これだけの人数を三日足らずでクリアするとはさすがとしか言いようがありませんね暗殺者さん^{アサシン}」

「暗殺など私の生業ではないのだが、国の頼みとあっては無下に断れない。いや、今の私に断る理由もないのだがな。成すべきこともないし」

「ここまで出来るとは、本当に異界から来た客将と認めざるを得ませんね。いえ、疑っていたわけではないですよ。それで、これを私に見せるということは何か意図があるんですよね？」

トントンと、リストの一番下に書かれた名前をへザーは叩く。それは、未だ消去線が引かれていない唯一の標的者。

「何が知りたいんですか？」

今までのにこやかな笑顔とは打って変わってへザーの目つきは鋭くなった。

「その者の人間関係について」

「ううん、お高いですよ。何せ、国すらこの人については隠そうとしてますからね。この国は都合の悪いことは何でも隠蔽することに長けていますから。その代わり、そうした裏を忘れないように詩として後世に伝えていくんですけどね。ふふっ、全く何がしたいのかよくわからないですよこの国は」

ウインターローズへの愚痴をさりげなく吐いた彼女は締めこむ一瞬を一気に飲み干した。

「ですから、この人について情報を得るにしても少し時間がかかってしまいますが」

「いいさ。情報がなくては迂闊に動けない」

「わかりました。ですが私よりも、彼らにお願いした方がいいと思いますよ？ お知り合いなんですよ？」

「あちらはあちらで調査していることがある。今頼むことは難しい。まあ、これを機にしばらくはのんびりさせてもらおうさ。それにしても

詩か……」

「おや？　もしかして荊軻さん、詩人だったりします？」

「まさか。私はただの客将だよ」

グラスに入った冷水を飲み終え、荊軻は懐から一冊の本を取り出した。書かれているタイトルは、

「ウィンターローズ詩集、ですか」

「ああ、昨年度のな。詩は詠んでいて飽きることはない。しかし私がいた国でも詩は愛されてはいたがここまで中身の薄いものではなかったぞ」

「あら？　お気に召しませんでしたか？」

「そんなことはない。強いて言えば、恋愛ものが多すぎて私には退屈に感じただけだ」

荊軻が詩集を開いて挟んでいたしおりを抜き取った時、ヘザーは詩集のページではなくしおりの方に視線を奪われた。そのしおりはただの紙切れなどではなく、面に百合ユリを押し花として作られた荊軻お手製のものだ。

「お洒落なしおりですね」

「非売品だぞ。譲ってもいいが自分で作った方がいい。作り方がわからなければ私が直に伝授してあげよう」

「それはもう、是非お願いします。あつ、読書をするなら私はここで失礼しますね。そろそろお店の準備もしなくちゃいけないし」

「酒に溺れていながら店を開けるのか」

「ふふん。これが私なんですよお。酒は飲んでも飲まれることはありません。これはコミュニケーションを円滑に取るためですから」

席から立ち上がり箸を手にしたヘザーは酔っていないと証明するためにあたりをササツと掃いてみせる。終いには箸を使った曲芸まで披露したが、荊軻が見るにその動きはどこか覚束ない。いつ床に倒れて寝込みを決めてもおかしくないと理解した彼女は肩をすくめた。

「私も手伝おう。何からすればいい？」

「いいんですか？　では外の階段に積もった雪を掃ってもらっても――

「『ここから立ち去れ雪女ッ!!』」

突然店内にまで響いてきた罵声に二人は酔いから覚めたように目を丸くした。

「な、何でしょうか?もしかして暴動?」

「慌てるな。まずは窓から覗いて確認する」

動じる様子を見せることなく荊軻は速やかに窓際へ身を隠す。ヘザーも彼女のあとに続いてかけ足で隣へ駆け寄った。

閉められたカーテンの隙間から外の状況を確認すると思わず荊軻は唇を歪めてしまった。何をやっているんだと言わんばかりに、彼女は店の出入り口へと歩を進める。

「荊軻さん、どちらへ?」

静止の意味を込めたヘザーの注意喚起に荊軻は歩を止めるが、

「我が主^{あるじ}が、危機に瀕している。ならば私が駆けつけるのは必然だ」

扉を開ける。ドアベルの音が静かに鳴る。入ってきたのは凍える冷気と耳障りな罵声のみ。荊軻は一步、また一步と気配を完全に絶ち切って罵る集団の背後に忍び寄る。

「少々手荒だが悪く思わないでくれ」

そう呟いた荊軻は手に持った一つのライターで灯りを点火する。

——この寒空の下、その場に立ち止まっただけではさぞ冷えるだろう。

「さあ、舞踏会の幕上げだ」

×

ウインターローズ 入口前

「や、やっとなついた」

吹雪が止んだ後、オレたちは小屋から退出し、サボテンの案内のもと、ようやくウインターローズへとたどり着いた。

長かった。とにかく長かった。まさか雪の中に害虫が隠れ潜んでいるとは想定外だった。いや、虫つて雪下において平気なのか? 凍え

死ぬことはないのかとは思ったが考えるだけ無駄だった。

いや、それは置いておくとして――。

「なんでついてきたのかなハツユキソウ？」

小屋から出る際、ハツユキソウもいつの間にかオレたちと同行していた。気がつかなかったと聞かれればそのとおりとしか言えない。服装が完全に雪に溶け込んでいるからというのもあるが、正直誰かに構っているほど精神的な体力がなかった。

「え？ それはですね。私。長いものには自ら巻かれていくスタイルなんです。ここで会ったのも何かの縁。最後までお供させていただきますから」

迷惑だったらごめんなさいと頭をぺこぺこ下げるハツユキソウ。ここまでされては追い返すわけにはいかないだろう。男が廃るというものだ。

それに、ここからはもう案内役は彼女一人だけなのだから。

「ここまで連れてきてくれてありがとう。サボテン、アカシア」

「私からもお礼を。ありがとうございました二人とも。」

オレに続いてモミジも二人の花騎士に一礼する。そう、ここまで来ることが出来たのも彼女たちのおかげだ。自分には利益にならないのに、献身にオレたちを導いてくれた二人にはいずれ恩返しをしたいところである。

「いいの。団長をここまで、連れてくるのが、わたしの役目だったから」

「そうそう。私もサボテンも自分の職務というか役割というのかな？

うん、それを全うしただけだからね。本当はそっちについていきたいけどさ」

二人とも当然のことをしたまでだと揃えて口にする。

「それに、私たち花騎士は世のため人のために動くものだからね。まっ、それに関わらず人助けするのは当たり前よ。困っている人のためならば、たとえ火の中水の中、害虫の中でも助けるからね」

「アカシア、話はそこまで。ビリーを、待たせ続けるの、よくないと思う」

「あつ、そうだった。すっかり忘れてたわ！」

良い人なんだけどどこか抜けてるような。こんな上司に付き従ってる人たちもさぞ大変だろう。

「じゃありツカ、モミジ、また会いましょう。次に会う時は長期休暇入れて力貸してあげるから期待してネ♪」

「いや、輸送の任務を頑張ってくださいよ。でもありがとう。その気持ちだけで十分だ」

「団長、元気で。わたしも、次に会う時は、美味しい料理を、ご馳走するから」

「サボテンもありがとう。ブロッサムヒルに戻ったらそっちに遊びに行くよ」

「うん。待ってる」

最後に別れの握手を済ませる。それに満足したのか二人は早々にオレたちの前から姿を消した。無事にビリーと合流出来ればいいのだがと不安が過ぎるが心配するだけ徒労だ。とにかくまずはここから先どうするかだ。

と思っていた矢先、帰ったはずのアカシアがオレたちのもとに急いで戻ってきた。

「どうかしたのかアカシア？」

「いやあ、これを渡すのをすっかり忘れててさ。……はい、これ」

アカシアから手渡されたのは一枚の紙。何が書かれているかはまったくわからない。何せ文字が自分がいた世界とはまるつきり違う。読めなくて当然だが、言語は日本語と変わらないのは不幸中の幸いとも言える。

「これは？」

「特許状。ネロから君に渡してくれて頼まれてたんだよね。私としたことがうっかりしてたわ」

「特許状？」

「通行許可証みたいなものよ。検問所を通るために必要でね。それを警備兵やら門兵やらにでも突き出せばすぐに街中へ通してくれるわ」
所謂パスポートというやつか。どこの国にもこういうのは必要不

可欠なんだな。

「それと、気をつけなさいねリツカ。今のウィンターローズはいろいろと物騒だから」

「忠告ありがとうアカシア。あとはオレたちで何とかするから」

「それ聞いて安心したわ。サボテンもキミのこと心配してたからね。いいわねこの色男♪」

そうからかって彼女は今度こそ飛び去って行った。

色男って、オレはそんな大層な人間じゃないんだけど。

「さて、これからどうするべきか」

アカシアも去ったことだし今こそ次のことを考えなければならぬ。幸いなことに、ここにはハツユキソウという土地勘のある花騎士もいる。街中で迷うということはまずないだろう。

「まずは宿を取るのが先決ですね。ハツユキソウさん、この時間でどこか泊まれる宿舎はありますか?」

「もしかして私の出番ですか!? いいですよ、ご案内します!」

ハツユキソウは子どものようににはしやぎながら先に行く。頼られることが嬉しいのかわからないが、小さな手を振って手招きする様は本当に幼い子どもに見えた。

「慌てないでくださいハツユキソウさん。すぐそちらに向かいますから。団長、急ぎましょう」

「わかってる。こんな寒空の下にいつまでもいるのは堪えるし」

オレは陽気に振る舞うハツユキソウのあとをモミジと一緒にについていった。

ウィンターローズ 街中

ウィンターローズに入るのは本当にあっさり出来た。

アカシアから受け取った特許状を見せたら、警備兵はすんなりオレたちをウィンターローズに通してくれた。

特許状ってスゲーと感心するのも束の間、オレはウィンターローズの街を目の当たりにするわけだが――。

「――すげえ!」

ブロッサムヒルで初めて世界花を見た時と同じように、オレはただ
圧倒された。

ウインターローズは大規模な結界に包み込まれている。ところどころに生えている巨大な結晶、クリスタルと言うべきか。これはウインターローズの象徴と言っても過言ではないはずだ。

だがそれよりも相応しい国の象徴といえればこれだろう。一目見れば忘れることはない巨大な花、つまり世界花だ。ウインターローズの世界花はブロッサムヒルの世界花とは容姿も何もかもが違う。ガラス細工などの、人の手で造られたものではない。氷のように透き通った薔薇の花を咲かせているのだ。

「すごいですよ、ですよ！ 私も初めて見た時は驚いちゃいました。私が団長さんも私と同じように感動しましたか」

「そうだね。薄々感じてはいたけどこういう花が国ごとにあるのかな？」

「さすがですね団長。おっしゃりとおり、世界花は各国それぞれに存在します。ですが今は」

「宿を探すべき。顔にそう書いてある」

オレはモミジの顔にビシッと指差す。

本当ですかと、モミジはペタペタと自分の顔を触って確認しました。純粹というか生真面目というか、これはからかいがある。

「それにしても、やけに人が少ない気がするんだけど」

街中を歩き続けているが街にいる人はほとんど見かけられない。家に灯りがついていてから人がいるのは確かなんだけど、街に賑わいが何一つ感じられない。寒いから外出したくないというのならわかるが、雪の国の住人がそんな理由で出歩かないのはおかしくないか。「仕方ないんです団長さん。十五日前からこの国は異常な大雪の影響で食糧危機に陥ってしまったんです。今では配給制で決められた時間には食糧は提供されません。だからみんな出来るだけ家から出ないで体力を温存しようとしているんです」

異常事態が起こっているのはブロッサムヒルだけじゃないのか。食糧危機という状況に追い込まれそうになったことはカルデアでも

あつたがここでは現実に起きている。そういえばモミジとアカシアが言つてたような――。

――「ウインターローズは悪天候に見舞われて国外との貿易もままならない状態なんです」

――「そうなのよ。猛吹雪に襲われることなんて今じや当たり前で、輸送隊が結構やられてるのよね。本当に困つたものよ」

貿易がままならない、輸送隊が来れないともなれば食糧危機となつても仕方ないのかもしれないが食糧の備蓄はしていなかったのか？ さすがに十五日という期間でここまで追い込まれることはないはずだ。

「害虫による被害も尋常じゃないんです。多くの町村が襲われて……、それだけじゃないんです民家も当然なんですけど食糧の保存庫、とにかく食糧のあるところばかり襲撃されて。人々はパニック状態。あるところでは暴動で食糧の奪い合いが起きて、もうとにかくここ最近是不幸ばかりが重なつて大変なんですよ……。どうしてこんなことに……」

「ハツユキソウ……」

「く、暗いお話をしてしまつてすみません！ 今は宿探しでしたね！ もうすぐ着きますから頑張りましょう！ 配給制とはいつでも旅

は道ずれ世は情けです。旅人さんなら食事の提供は――」

「そんなもんねえよ。この雪女が」

ちようと広場に出たところで、突如見知らぬ屈強な男がオレたちの目の前に立つていた。

男が言つた雪女というのはわからなくもないが、なんだ？ どこか様子がおかしい。

そんな男を見たハツユキソウは怖くなつたのか、慌ててオレの背後に隠れてしまった。

男は眉間にシワを寄せながらジリジリと歩み寄ってくる。

「ハツユキソウ、この人に何かしたのか？ やけに怒っているように見えるんだけど」

「うう、それは……」

「なんだ兄ちゃん、知らねえのか？ そいつが、このウィンターローズを地獄に変えやがった張本人なんだよ!!」

「なんだって——？」

「そいつは前々から雪女だってウワサがあつてな。雪女なら雪を操って吹雪にしてみようことなんか造作もねえ。害虫だってテメエが操ったと証言してるやつらがいっぱいいるんだよ」

「ち、違います！ 私は——」

「ダメれ！ 裏切りものの花騎士が、地獄に堕ちろッ!!」

——こいつ。

怒りの頂点に達したのか、男は大剣を力任せに振り上げる。

「待ってください」

見るに見かねたのか、モミジがオレたちの前に立ち、彼女もまたガンブレードを構えた。

「それはあまりにも言いがかりというもの。ハツユキソウさんがやったという証拠もないのに、根拠のない噂を信じて彼女を殺そうとは不届き千万です！」

「——ッ。テメエに、余所者にオレたちの何がわかる!? この現状を打開するにはそいつを殺すしかねえって誰もが信じて疑わねえ！ オマエら出てこいッ!!」

男の号令に広場の周りは彼の手下とでも言うべきか、様々な鈍器を持った野蛮な連中がオレたちを囲み始めた。

「だ、団長さん……」

「——ッ。この人数、しかも街中なのに堂々と。巡回してる兵士とかはいないのか!？」

「無駄だぜ兄ちゃん。何せオレたちは国に雇われた傭兵。見回りの兵士でもオレたちのことは知らんぷり。つまりオレたちはそいつを殺すに至っては何しても構わねえのさ」

国絡みかよ。国が花騎士じゃなくて噂を信じるとかどういう神経してるんだ!？」

「モミジ、逃げ道は作れるか？ 出来れば殺すことなく、街にも被害は出さずに」

「難しいですね……。これが人ではなく害虫ならまだ何とかかなりました。ですが、命令というなら絶対成し遂げてみせます」

さすがのモミジでも手に余るか。モミジの言うとおり、この人たちが害虫であればまだ何とかできなかっただろう。しかし相手は人間だ。一人でも傷を負えばそれを理由にハツユキソウを悪と決めつけてしまう。これが万事休すというやつか。

「オマエら殺つてしまええええええ!!」

男の命令に周りの連中も一斉に襲いかかってくる。

覚悟するしかないかと思つたその時だった。

バンツ！ バババババンツ!!

周囲の男たちは全員、足元で爆発した何かに驚き、恐怖で飛び退いたが、その後ろでもまた何かが爆発した。

知っている。これは爆竹だ。もとは鬼・魔除けのものらしいがここでそれを使うとはある意味センスある。いや、彼らが鬼でも魔物でもないのだけど、いったい誰が？

「我が主よ」

「ひっ!？」

突然耳元で囁かれたからビックリして思わず声が漏れたが、この声の持ち主くらいはわかる。

「そう驚かれると困るが時間がない。私に良い隠れ家があるゆえ、そこに案内する」

「ありがとう荊軻。助かる」

アサシン サージュアント
暗殺者の英霊、名は荊軻。

第二特異点で共に戦った刺客。オレが第二特異点に来るまでにネロ陛下の下で客将として従い、敵であった連合ローマ帝国にいた皇帝を呂布とともに三人も暗殺したというトップクラスの英霊だ。

「モミジ、今のうちに行くぞ!」

「了解です、団長」

「ちっ、逃がすか!」

男がモミジに向かって大剣を振り下ろすが、モミジはそれを難なく回避し、容赦なくその大剣をガンブレードで叩き割った。

「——なッ!？」

「とんだ鈍剣ですね。鍛え直すことをオススメします」

そう言った彼女は今度は見事なボディブローを決め込み、情けをかけることなく頭部を蹴り上げてそのまま蹴り飛ばしてしまった。

こわい。モミジコワイ。これからちよつとずつかからおうと思っ
ていたけど下手すればオレもあんな風に肅正喰らうのか。

「団長、急ぎましょう」

「あ、ああ、行こうか」

今度から、からかう時は気をつけよう。

×

ウィンターローズ 酒場「カルーナ・ブルガリス」

男たちの追撃を受けることなく、オレたちは荊軻の案内のもと、彼女が隠れ家として利用しているという酒場へ到着した。看板には、酒場の店名『カルーナ・ブルガリス』と表記されている。

カルーナってカルナさんのことかと一瞬脳裏に浮かんだが、そんな親父ギャグはどうでもいい。

「戻ったぞへザー。悪いが今日は店を開けないようにしてくれ」

荊軻に続いて酒場に入ると、荊軻の前にはへザーと呼ばれた女性が
箒で床を掃いていた。

「そのようですね。お二人とも初めまして、花騎士のへザーと
いいます。以後お見知りおきを」

三つ編みのおさげにエメラルドのような瞳を持つ彼女は丁寧にお
辞儀する。

オレとモミジも彼女に合わせて思わず軽く一礼するがハツユキソ
ウだけは違った。

「へザーさん、お久しぶりです」

「ハツユキソウちゃんもお元気そうでなによりです」

仲良く手を握って和氣藹々と喜んでいるようだが、もしかして知り
合いなのか？

「紹介しますね团长さん！ この人は私と同じく花騎士でヘザーさんです。害虫討伐の任務でよくお世話になったんですけどお酒の飲み過ぎが玉に瑕で」

「そんなことないですよ。お酒はお互いを理解するのに最適。酌を交わせば即仲間入り。ぼつちな人もコミュ力ない人も繋がりを持てるようになる神アイテム！ そこでいかがでしょう、お近づきにグビッと一杯！」

「未成年です！」

「あらー、それじゃ仕方ないですね。代わりにオレンジジュースでも飲みますか？」

「出来れば温かいもので」

「でしたらお酒を」

「未成年ッ！」

人の話を聞いてください。

よく見れば、ヘザーの頬は真っ赤に染まっているし、すでに出来上がっているじゃないかこの人。

「主よ、諦めてそこに腰を下ろすといい。ヘザーの酌はいいぞ、安酒でも酒器に注げば美酒へと変わる」

荊軻に言われるがままにオレはカウンター席に半ば強制的に座らされる。

モミジもオレの隣に座り、ハツユキソウは既にモミジの隣でオレンジジュースを飲んでいた。

「さて主よ、話を聞かせてもらおう。飲んで全部吐くまでな」

それからして、オレは荊軻たちにこれまでの出来事を洗いざらい説明した。

無論、酒には口をつけてはいない……と言いたかったです。

ハイ。ワタシ、負ケマシタワ。

荊軻曰ハク。

——「私がいた国ではな。干杯後は一気飲みが決まりだった。それで敬意を表すことになる」

と、涼しげに祖国にある習慣を語ってくれる中、ヘザーがなにやら

酒器に白く濁った酒を注いでくれた。

芳醇な香りが鼻孔をくすぐる。ニオイはキツイが飲めばきつと感動して涙が出るに違いない。そう自分に言い聞かせて、荊軻に教えてもらったとおり、乾杯したあとはそのまま一気に口から喉へと流し込んだが最後。

「辛い！　これが、喉が焼けるような痛みというやつなの!?　アルコール度数幾つなのこれ!？」

「それは白酒バイチユウの低度酒ですよリツカさん。度数は38度でウイスキークラス一歩手前ですね」

「お酒初めてなのにナニコレヒドイ！　殺す気か!？」

荊軻から差し出された水の入ったグラスを辛抱たまらず受け取った。

とにかく口をゆすいではうがいをする。二度三度と繰り返し、このヒリヒリ感を払拭しようと奮闘したが中々取れない。治まるのを待つしかないか。

「では本題に入ろう。主、聖杯探索についてだが既に調査は始まっている」

突然の吉報に酒の痺れが一瞬にして切れた。

まさかオレがない間にもサーヴァントたちはこの問題を解決しようとして動いてくれているとは想像していなかった。

「本当!?　それで、聖杯のある場所は」

「あいにく未だ見つかってはいないが幾つか候補は絞り込めてはいらぬ。へザー、地図はあるか?」

「ありますよ。こちらをどうぞ」

へザーが巻かれた地図を荊軻に手渡す。

広げられた地図に載っているのは当然ウインターローズのものだった。世界花が描かれているのだから間違いない。

「幾つか候補があるとは言ったが、ここに聖杯があると最重要視している」

地図に指差された地点に目をやる。

そこには、

「閉ざされたお屋敷？」

いかにも童話か何かに出てきそうな名称が書かれていた。

「え？ 閉ざされたお屋敷って、あの閉ざされたお屋敷ですか!？」

「そうだ。ハツユキソウだったか？ 君は知っているのか、ここがどういう屋敷なのかを」

「知ってますよ。」あの森に近づいてはいけない。誰かを探してはいけない。興味を持ってはいけない。」ウインターローズの子どもなら誰もが親からそう教わる、みんなに忌み嫌われてるお屋敷ですよ。実際私も結構怖く思ってますけど。考えただけでも恐ろしいです」

体をビクビクと震わせながらハツユキソウが語るに、どうやらこの閉ざされたお屋敷とは相当危険な瘴地らしい。

呪われているのか？ 幽霊が出るのか？ はたまたポルターガイストでも起きるのか？

いずれにせよ、目星がついているのだから行かないわけがない。

「さて、どうする主？ 決めるのは君だ」

「もちろん行くさ。今からでもと言いたいけど今日はもう疲れたし明日にしよう。それでいいかな二人とも？」

「無論、私は団長の命令に従うまでです。ですが、ハツユキソウさんは」

「わ、私も全然バッチリオツケーですよ！ 最後までお付き合いしますとも！」

モミジは相変わらずだがハツユキソウの返事は意外だった。

さつきあんな目にあつたことに加えて、怖いと感じる屋敷に無理してついて来なくてもいいというのに。

「了解した、主よ。では私はしばらく留守にしよう。ヘザー、我が主を頼んだ」

「それは構いませんが、どちらへ？」

「例の事務所（事務所）に決まっている」

そう言って荊軻は幽霊のように姿を消した。

サーヴァントなら誰もが出来る霊体化（霊体化）というやつだ。

それに驚いたのか、モミジは目を丸くし、ハツユキソウはビツクラ

こいて席からひっくり返った。

幽霊だと騒ぎ立て、どういふことかと尋問してくる始末だ。

「大変ですねリツカさん」

「大変なのはいつものことですけどね。それと、ありがとうございます。すへザーさん。荊軻のこと匿ってくれて」

「いいんですよ。彼女には酔っ払いを追い払ってくれた恩がありますし、困ったときはお互い様です」

良い人だ！　ここまで来るのにキャラが濃い人ばかりだったからどこか安心するよ。

にこやかに微笑むその笑顔、それを見るだけで癒され――

「それは置いといて、このまま親睦会といきましょう！　私の驕りですからジャンジャン飲んでくださいね！」

ドン！　と、へザーはオレの前に注いだグラスを差し出してきた。

オレは中身など確認することなくあっさり受け取り、勢いに任せて飲んでしまった。

お決まりな展開というかお約束というか、これが運のツキだった。

二度と味わいたくないキツイ一撃が……、まるで針千本を飲まされていくかのようだ。

「へザーさん……、お酒は二十歳になってから……です、よ」

第5話 「エドモン探偵事務所」

親睦会という名の酒宴が終わったあと、オレとハツユキソウは2階の個室に入りオレはそのままベッドへ横になった。

そう、オレたちはヘザーの計らいで酒場に泊まることになったのである。

大変ありがたいことだがオレの胃はキュルキュルと悲鳴を上げている。それもこれも無理矢理お酒を飲ませるヘザーたちのせいだ。今にも虹色の滝を吐きそうだが、ヘザーからもらった薬を飲めば朝には治るらしい。

それを信じてオレは薬を口に含み、ハツユキソウから渡されたグラスを手に取り水で胃の中へと流し込んだ。

と、オレのことはいい。

泊まることになった理由はこれとは別にある。

その理由が、このハツユキソウにあった。

なんでも、彼女はやたらと噂のネタとされるらしい。雪女というのもそうだが、彼女にまつわる噂は全て事実無根であり彼女は真つ当な花騎士だとヘザーは口にしていた。

噂というものはその性質上すぐに広まる。そして今の状況から察するに、当てのない人々は噂を鵜呑みにしやすい。仮に、宿に泊めてもらおうと願ったところで宿主から通報されるのがオチなはずだ。だから今回は本当に運がよかった。

「それにしてもよかったですね団長さん。ここに泊まらなかつたら私たち一生追いかけてたかもですよ」

「今日みたいな人たちに襲われるのも困るからね。ハツユキソウは大丈夫？」

「私ですか？」

「うん。噂を理由に襲われたんだからたまつたもんじゃないだろ？」

「そう、ですね……。でもこういうのは慣れてますから！ 子どもたちに雪女呼ばわりされて雪玉投げつけられるのと一緒のようなものですし。それに私は人々を守る花騎士です。挫けていられませんよ。」

だから団長さん、そんなに心配していただかなくても大丈夫ですから！

そう言ってハツユキソウはエツヘンと胸を張った。

「そんなに胸張ってもないものはないぞ」

「んなつ!? ひどいですよ団長さん！」

「ごめんごめん。ほら、飴ちゃんあげるから、これで許して」

オレはハツユキソウにひよいと飴を投げ渡した。

彼女はそれを慌ててキャッチすると笑顔になり飴玉を頬張った。

さて、いい加減に寝るとしよう。

明日もまた歩いてここから遠くにある屋敷に行くのだから、せめてこの酔いだけは完治させておかないとな。

×

「寝たようですね」

「ええ、団長もハツユキソウさんも布団を被ってぐっすりです」

時は既に真夜中。街中の灯りは街灯が点いてるくらいで家庭の灯りはほとんど見られない。寝静まった静寂、ランタン一つが一階の灯りを照らす中でモミジとヘザーはカウンター席で晩酌をしていた。

「それで、私に聞きたいことは何でしょうかモミジさん？」

「あなたの噂については聞いたことがありますよ情報屋のヘザーさん」

「あら、私のことご存じでしたか」

「……単刀直入にお聞きします。あなたは、私の姉について何か知っていることはありませんか？」

グラスに入った氷が傾く。カランと一つの音が鳴った後、ヘザーはひと呼吸を置いて口を開いた。

「姉……そうですね。この噂は、あなたに伝えておくべきでしょう。私からも単刀直入に言います。あなたの姉は、確かに死んでいます」

刹那。ヘザーの頭上にモミジの大剣が振り下ろされたところでピタリと動きが止まる。

まるで、何かに挟まれているかのような。モミジが振り上げようとした途端、柵は外されモミジは勢い余って後ろに転がってしまった。「何をしているモミジ?」

柵となっていた犯人が正体を現す。殺気を放ち、モミジの前で霊体化を解いたのは――。

「荊軻さん、いつからそこに……」

「宿主に手をあげてもらっては困る。今すぐその剣を鞘に収めてはくれないか?」

その清澄な声の裏に、モミジは背筋に悪寒を覚える。

死神の鎌を音を立てることなく首に掛けるかのように。荊軻から放たれる小さくも悍ましい殺気に、彼女は唾をグツと飲みこむ。

「……すみません。ご無礼を働いてしまいました。……今日はこれで失礼します」

刃を収めたモミジは頭を下げると俯いたまま二階へと上つていった。

一方荊軻はモミジが着席していた席に座り、ヘザーから冷水が入ったグラスを受け取っていた。

「ありがとうございます。危うく真つ二つにされるところでしたよ」

「礼など不要だ。それより何があった? あの殺意、尋常ではなかったが」

荊軻の問いにヘザーは目を瞑って答えた。

「あの娘はきつと、未だ現実を受け入れていないと思うんです」

「どういう意味だ?」

「そこはプライベートに関わるのでお答え出来ません。知つてのとおり私は情報屋ですから、教えてほしかったら対価を支払ってください」

そう軽くあしらったヘザーは席から立って『ワインセラーの整理をします』と、ワインセラーのある地下へと下りていった。

「まあ、聞かずともおおよそ見当はつくがな」

そうひとり言を呟いた荊軻は、手にグラスを取って口に冷水を運ん

だ。

×

「へいよーかるでらつくす!」

「へいよーかるでらつくすです!」

オレとハツユキソウのハイタッチの衝撃音が部屋に響き渡る。

説明しよう。へいよーかるであつくすとは、オレがカルデアにいた時に作ったハイタッチ式アイサツ!

しかしこれはマシユによって禁止となった知る人ぞ知る幻の挨拶なのである!

起床したあと、酔いが醒めていたオレは気合を入れるためにハツユキソウにこの挨拶を伝授したのである。

「いいですねこれ。起きたばかりなのにテンションが高まるというま
すか、身が引き締まるといういますか、気持ち的にすごくスッキリしま
すね! 団長さんすごいです。もう一回お願いしてもいいですか?」
「いいぞお。へいよーかるでらつくす!」

「へいよーかるでらつくす!」

やっぱりいいなこれ。あいさつはいい文明だと本当に思う。カル
デアに戻ったら復活させよう絶対に。

「おはようございます団長。よく眠れましたか?」

「あつ、モミジさん! へいよーかるでらつくす!」

「へ、へいよーカルデラックス?」

戸惑うのも無理はない。いきなりハイテンションでへいよーかる
でらつくすなんて言われれば誰しもキョトンとした顔になる。

オレはモミジに駆け寄って事情を説明した。

「なるほど、新しい挨拶ですか。いいとは思いますがさすがにこれは
仲間内以外に使うのはよくないかと」

「ごもつともな意見です」

「下で荊軻さんとヘザーさんがお待ちしてますよ。団長たちも早く着替
えを」

「着替え？　そういえばモミジ、その装いは」

「荊軻さんから変装したほうがいいと言われたので部屋にあるクロゼットから拝借しました。あつ、クロゼットはそちらにありますので。……団長？」

目のやり場に困る。いたってカジュアルな服装なのだがまた胸を露出させてる。北半球、南半球ともに露わにしてるわけだが隠す気はないのか。

「この服装ですか？　私は機動性を意識してるので動きやすいものを選んだのですが」

「いや、それは問題視してないというか。そ、そういえばモミジの剣、布で巻いたんだね」

「はい。こればかりは目立ちますし、マフラーもヘザーさんに預けて変わりのものを。ヘザーさんお手製のものですから大事に扱わないといけませんね」

そう自分に言い聞かせるように話すモミジを余所に、ハツユキソウがドタバタとオレたちの前に現れた。

「モミジさんに合わせて私もお着換えしました！　どうでしょうか」

どうでしょうかと言われても、相変わらず厚着してるから変化が見られない。

というより、いつの間に着替えたんだ君は。

「厚着するのが好きなの？」

「いえ、そういうわけではなくてですね。私の中に流れる魔力のせいなのか、低体温なんです。だから、こうして厚着してないと凍え死んでしまいますから」

「低体温？　体が冷たいってことか」

そういえば、さっきハイタッチした時、妙に寒気を感じたのはそのせいかな。手をぶつけた衝撃に雑じって気づけなかった。

「なんだってそんなそことに」

「恐らく、世界花の恩恵によるものでしょう。それより団長も早く着替えを」

「あ、ああ。じゃあしばらく廊下で待っていてくれ」

言つて、オレは二人を部屋から退出させたあと、クローゼットからサイズの合う服を急いで選び抜いた。女性を待たせるわけにはいかないし。

何より、普段着ているこのカルデアの制服ではどうしても寒い。早く温かい毛布にでも包まりたいほどにオレは厚手のものを欲しているのだから。

「みなさん、おはようございます。朝食の用意はすでに出来てますよ」
着替えを終えたオレたちは一階へと下りる。そこで、早朝からオレたちのために朝食を調理してくれたヘザーさんがテーブル席に案内してくれた。

テーブルには雪国にあつて当然であろうボルシチや、牛肉をふんだんに使ったシチューであるビーフストロガノフ、パンケーキにワツフル、ココアといったものは寒さをしのぐには欠かせない料理ばかりが揃えられていた。

「たとと食べてください。ウィンターローズの寒さをのり切るにはま
ず食べることが大事ですから」

「いいんですかヘザーさん、食糧も残り少ないのでは？」

「心配することありませんよモミジさん。困った時はお互い様です。
人は支え合うことが何より大切ですから」

良い人だ。やっぱりヘザーさん良い人――、

「ですが忘れてはいけないのがお酒です！ 本当はウォッカを振舞お
うと思ったのですが荊軻さんに止められてしまいました」

ダメだ。お酒を未成年にチラつかせてくる時点でアウトだこれ。

「朝から酒は関心しない。朝は酔いが回りやすいからな。主、ヘザー
のことは気にせず食事を楽しんでくれ」

荊軻が見ていてくれるなら助かる。もうお酒を勧めてほしくはな
いし。では早速冷めないうちに食べてしまおうとしよう。

と、その前に荊軻からもう一つ告げられた。

「主、食事が終わり次第すぐにここを発つが構わないな？」

「大丈夫。二人とも身支度は済ませてあるし、いつでもここを出られ
るよ」

出発の予定確認だったようだ。しかし行く先については何も言わなかったけど何か理由があるのか？

しかしまず腹ごしらえ。食糧に限りがあるはずなのにこうしてわざわざ食事を用意してくれたのだから美味しく食べないと失礼だ。

見れば、モミジは落ち着いた様子でボルシチを食べており、ハツユキソウは嬉しそうにビーフストロガノフを頬張っている。

オレも二人に倣って食事を満喫しようとココアに唇をつける。

——熱くて思わずコップを手放した。

ヘザーさんに朝食のことや宿泊のことについて礼を言った後、オレたちは荊軻の案内に従って街の中を歩いた。見渡せば出歩いている人はそれなりに見かけられるが、それよりも警備で巡回している兵士が多く見られた。

昨日襲ってきた男が言っていたように国が絡んでいたのであれば、オレたちは発見され次第捕まえられるか殺されるだろう。

昨日検問所を通過出来たのも恐らくハツユキソウをここから逃げられないようにするためだったんだ。

しかしこうして着替えという変装をしたおかげか、今のところ誰にも気づかれてはいない。

正体を看破されるのも時間の問題だと思うが。

「いたぞ、やつだ！」

まさか、もうバレたのかとオレは体を後ろに振り向かせた。花騎士たちも振り向いたが、こちらに追いかけてくるものは一人もおらず、代わりに誰ともわからない何者かが兵士たちに取り押さえられていた。

「あれはどういうこと？　なんで何もしてない人がいきなり」

「団長さん。たぶんあの人はレジスタンスの方だと思います」

「レジスタンス？　あつ、革命軍とかいう」

「みなさん食糧問題のこともあるけど今の政治に不満があるみたいなんです。貴族や政治家だけが不自由なく食事が出来るのに私たちにパンだけかと」

「それは不満も募りますね。今の私たちではどうすることも出来ませ

んしそこは政府に任せるしかありませんね」

モミジが慰める様に呟いた。

それもそのはずだ。今でこそハツユキソウはこの食糧問題の原因の一つとして疑いをかけられているんだ。無実だとわかっているのに責任感を感じてしまうのも無理はない。

「ついたぞ主。ここが最初の訪問先、”エドモン探偵事務所”だ」

オレたちは無事に目的地であるエドモン探偵事務所についたのであった。

外観は近代日本ではよく見られた趣ある和洋折衷建築そのもの。こういうブランド感というか浪漫ある住宅は好きだよオレ。

ん？ ちよつと待つて。エドモン探偵事務所？

「失礼」

オレの動揺はお構いなく荊軻は事務所の扉を開いた。

待つて。どうして彼が――

「団長、入らないんですか？ どこか具合でも」

「それなら今すぐ入べきですよ団長さん！ モミジさん、団長さんを担ぎましょう」

「はい」

「え？ ちよつと!?!」

降りしてと口にする暇もなく、オレは二人の手によつて半ば強制的に事務所へ連行された。

ウインターローズ エドモン探偵事務所内

内観は想像していた以上に落ち着いていた。アンティークな家具で揃えられており、書類なども散乱してはいない。広々としたこの応接間の奥には襖が見られるが、きつと座敷だろう。

暖炉で温かな火が燃え滾っているその前で、一人の女性が何やらポーズを決め込んでいた。

「あなたを犯人ですー！」

あれは、推理漫画でよく見られる犯人を名指しする時のポーズだな。鹿撃ち帽しかうちぼうをクイツと下げて人差し指でビシツと指差す。

その指先がまさにオレを指示しているんだけど、目と目が合った瞬間、彼女は顔を真っ赤にして慌てた素振りでも何やら言い訳しようとしている。

「ち、違いますよ！　こ、これは決して暇だったから探偵のモノマネをしてたわけじゃ」

「いえ、別に何も聞いて」

「違いますから！　とにかく違いますからあああああツ!!」

ぶんぶんと手を振って何だか可愛らしい娘。それが、オレが感じた第一印象だった。

「初めまして。私は探偵助手にして花騎士のサフランといいます。みなさんのことは荊軻さんから聞いていますよ。そ、それとさっきのこととはどうか内密に。というより忘れてください……さい……」

顔を俯かせてちらちらとオレたちの反応を確認してくる。

うう、変な罪悪感に押しつぶされそう。

「いやいや、気にする必要なんてないから頭上げてください。急に押しかけてきたこつちが悪いし。えっと、オレは藤丸立香。こつちがモミジで、隣がハツユキソウ」

「紹介に預かりました花騎士モミジです」

「同じく私も花騎士のハツユキソウです」

無理矢理自己紹介を始めたが、これで話を広げてさっきのことは互いに忘れることとしようじゃないか。

「サフランさんと呼んだらいいのかな？　質問なんだけどこのエドモン探偵事務所って」

「呼び捨てで構いませんよ。サフランと。エドモン探偵事務所は一ヶ月ほど前に探偵のエドモン・ダンテスが空き物件だったここを買い占めて開いたんです」

「この家を買ったの!?!」

エドモン・ダンテス。アレクサンドル・デユマが書いた小説“モンテ・クリスト伯”、日本では“巖窟王”というタイトルで知られている主人公だ。

エドモンは無実の罪で監獄塔シャトール・ド・ドイフに幽閉されるが、そこで出会った

フアリア神父の助けもあって脱獄し、自分を陥れた者たちに復讐する。という物語なわけだが、フアリア神父に託された財宝のおかげで彼はお金に困ることはなかったという。

まさか、現界時に財宝までも彼の手にあるというのか？

事実、彼には黄金律のスキルもあるし。

「ところでサフラン、伯爵は何処に？ 昨日はここで落ち合うと予定したはずだが」

そうだった。今為すべきことをやらないと。

荊軻に続いてオレもサフランに聞くと、彼女は困った表情を浮かべてため息をついた。

「それが、先に行くと言って私を残して出てしまったんですよ。外は害虫で溢れているのに。でも彼のことだから、きつと先行くついでに害虫を倒しているんだと思います」

「でしたら急いで追いかける必要があると思います。団長」

モミジの言うとおりだ。一人で行動するのはいくらエドモンとはいえ危険なことこの上ない。

「遅れを取るわけにはいかないし、すぐに行こう」

「待ってください。私も同行しますから少しお時間を」

「わかった。それと、もう敬語使わなくても大丈夫だから。疲れるでしよっ。」

そう指摘すると他のみんなもうんうんと頷く。

「……ありがとう。団長さん、もしかして平等主義な人？」

「平等なのかな？ ただオレは、素の君と仲良くなりたいたいと思ってるから」

でも言われてみれば確かに平等主義なのかも。恐縮することはあるにはあるけど。

「なるほどねえ……。ふふん、団長さん♪」

サフランがなにやらニヤニヤとした顔でオレの顔を覗き込んできた。

もしかして何か癩に触ってしまったのか？

「あなた、もといた世界ではモテたでしょ！」

と、サフランは自信満々にさっきの決めポーズでオレに指差してきた。

「モ、モテてるとかそんなことない！　むしろ襲われそうなことばかりだよ！」

「そうなの？　でも荊軻さんが言ってたわ。夜な夜な部屋に押し込んでくる人がいるほど好かれてるって」

「ちよつと！　なに吹き込んだんじゃってしてくれてるの荊軻!!」

「はて？　私は事実を口にしたまだけだ？」

薄ら笑いをしているのだから確信犯だよこの人！

誰かあいつを捕まえて牢屋にぶち込んでくれええええええッ!!

ウインターローズ　ナイドホグル雪原

オレたちはサフランの案内のもと、抜け口からウインターローズの街から脱出し、今はナイドホグル雪原というウインターローズ指折りの警戒区域に足を踏み入れている。

幸いにも雪は止んでおり、今なら安全に進むことができるだろう。

ここを通り抜けた先に目的地である閉ざされたお屋敷があるようなのだが、この雪原は害虫の巣が密集しており、危険視していたのだが。

「すごいですねこれ……。見渡す限り戦いの爪痕が残っていて、これをエドモンさんが一人で」

「うわあ……。害虫さんの巣もこっぱみじんですね。もしかしてエドモンさんはすごく怖い人なんですか!？」

というように、どうやらエドモンが先に害虫討伐してくれたおかげもあってオレたちは難なく先へ進めることが出来ている。

が、どうにもハツユキソウには怖い人だとイメージが出来上がってしまったそうだと。

それからして数時間後。オレの今までの経験上なら道中でイベントが起こることが多々あったが、今回は襲撃に会うこともなく順調に目的地へ進んでいた。

「あつ、見えてきましたよ。あれが閉ざされたお屋敷よ」

サフランが指摘した方向へ目を向けると、確かに大きな屋敷がポツンと聳え立っている。

そして、もう一つの影の姿も。あれは間違いなく

「おじ様あー!」

え? 今なんとおっしやいました?

サフランが影に対して手を振ると、それは瞬きをした瞬間に視界から消えて

「呼んだか?」

さも当然のようにオレたちの後ろに姿を露わにした。

「もう、探したわよおじ様。一人でここまで行くなんて無茶にも程があるわ」

「探した? 飼い犬が後からついてきたの間違いではないか?」

「何ですってツ!?!」

頬を膨らませてポカポカと叩くサフランを無視して彼は、エドモンはオレに視線を向けてきた。

「待っていたぞマスター。程なく俺に駆けつけてくるだろうと踏んではいたが少々遅かったな」

懐かしむこともなく平然とした顔でエドモンは懐から煙管キセルを取り出すと、

「火をつけてくれ」

素っ気ない態度で要求してきたな。

なんでこう、もつと再会の喜びとか労いの言葉とかないのか思ったが、要望通りにエドモンの煙管に火をつけることにした。

でもその前に、気になっていることを一つ。

「エドモン、その恰好はなに?」

そう。エドモンがいつも着ている服はスーツに引き締まった赤いネクタイ、黒寄りの外套。

それが、今オレの目の前にいるエドモンは大正ロマンのそれ、着物にシャツに袴。

モミジと同じくマフラーまでして、チューリップハットを被っている。

この人、豪くこの世界を楽しんでないか？

「知つてのとおり今の俺は復讐鬼ではなく探偵だ。この衣服はサフランが見立てたもの故、仕方なくだ」

そういう割には豪く気に入ってように見えるよエドモンさん。

ポケットからビリーに貰ったライターを取り出す。

蓋を開いて火を起こし、彼が手に持つ煙管に火をつけると、エドモンは上機嫌に煙管を口に咥えた。

「上出来。終局特異点以来だなマスター。ああ、良い」

「ちよつと、私を無視しないでよ！」

「エドモン、サフランに冷たくない？ もう少し優しくしてあげても」

エドモンからの返事は何もなかった。

煙を吸っては吐いての繰り返しで、これにはサフランもオレも頭を抱えることしか出来なかった。

「それで伯爵、屋敷のほうはいかがでしたか？」

「荊軻。ああ、ここ一週間調査をしたが今日は厄介なことに人払いの結界が張られている」

「人払いの結界か。害虫除けではなく？」

「そうだ。サフラン、おまえはこれをどう捉える？」

「私!? そ、そうね。たぶんおじ様が覗き見してたことがバレたんじゃないの。一週間も私に内緒で屋敷に行ってたようだし！」

やっと話が進み始めたと思つたら、エドモンのサフランに対する扱いがどんどん明るみになってきてる気がする。

当のサフランもたいそうご立腹で。

いやだこれ。そのうち修羅場になりそうでコワイ。

そんな今にも堪忍袋の緒が切れそうなサフランが続けて言った。

「きつとおじ様を警戒してるのよ。だからここは一旦引いてから」
「それでは遅い。おまえもわかっているはずだ。この国の吹雪は日を経つごとに強くなつてることに。最悪、一週間でこの国は滅ぶ」

そう断言したエドモンにオレは言った。

「国が滅ぶって、ウインターローズは結界で守られてるはずじゃない

の?」

「確かに守られてはいるがな、厄介事は他にもある。マスター、ここに来るまでの間におまえは見たはずだ。復讐ヌの眼を」

「そんなの……」

いた。

事務所に行く途中で捕まったレジスタンスの人が。

そういえばハツユキソウが言った。

——「みなさん食糧問題のこともあって今の政治に不満があるみたいなんです。貴族や政治家だけが不自由なく食事が出来るのに私たちにはパンだけかと」

確かにこれなら国民がいつ暴動を起こしてもおかしくない。

ハツユキソウが噂のせいで狙われるくらいだ。お偉いさん方が満足に食事を出来ているか出来ていないかに関わらず、人々は集団となって躊躇ヒいなく襲うだろう。

「推理出来たようで何よりだ。それでこそ俺のマスター。どこぞの貴族様に見習わせたいほどにな」

エドモンはそう誰かを嘲笑するように罵った。

「それで、どうしますか団長? 話を聞く限りでは、ここは結界を強行突破するという話に流れてるように感じますが」

モミジの進言にオレが頷く前にエドモンが先に口を開いた。

「わかってるな貴様。マフラーを捲カいてるということはおまえがモミジか。マスター、なかなか良い花騎士サーヴァントを従ツえたな」

「もう、おじ様! 事は急を要するんでしょ。それでどうやって強行突破するつもりなの?」

そうそう、サフランの言うとおりだ。

兎にも角にも、早急に解決しないといけないんだ。

聖杯がこの屋敷にあるのなら、急いで回収して正しく修正すれば何もかも解決する。

「それで、結界はどの程度の強度を持つてるのかわかってるのエドモン?」

「試しに俺の黒炎で破壊を試みたが傷一つつかなかった。恐らく対

軍、或いは対城宝具でなければ破壊するのは難しいだろう」

「そんなに!?!」

「宝具?」

花騎士たちは知らなくて当然だ。

宝具とは英^{サーザント}霊の切り札で、それを使えばあらゆる逆境を覆せる最強の武器。

「荊軻は宝具」

「私のは対人、それも暗殺用だぞ主。結界を破ることに何の役にも立たない」

うーん、そうなると残るは花騎士たちか。

モミジのガンブレードで試してみる価値はありそうだけど、二人についてはまだ知らないな。

「ハツユキソウとサフランはどんな武器を使うんだ?」

そうして、単純な質問に先に回答したのはハツユキソウだった。

「私の武器は、武器というよりは魔術ですね。大気中の水分を凍らせて出来た氷をズドーンと落とすんですよ! どうです? すごいと思いませんか!?!」

「すごいよハツユキソウは。そんなすごいこと他の人じゃ出来ないからね」

よく漫画で見られる能力だけど実際それが出来るというだけです
すごいよそれは。誇っていいと思う。

「では私ですね。私はこれです」

「ん? もしかしてボウガン?」

「はい。この容器に入った液体が弾の代わりとなって射出される仕組みです」

というわけで二人の武器を把握したわけだが、これではいまいちパツとしない。

対城宝具並みの火力を出すにはもっと力のあるものでないと。

仕方ない、物は試しだ。

まずはモミジたちの全力攻撃で――

「ん? あれ? もしかしてカトレアちゃんのお友達?」

その言葉のほうに振り向くと、一人の少女と――、

首輪をつけた”害虫”^{アリさん}の姿がそこにあった。

「誰って顔してるね。私、オンシジューム！ オンシでいいよ。よろしくねー♪」

第6話 「花騎士は英霊に勝てない」

むかしむかし、真つ白な雪に包まれた王国のお城に、一人の女の子が生まれました。

その生まれて間もない小さな赤子にはとても強い魔力が宿っていて、城にいた人々は赤子を恐ろしく思いました。

人々は、その女の子の魔力に恐怖するあまりに言いました、『もしかしたら、この国に災いをもたらすかもしれない』

同じように、国のえらい人たちも、得体の知れない魔力を恐れるあまり――。

――女の子を殺すことにしました。

まだ赤子で、会話することさえできない可哀想な女の子なのに。

人にも、国にも、醜い悪魔だと恐怖され、恐れられ、誰一人味方がいないのに。

王様が無抵抗な赤子を殺せと、処刑を命じたその時でした。

王家に仕える一人の騎士が言いました。

『それはあんまりにございます。王よ、この赤子はまだ何も悪事を働いてはおりません。罪なきこの子を裁くとあらせるならば、どうかこの罪深き私を罰してください』

王は顎に手を当て考えました。

なぜならその騎士は、騎士たちの中でもとても強く、最も信頼されているからです。

王は答えました。

『よかろう。しかし貴公もここを立ち去れ。その忌まわしき赤子を連れて人の目が届かぬ遠い辺境の地へ行くがいい』

騎士は王の命令に従い、赤子を連れて城を抜け出しました。いなくなったところで騎士たちは口を揃えて呟きました。

『あいつは一人の悪魔に手を差し伸べたバケモノだ』

それから長い年月が経ちました。

女の子はすすくと元気に育ちました。

大人になっても、人を傷つけることはありませんでした。立派なお家で楽しく暮らし、何不自由ない幸せな毎日を送っていました。

それなのに、女の子を助けた騎士は、みんなから陰口ばかり言われました。

『ああ、あの騎士は悪魔の手先だ。呪われるぞ』

多くの人々は知らないのです。

騎士が女の子を助けたかっただけであることを、なのみんな、騎士を悪者みたいに言うのです。

『かわいそうな騎士さん。私は、あなたの優しさを知っているのに……』

(ある童話の一部を抜粋)

×

ウインターローズ 閉ざされたお屋敷

女はいつものように本を読んでいた。

部屋の壁に立て並べられた幾つもの書架の中から、何気なく選んで引っ張ってきた一冊。

天蓋付きの高級ベッドに体を寝かせ、パラパラとページをめくるだけの退屈な暇つぶし。

別に、詠むこと自体が嫌いというわけではない。

いつもなら、使いの者に頼んで購入してきてもらったオススメの本を楽しみに朝から晩まで読むほどに。

ただ、今日はいつにも増して不機嫌なだけだった。

「ああもうッ！ いったいいつまでいるつもりなのよあの男は！」

怒りと鬱憤を込めて力任せに本を床に投げつける。これが彼女のストレス発散。苛立ちを物にぶつけるといふ八つ当たり。

いけないことだとわかってはいる。しかしこうすることでしか鬱憤を晴らせる方法を知らないのだ。

毎日毎日、誰かもわからない不審者の視線を感じながらの生活は、

彼女の怒りのボルテージを高らかに募らせる。

正直、怒りを通り越して気持ち悪い——

気分最悪、身の毛がよだつ。そうならないように結界まで敷いたというのにと、女は悔しさのあまりに歯を強く噛み締めた。

「ナイフでもブン投げてやりたいわ！ 次の結界は触れたら痺れるお仕置きものにもしてやろうかしら。ううん、とりあえず今はあいつの悔しがってる姿でも見てやるわ。今頃手こずってぎやーぎやーと泣き喚いてるに違いないだから！」

自信たつぷりな笑みを浮かべるとベッドに腰掛け、空中に指先一つで横線を引く。途端、辿った軌跡が半透明のモニターとなって屋敷の外の色を映した。

「あら？ 今日は一人居やなくて大勢いるのね。花騎士みたいな娘もいれば、貧弱そうな優男そうなのもいる。わざわざこんな忌まわしいところにピクニックでも来たのかしら？ あっ、オンシジュームまで」

確認出来るのはそれだけ。何を話しているのかまでは全くわからない。

使い魔を使役して遣いに放てば会話も盗聴出来るが、彼女にそこまでするつもりは毛頭ない。

加えて今の彼女には、ストーカー男の悔しがる顔を見ることなどどうでもよくなっていた。

それより注目したのは、その隣にいる優男に他ならない。

女は、藤丸立香^{藤丸}が彼女^{花騎士}たちの団長だと考察し、少しばかり興味を覚えたからである。

せっかくだし、私も会話に参加させてもらおうかしら——
人差し指をクイツと手前に引く。

瞬間、一人の悲鳴が瞬く間に屋敷のほうへ急速接近してきた。

扉が開く音。

床を走る音。

階段を駆け上がる音。

そしてもう一度、扉が開く音。

女の前に、一人の少年が連れてこられた。

「ようこそ。私がこの屋敷の主。カトレア、と言えはわかるでしょ？」

×

「カトレアちゃんと遊びに来たのかな？」

どうにかして結界を突破しようとしたところで後ろから”アリスさん害虫”
を連れて少女が声をかけてきた。

ニヒヒと笑顔を振りまいているところを見る限り、敵意はないように見えるけど、問題は害虫を連れてきているという一点にある。警戒は解かない方がいいだろう。

「オレたちはそのこの屋敷に用があるんだけど、もしかして君もそこに用があるの？」

「そうだよ。シンビジュームちゃんにおつかい頼まれて今帰りなの。この子はあたしのお友達、メイドアリくん！」

毎度あり？ その名前はダジャレなの？

それはともかく、話を聞く限りでは彼女は間違いなくあの屋敷の従業員と見ていいだろう。

「メイドアリくんって……、どこからどう見ても害虫なんだけど」

「大丈夫だよ。メイドアリくんは私の友達だから。ネー♪」

言葉を理解できるのか、メイドアリくんは彼女の言葉を聞いてうんうんと頷いた。

とても共存出来るとは思えないが、こうして見ると案外害虫も可愛いところがあるのか。

いやいや、ここで彼女のペースに飲まれてはいけない。

もしかしたら彼女の協力で結界を破壊することなく穏便に事を運べる事が出来るかもしれないんだ。

「ところでさ。オレたちあの屋敷に用事があるんだけど、この結界のせいで近づくことさえ出来ないんだ。何とかならないかな？」

「簡単だよ。あたしもこの結界を通り抜けることは出来ないけどメイドアリくんなら結界の影響を受けないからね。じゃあメイドアリく

ん、これお願い！」

オンシジュームは提げていた買い物袋をメイドアrikunに持たせて屋敷に戻るように指示を出す。

すると、主の命令を受けたメイドアrikunは一目散に駆け出し、結界にぶつかるともなくそのまま屋敷へと走っていった。

「なるほど。人払いの結界を解くにはあの害虫を伝令として解除申請をさせる必要があったということか」

エドモン、解説はありがたいけどオンシジュームがふくれっ面して怒ってるよ。

「害虫じゃなくてメイドアrikun！　ちゃんと名前で呼んでくれないと怒っちゃおうよ！」

「それはすまなかつた。何分人と共存している害虫を見るのは初めてでな。屋敷にはメイドアrikunの他に何か飼っているのか？」

「ううん。メイドアrikunだけだよ。あの子は小さい頃に足をケガしてたんだけど、あたしが屋敷に連れ帰って治療したんだよ。もしたらなつかれちゃってね、今では家族同然、時間がある時に遊んでくれると嬉しいよ！」

満面の笑みで返すオンシジューム。そうか、と一つ返事で会話を閉ざすエドモン。

こういうタイプに弱いんだっけエドモンは。

それとも単に相手するのが面倒なだけか。

「あつ、ほらほら見てよ団長！　結界が解除されていつてるよ！」

子どものようにはしゃぐ彼女の前で、確かに結界は煙のごとくスウッと消えていった。

メイドアrikunのおかげだろう。よし、褒美を取らそう。アリなんだから甘いものでいいよね？　飴ちゃんでもいいだろうか——んッ!？」

「団長!？」

「あわわわわ!？」　団長さん、急にどこへ行くんですか!？」

知らない！　勝手に体が動いて止まることすらかなわないし助けを呼ぶにも口も開けない。

まるで金縛りにあっているかのように、体の自由がきかない。襟元を鷺掴みされている実感がある。

ぐいぐい引つ張られるがままに、俺の体は雪の上を滑走し、屋敷の外観をじっくり見る間も与えられることなくエントランスホールに打ち上げられた。

床に転がされたところで今度は人形のように摘ままれ無理矢理起き上がらされては階段へとドタバタ駆け上がらされる。

もう何がなんだかわからないが、恐らくこれがこの屋敷の主のおもてなしなのだろう。

最後はある部屋にポイッと投げ捨てられて終わった。

同時に体が言うことを聞くようになり、俺はやつとの思いで立ち上がり文句の一つでもぶつけようかと顔を上げると。

「ようこそ。私がこの屋敷の主。カトレア、と言えばわかるでしょう？」そこには、誰もが見惚れするであろう優美な美女が待ち受けていた。

息を呑んだ。

薔薇のような紅い髪を持った貴婦人のようで、美を誇るクレオパトラですらきつと称讃するであろうその美貌。

おとぎ話にあるような、城に閉じ込められた美しい王女との謁見を夢見ているような感覚に陥ってしまった。いた。

いや待て。落ち着けオレ。

見惚れしている場合じゃない。

彼女は言った。この屋敷の主だと。

エドモンと荊軻の推測が正しければ、彼女が聖杯を所有している可能性は高い。

現に、魔術に詳しくない一般人なオレでも彼女から溢れる魔力の濃さが肌に伝わってくる。

早く聖杯を回収しなければ、ウインターローズに日が昇ることはない。

「それで、あなた名前は？」

「藤丸立香」

「ふーん。あつそ」

聞いてきたのはそつちじゃないか。

無理矢理連れてきておいてその態度はないだろう。

「男か女かはつきりしない名前ね。女装しても違和感ないんじゃない？」

「そ、そんなことは、な……い……です」

「何よそのしよげた返事は。はつきりしない人は嫌いよ私」

仕方ないだろ。こればかりはちよつと――

「それより私に用があつて来たんでしょ？ あんな嫌なストーカー男を張らせてまで」

「ストーカー？ 何の話を」

「白々しい。あの銀髪で顔はいいけどどこか不幸そうなオーラを纏つてる陰險な男よ！」

酷い言われようだが何となく察しはつく。

恐らくエドモンのことを指しているのだろう。

ストーカー呼ばわりされるのも可哀想だし、オレはカトレアに彼の真名を教えた。

「エドモン？ なるほどね。それがあの男の名前というわけね。これまで溜めてくれたストレス、その身をもつて受けてもらわなきやね」

” どう料理してやろうかしら” と嫌な笑みを浮かべるカトレア。

張り込んでたエドモンも悪いけどまさか張り込みだけで彼女の怒りを買っていたとは。

「ねえ。あいつの弱点くらい知ってるでしょ？ 隠さず全部話さない。じゃないとそこの窓から叩き落して雪に埋もれたところを氷漬けにするわ」

「知らない知らない！ むしろそれはこつちが知りたいくらいだよ」
「そう？ あとで白状しても遅いわよ」

さつきから尋問を受けてばかりだ。このままだと聖杯のことも聞けずにお開きになってしまう。とにかくここで何か聞かないと。いつまでも向こうのペースに合わせるわけにもいかない。

「じゃあ今度はこっちの番。単刀直入に聞くけどカトレアは聖杯というのを持つていないか？」

——つて、なに正直なままにぶつちやけてるんだオレは!？」

「そんなバカ正直に聞いたところで”持つてない”と返されるのがオチだぞ！」

「そんなの知らないわよ」

思ったとおりのご回答ありがとうございます。

でもさすがにその答えで納得するわけにはいかない。

「今起きてるウインターローズの異変は全部聖杯の影響によるものなんだ。聖杯はどんな願いも叶える願望機。誰かが悪用してるのは明白で」

「何よそれ? ……ああ、そう。そういうことね。要するに、私が犯人って言いたいわけツ!!」

「えっ!? いや、そんなつもりじゃ」

マズい!？」

確かに今の言い方だとカトレアを犯人だと決めつけているようなもの。

窓から叩き落されても文句は言えない。完全にオレの落ち度だ。

「……そうよね。そう思われても仕方ないわよね」

「……えっ?」

見れば、彼女の瞳には明かりが灯っていないなかった。

さつきまであったはずの気鋭な瞳孔はどこへ消えたというのか。

「生憎、私はセイハイなんて知らないし、そんなのに頼らなくても私はその気になれば一国余裕で潰せるわよ。人形の繋ぎ目を引きちぎるように」

「カトレア……」

氷のような冷たい言葉だった。

それでいて、最後に口にしたのは、

「こんな世界、いつそ消えたほうが救われるのにな」

この世すべての終わりを待ち望んでいるかのような、悲哀に塗れた嘆きだった。

「君は、世界が嫌いなのか？」

思わずそう呟いてしまった。

カトレアは肩を竦めた後、穏やかに唇を開く。

「どうかしらね」

そう言つて、彼女は部屋の窓を開いて外の景色を眺める。

冷やかな白い風が頬を撫で、雪はすうつと溶けていく。

「あなたはどのなの？」

世界が好きか、世界が嫌いか。

そんなこと、問われるまでもない。オレは――

「世界なんて興味ない。そうでしょ？」

――

「だってあなた、私と同じ眼をしているもの」

×

ウィンターローズ 閉ざされたお屋敷

「すみません皆さま。カトレアさんがご迷惑を」

オンシジュームに応接室へ案内されたモミジたちを前に謝罪するのは、シンビジュームという使用人だった。

「頭を上げてくださいシンビジュームさん。団長が無事なら私たちはそれで十分です。ですが驚きました。カトレアさんは他の魔女とは比べ物にならないほど強い魔力をお持ちなのです」

「は、はい。そうですね。カトレアさんはその……」

モミジが宥める前でシンビジュームは目を逸らしてもじもじと手を組ませている。

この場合、何か言いたげそうにしているのは明白だと、助手サフランは探偵エドモンに相槌を打った。

当然それに気づいたエドモンは頷き、指を鳴らした。

「ウェイトレス」

「は、はい。私でしょうか？」

「当然だ。他に誰がいる？ 彼女たちにコーヒーを！」

——チツガーウツ!!

サフランは口にするのも我慢し心の中でツツコミを押し殺したがこれには彼女も頭を痛めた。

先程の場の空気なら問い詰めてカトレアや聖杯の情報を引き出せたかもしれないというのに、この探偵はそのチャンスを自ら台無しにしたのである。落胆するのも無理はない。

シンビジュームがコーヒーを用意しに退出したところでサフランは顎を落としてドツと溜め息を吐いた。

「サフランさん、大丈夫ですか？ 顔色が悪いように見えますが」

「大丈夫よモミジ。ちよつと眩暈めまいがしただけよ」

「なに？ 眩暈だど!? それは大変だ。オンシジューム、彼女を寢室へ！」

——誰のせいだと思ってるんですか！

「了解だよー！ サフランちゃんこっちこっち！」

「ちよつと、私まだ行くなんて一言も、ちよつとおツ!!」

オンシジュームに引つ張られるがままに、サフランは部屋を後にされてしまった。

そうして、花騎士二人が退室し、在室しているのはモミジたち4人となったわけだが、部屋の空気が突如一変する。

さつきまでの和やかな雰囲気と打って変わり、天敵同士が目を合わせて互いの出方を待つかのような殺伐とした世界へ塗り替えられたのである。

それが誰の仕業なのかは花騎士であるモミジとハツユキソウにはすぐに察することが出来た。いや、させられたと言った方が正しい。

二人の視線の先にあるのは、巖窟王エドモン・ダンテス。彼が放つ異質な威圧に二人は警戒せざるを得なかった。

その威圧は殺意と取ってもおかしくないほどに、彼のそれは酷く悪辣だったからである。

「さすが、花騎士なだけのことはある。俺の殺気をこうも容易く感じ取れるとは。サフランよりはマシということか」

「それはありえませんかよ伯爵。私たち花騎士は世界花に選定された誉

れある騎士です。砂粒ほどの殺気であろうと見逃すわけがありません。私たちを試しているんですか?」

大剣の柄を握り、敵意の眼差しをぶつけるモミジにエドモンは顔色一つ変えることなく煙管を吸った時だった。ほんの僅かな、小さな風が頬を横切った時、モミジの視線は流されるがままに後を追った先には。

「そうだ。彼には気がつけても私からは何も感じ取れなかっただろ」

背後を取られ、喉元に短刀を当てられたハツユキソウとその犯人である荊軻の姿が目飛び込んできた。

「そんな、いつの間?!」

モミジは愕然とした。油断など一切してはいない。なのに彼女は荊軻が横切ることを許し、ハツユキソウを人質に取られてしまった。そのことにモミジは力の差を見せつけられたかのように感じざるを得なかった。

エドモンはモミジのことなどお構いなしに話を続ける。

「気配遮断。文字通り、戦闘時以外は自身の気配を遮断することが出来る隠密行動に長けたスキルを荊軻は有している」

「気配遮断?」

「我々英霊には宝具だけではなくスキルと呼ばれる能力も付与されている。さて、ここからが本題だ」

エドモンは花騎士たちに問うた。

「おまえたちは、我々に勝てるか?」

×

サフランはベッドの上でふてくされていた。オンシジュームがシンビジュームの手伝いをしに行くと言って全速力で部屋を飛び出していったことで一人きりになってしまったためである。

もつと頼ってくれてもいいのにと、サフランは胸の内煮え滾るこの抑えきれない衝動を発散するために枕を力強く抱き寄せる。ついには両足をバタバタとベッドに叩きつけては、身体を捻らせて両端へ

交互に転がってみせるほどに彼女は荒れているのであった。

「何よなによ。疫病神でも祓うように追い出して！ あれが探偵のやること!? 確かに私はまだまだだひよっこの助手だけど、どうにか役に立とうと頑張ってるんだからね！」

彼女がエドモンのために意気込むのも無理はない。サフランは今日に至るまでそのほとんどが留守番を任されていたのだから。

朝一番に起きては郵便受けから朝刊を引っ張り出した。朝食も弁当もすべて手間暇かけて料理した。洗濯なんて帽子の型が崩れないよう慎重に洗うから余計に疲れる。

掃除も、買い物も、ご近所との交流も、何もかも全部サフランがこなしているのだ。

だが、これが彼女が求めた助手としての在り方ではない。事件があればエドモンとともに現場へ急行し、互いの推理をぶつけて迷宮入りすることなく解決する。これが彼女の理想像なのである。

しかし理想はそう簡単に実現しないもの。彼女自身それは理解してはいるものの、エドモンからの扱いや態度はサフランの堪忍袋の緒を緩めつつあった。

「もしかして私、信頼されてないのかしら……」

心にもないことを吐いて枕に顔を埋める。そんなことはないと思いたいがエドモンの冷たい仕打ちを思い出してしまい思わず涙ぐんでしまう。

「ううん。そんなこと方に一つもないわ！ だって私は助手だもの。おじ様のことを支えていけるのは私だけ。ネガティブになつてはダメ、常にポジティブシンキング！ 余裕をもって優雅たれよ！」

そう言つてサフランは勢いに任せてベッドに立ち上がった。拳を天井に突き上げて、自分に言い聞かせるように暗示をかけたのだ。これで大丈夫だと息をついたところで、襟元から何か小さな紙切れがベッドに落ちた。

そんなことはいざ知らず、彼女が再び枕に頭を寝かせた瞬間、首にチクリと紙切れが角を立てた。

「いたッ!? なにこれ、紙切れ? こんな持ってたのに」

紙切れに目を通す。そこに書かれていたのは、探偵エドモン・ダントスのイニシヤル。そして、探偵が助手に託した指令だった。

『部屋を見て回れ。調査が終わり次第俺のもとへ戻れ。期待している』

しばらく沈黙が続いたあと、歓喜の声が部屋に響いた。やっぱりこの部屋に連れさせたのもこのためだったのかとサフランは喜びのあまり部屋の中を駆けまわった。

我に返ったあと、サフランは期待に応えるべく早速部屋から抜け出し、意気揚々と一部屋ずつ確認し始めた。ネームプレートが掛けられてない部屋は客室なのか空き部屋なのか、全くもって気になる箇所は見られなかった。

しかしその逆、花騎士の部屋は世界が違った。

オンシジュームの部屋は、やはりというか当然というか、人形や遊具で溢れていた。服すら脱ぎ捨てられている。散らかし放題で片づけられているところなどない。子どもの遊び部屋と言った方が正しいのかもしれない。サフランはこの光景を目にした瞬間、

「この部屋にはないもない。うん、絶対ない」

開いたドアをそつと閉じた。

次に覗いたのはシンビジュームの部屋だ。こちらは先程とは打って変わって綺麗に整理されていた。書棚が並び、化粧台はもちろん部屋の装飾も女性らしく彩られている。今時の女の子の部屋。きつと彼女がこの館の中で一番まともな常識人だとサフランは推測した。

「ここも特には何もなさそうね。子どもに見習わせたい良い手本の部屋……あれ？ これは」

サフランが目にしたのは、作業台に置かれた日記帳だった。レザーの皮を被った一見高級そうに見えるそれは、中身を読まれないよう鍵を掛けられるプライバシー保護搭載機。内容は気になるが、さすがに人様のプライバシーを勝手に見るのは良心が許さない。聖杯のことについて書かれている重要参考物かもしれないがひとまず彼女は工

ドモンの指令を優先して別の部屋を調査して退室した。

サフランが最後に目にしたのは、覚えのない名前だった。

デンドロビウム？——

「サフラン様」

不意を突かれた呼びかけにサフランは体がそってしまった。振り返ればシンビジュームが微笑みながらも不穏な空気を漂わせている。勝手に探索していることがバレたと思った彼女はひとまず謝罪した。「大丈夫ですよサフラン様。この屋敷も広いですね。何かないかと探検したくなる気持ちもわかりますから」

笑顔を絶やすことなく語るシンビジュームにサフランは安堵する。怒られて追放でもされるかと覚悟していたがその心配もする必要はなくなり、彼女の表情は晴れ晴れとしていた。

「ですが、我が師デンドロビウムの部屋を覗き込もうとするのは無礼にも程がありますよ。アスファルのご令嬢様」

サフランの顔が曇る。穏やかそうなシンビジュームから何か嫌な雰囲気を感じ取ったからである。花騎士は身の危険を感じる感知能力に長けている。未来予知ができるAランクの直感ほどではないが、花騎士の危険感知は世界花の恩恵により自分の身に危険が迫った瞬間に感知できる。故に、彼女はシンビジュームに対して警戒する。目を離すことなくボウガンに手をかけて敵意があることを示すように。「へえ、あなた私のことを知っているのね」

「ええ。復讐の化身、巖窟王エドモン・ダンテス。残り十歩で始皇帝を仕留め損ねた暗殺者荊軻。私に知らないことなどありません」

「あなた、本当にシンビジューム？」

「はい。真正正銘、この屋敷の使用人シンビジュームですよ」

嘘。花騎士が別世界から来た英霊のことを看破することは不可能に等しい。英霊について熟知しているのは英霊と、別世界から来た藤丸立香だけなのだからとサフランは推理する。

つまり、今日の前にいるシンビジュームは「偽者」だ。——

「さあ、お部屋にお戻りくださいサフラン様。お連れの方々も首を長くしてお待ちしていますよ。——奈落でね！」

踏み込んだ。身を低くして突撃した瞬間にはサフランの視界から完全に消えてみせた。このまま勢いにのせてボディブローを決め込もうとする。

だが警戒していたサフランに隙はない。隠し持っていた手の平サイズの小瓶を親指で跳ね上げた。小瓶の中に入った液体は白い光を膨張させていく。

「煌きらめきよー・Glanグlanzツエー！」

破裂した。廊下一面が眩い閃光で覆われ、シンビジュームは瞬時に両腕で目を隠す。

「閃光弾ですか、味な真似を……。ですがこのような愚策、私には通用しません」

「逃がさないわよシンビジューム！」

シンビジュームはデンドロビウムの扉を開いた。逃がすわけにはいかない。サフランも後を追ってデンドロビウムの部屋へ入り込む。彼女が、エドモンが探している聖杯の在り処を知っている、もしくは所持している可能性があるかと判断したからである。それが、彼女の最大の誤算だった。

「何よ、ハハハ……」

閃光の輝きが失われた時、サフランは自身の眼を疑った。確かに彼女はデンドロビウムの扉を潜くぐった。それは紛れもない真実。しかし彼女に映っているのは、空から吹雪く雪景色、白化粧した森の中、見慣れたウインターローズの景色そのものだった。

「見てしまいましたね」

女の声が聞こえた。その声に気づいて我に返ったサフランはさすが警戒態勢に入る。辺りを見回すがシンビジュームの姿はない。

「答えなさいシンビジューム。ここはどこ？ どうしてデンドロビウムの部屋がこんな」

「そんなの簡単ですよサフラン様。境界が違うだけなのですから」

「境界が違う？」

「そう。扉ゲートと部屋ルームの間にある境界の空間さえ入れ替えれば、どこへだろうと繋がります。 ”聖杯の力” を使えば」

「あなた、やっぱり聖杯を隠し持っていたのね！」

ボウガンを手に取り、サフランは姿を現せと叫ぶ。今は部屋のことなどどうでもいい。ここで取り逃がせば次はないと焦燥に駆られた。助手として、探偵エトモンに役立つことを証明するためにも。

「それほど私をお探しでしたらお見せしますよ。どうぞご覧ください」

「ええ。大人しく言うことを聞けば……エ？」

声の主は廊下に佇んでいる。サフランの指示どおり、確かに姿を現してみせた。なのにサフランは驚愕するばかりで言葉がまったくでない。信じられなかった。夢でも見ているのか、いや、鏡でもと。動揺を隠せないサフランを見て、声の主は口元を歪ませる。

「これからは私が、”あなたサの代わり”となつてあげるわ」

「ふざけないでッ!!」

シンビジウムだったそれは、サフランの姿となつて彼女を嘲笑した。サフランは怒りに身を委ねボウガンで狙撃しようとするも、間合いを詰められた彼女は撃てることなくボウガンを蹴り上げられた。

「最後に教えてあげるわ偽者私。花騎士が英霊に勝てるなんて驕らないことね。世界に選定されただけの弱者が、人の領分を越えた強者に勝てるわけがないんだから」

サフラン 本者は偽者を追いかける。

サフラン 偽者は本者を閉じ込める。

そこにあつたはずの扉は、サフラン 本者の前から消えた。

そこにいたはずの偽者は、サフラン 何事もなかったように本者がいた部屋へと戻つていった。

第7話 「枯生花」

古い記憶、私がまだ騎士学校に在学していた時の話だ。

私には姉がいる。花騎士として優秀で、多くの花騎士から慕われていた自慢の姉が。当然私も姉のことは尊敬している。姉こそ花騎士としての理想の姿。だから一日も早く姉と肩を並べられるようにと努力してきた。

苦労の末に、私は騎士学校の中でも上位の成績に食い込んだ。指折り数えた方が早いほどに。必然、当時の騎士学校ではそれなりに名声を得た。けれどこれで満足などするはずもない。頂は遙か彼方、姉に追いつくことなのだから。この程度で己惚れるわけにはいかない。

それから数日後、どこで私の成績を聞いたのか、姉はわざわざ騎士学校へ駆けつけ私に面会を持ちかけてきた。久々に姉と会える。私は快く了承し、自室で姉を歓迎した。姉妹水入らず他愛ない世間話を日が暮れるまで語り合ったものだ。

けれど、未だに一つだけ、どうしても気になっていることがある。

——「ねえ、モミジ」

姉は俯いたまま、どこか気弱な声で口にした。

——「もし、誰も敵わないような怪物と対峙した時、モミジならどうする?」

思わず面食らった。

花騎士として完璧な者が、私の自慢の姉が、らしくない弱腰を見せている。

それはダメだと、胸の鼓動が高鳴る。許せるはずがない。なぜなら姉は完璧だ。完璧であるのだから不安要素などあってはならない。だから私は——、

——「倒します。それが私たちを裂こうというのなら死力を尽くして戦うだけです」

退路を断たせた。理想の花騎士^姉が敵前で背中を見せるなどあつてはならない。

——「そうよね。ありがとう」

目が覚めた姉の顔は穏やかな笑みを浮かべていた。連れて私も笑みが零れる。

それでいいと。弱さを晒すことは死ぬことと悟らせることができ
た私は羽を伸ばして椅子に腰掛ける。その時だった。自身に違和感
を覚えたのは。

膝が笑っていた。

小刻みにガクガクと震え、落ち着くことはない。止めようと力いっ
ぱい膝を握るが一向に治まる気配はない。

恐怖、しているのかと脳裏を過ぎる。何だそれは？

敵わない敵と対峙することへか、姉に逃げるなど言い聞かせたから
か。

わからない。

ただ、一つだけ確かなことがある。

『私は、どんな敵でも必ず倒さなければならぬ』

倒すと口にした以上、私は必ず斬らなければいけない。完全無欠な
敵であろうとも、この剣をもって勝利を勝ち得なければならぬ。

ならば——、

——「おまえたちは、花騎士、我々に勝てるかと断言できるか？」

始めから答えは一つしかない。

「勝ちます。花騎士 私たちはこの世界の守護者、最後の砦です。害虫である
うと英霊だろうとやることは変わりありません。剣を手に、誇りを背
負い、修羅となって敵を穿つ。それだけです」

×

モミジの答えは実にシンプルだった。

花騎士にとって未知の敵である我々英霊に対して勝つと断言したのだ。勝利を確信できる根拠もないというのにハツユキソウもまた首を縦に振る。そこに怯えはあるのだが、迷いは一切見られない。つまりとところ、花騎士たちもまた、人類最後のマスターと同じく、死ぬ覚悟は出来ていると。

「悪くない。それだけの覚悟があるなら十分だ」

煙管をふかせる。溢れていた殺気は煙のように穏やかに消え、エドモンはソフアーに腰掛けた。荊軻もいつの間にか彼の隣に座り、持参しているアルコール入りのチョコを頬張る。あまりに唐突な出来事に対し花騎士二人は何をどうすればいいのか思考が上手く回らない。今までに経験したことのない殺意を向けられ、一問一答だけで幕が下りたのだ。不気味に感じざるを得ない。

コン、コンツ。

「失礼します。コーヒーをお持ちしました」

ドアのノック音に続いて聞こえてきたシンビジュームの声に、モミジとハツユキソウはホッと胸を撫で下ろす。この異様な雰囲気壊してくれた彼女には二人とも心の中で厚く感謝した。淹れたてのコーヒーが彼女たちの前に置かれていく途中、何かに気づいたのかシンビジュームの手がピタリと止まる。

「モミジさん、大丈夫ですか？　すごく汗をかかれていますようですが」「え？」

シンビジュームに指摘されモミジは額に手を当てる。言われるまで気づかなかったが確かに彼女は顔中汗で塗れていた。思い当たる節は一つしかない。数分前にあつたあの一問一答。もしや自分は英霊に恐怖していたのではないか。そう考えてしまったら今度は手が小刻みに震え始めた。

——間違いない。私は、英霊に怖気づいたんだ。

「暖房が効き過ぎたのでしよう。すぐにタオルをお持ちしますから」「ありがとうございます。ですが気遣いは無用です」

モミジは両手で汗を拭う。が、余程恐れていたのか十分に拭えない。自分がどれだけ恐れをなしていたのか、その表れだと思ったモミジは余計に情けなさを痛感してしまった。こんな姿を見せるわけにはいかないとマフラーに手を伸ばした時、ひんやりとした涼しい冷気が彼女の熱を冷ましていった。

「ハツユキソウ？」

振り向くと、ハツユキソウがモミジの手をぎゅっと握りしめてきた。

「すみません皆さん、ちよつと部屋を後にします。すぐ終わりますから！」

「ち、ちよつと待って」

彼女の言い分など構わずハツユキソウはその小さな手で無理矢理引つ張る。解こうと思えばすぐにでも手を振り払えるはずがモミジは流れに身を委ねてしまった。

「何かあったのですか？」

状況が読めないまま困惑するシンビジュームがコーヒーを置こうとした時、荊軻は笑みを浮かべて答えた。

「なに、心配は無用だ美女。メイニクイそれより烏龍杯を頼めるかな？」

廊下は部屋と比べて厚くはない。窓際に寄れば肌寒さを多少感じる程度。ハツユキソウはモミジの手を引つ張って窓際に位置着くとゆったりと漂う白雪を眺める。

「あー、怖かったですねモミジさん！ 私、荊軻さんに刃を当てられた時はどうやって逃げようとかずつと考えてたんですよ。おかしいですよね、仮にも花騎士なのに情けないですよね」

急な話を持ちかけられたモミジは最初こそ呆然としたがハツユキソウの自己評価を聞いた途端、彼女は即座に指摘する。

「そうですね。確かに情けないかと。ですが、あなたは逃げなかった。それはつまり、立派な花騎士と誇っているいいかと」

「そうですね？ い、いえ。当然です！ 当然ですとも！ 私だって花騎士です。立派に本職を全うしますよ！ 逃げも隠れも致しませんとも！」

「さつきと言っていることが」

「そこはさあーつと水に流して！ さき、お一ついかがですかこのチョコ！ はい、黙って受け取ってください！」

妙に強引なテンションに押し負けたモミジはたじろぎながらもチョコを受け取った。

「あつ、美味しいですねこれ」

「ヘザーさんのところにあつた菓子皿から掠め、いえ、譲ってもらったものです！ これで少しは気が晴れるといいですね」

そう言つてハツユキソウは隠し持っていたチョコを取り出しては頬張り、また無理矢理モミジに食べるように迫った。断ろうにも断れない場の空気に流されるまま、モミジは止む無くチョコを食していく。

「話を戻しますけど、私は逃げることも時に必要と思うんですよ」

「え？」

「だって死んだら元も子もないですし」

その直答にモミジは眉をひそめる。

「いいえ、それはありません。あつてはならないことです。敵わないと知つて逃げるとは、覚悟が足りない証拠。死ぬ気で挑めば勝てない相手でも勝てます！」

「それはありませんッ!!」

怒声が轟く。彼女からは出ないであろうその痲声にモミジは体を引くついた。

「ありえませんかよモミジさん。だってそれが正しいなら、私たちは今頃害虫を全て倒し終えて平和な世界を取り戻せているんですから」

「……ッ」

言われてみればその通りだと。モミジは苦い呻きを漏らして口を閉ざした。

「す、すみません。私なんか意見するなんて身の程を弁えろって話ですよねごめんなさい、ほんとにごめんなさいッ!!」

ペコペコと頭を下げるハツユキソウ。それをただ傍観するモミジは偏えに思う。

「あなたは、他の花騎士たちとは違いますね」

考えもしなかった。いいえ、認めたくなかっただけなのかもしれない。

敵前逃亡を許してしまっただけは、あの時教えたことが嘘になると。ハツキソウが唱えた答えを正しいと受け入れてしまっただけは、姉を——

「……私はただ、自分に素直なだけですよモミジさん」

俯き顔を隠すモミジの前に、ハツキソウはしやがみ込んで話を続ける。

「私は意気地なしで弱虫で、周りの流れに身を任せて漂うだけの漂流物に過ぎません。逃げることも恥だとは思っていませんから、自分では敵わない時は仲間を頼って後のことはお任せする卑怯者だったりしますよ」

「……仲間を、頼る？」

「ツライ時、悲しい時、どんな時でも周りには必ず力になってくれる仲間がいます。それは誰にでも平等に、求める人には絶対手が届くものです。だからモミジさん、死ぬまで戦うなんてそんな悲しいこと、誰も求めていないことを口にするのはほどほどにしてくださいね」

やめろ。ではなくほどほどに。

否定でも、肯定でもない中庸であれば。そう論す彼女の穏やかな瞳は、いつかの姉のようだとモミジは肩を竦めた。

「はあ、どうやら私の負けのようですね。悔しいですが少し認めます。死ぬまで戦うようなことは今後止めるよう精進はします」

「始めはそれくらいがちやうどいいと思いますよ。突然考えを改めろとか言われてすぐ変わるなら苦労することないです。あつ、そういえば昨日のお礼をまだ言えていませんでしたね」

「昨日？ 街中での襲撃のことですか」

「そうです。助けていただいたのにお礼の一言も言えないようでは花騎士としても人としてもダメダメですからね。昨日は本当にありがとうございました」

「礼なんてそんな、当然のことをしたまでですから。さあ、立ち話もこ

「ここまでにしてそろそろ部屋へ——」

戻りましようと言いかけた時、モミジの視界に何かか押し寄せて来るのが入ってきた。

「おーいー!」

今となつては見慣れたシルエット。その正体にモミジはすぐに理解した。

「あれは……団長!」

「団長さん? あつ本当だ団長さーん、つて——!?!」

二人が待つていた藤丸の姿が近づいてくる。それは喜ばしいことなのだが、問題は彼の後を追う数々のオブジェクトだった。椅子に掃除道具、灯燭台に石像といったあらゆる物が藤丸を追いかけてまわしているのである。

「えーッ?!? もしかして幽霊——」

そう解釈してしまったハツユキソウは白目を向いてその場に倒れこんでしまった。

「ハツユキソウさん!」

「死んだフリをするのデス。そうすれば私たちが襲われるシンパイはカイム」

「それはいいです」

モミジはハツユキソウを掴み上げるとすぐさま応接室へと放り投げた。彼女の苦痛の悲鳴を無視して一直線に藤丸のもとへ駆けていく。

「無事ですか団長ツ!!」

「ああ、大丈夫だよモミジ。あとは任せていい?」

「はい。問題ありませんツ!! あつ——」

「えっ、なに?」

「すみません。剣を忘れてきました」

「ああ、なるほどそういうことね。完全に理解した」

それから数分後、埃塗れになった二人の姿が応接室に現れた。

「だ、大丈夫でしたかお二人とも」

ハツユキソウが恐る恐る様子を伺ってきた。オレは苦笑いしか浮かべることが出来なかつたがモミジは酷く落ち込んでいるように見えた。こんなはずでは、ときつきからそればかり口から零しているから余程ショックだったのだろう。

「クハハ、いい顔になったではないか二人とも。だがあまり悠長に構えてはいられない。聞かせてもらおうか藤丸、収穫を」

人の気などお構いなしに結果を求めてきたエドモンにオレはありのまま起こった出来事を話した。

「そうか。おまえがそういうのなら、そうなのだろう」

そう言つてエドモンは立ち上がり

「どこ行くの?」

「ここはハズレだ。ならば長居は無用、次の目星へ行くだけだ」

霊体化した。姿が消えた一瞬の出来事を目撃した花騎士たちは揃つて目を丸くさせている。

「ええ!? 消えましたよ団長さん!! 幽霊、もしかしてエドモンさんは幽霊だったんですか!?!」

「幽霊、といえばそうなるのかな」

「それより団長、これからどうしましょうか? 彼が退出したことはサフランさんに伝えたほうがいいのでは?」

「そういえばサフランの姿がないな。どこか行つたのか?」

「主、彼女なら体調不良で寝室へ運ばれたぞ」

「そうなの? じゃあ知らせるのは余計な気がするよな」

「判断は主に任せる。それでは私も失礼させてもらうよ」

荊軻まで去るのか。せつかくここまで来たというのに。

「私も私で仕事がある。これもこの事件を解決するためだと思つてくれていい」

「めんどくさいからとかそういうのじゃないよね?」

「半々だ」

彼女もまた霊体化して姿を消した。これで残るは花騎士たちのみとなつたわけだけど。

「とりあえずサフランの様子を見に行こう。」

オレは二人を残してシンビジュームの案内のもと、サフランがいる客室へとたどりついた。

「あら、団長さん。もしかして心配して見舞いに来てくれたの？」

「そうだけど体調は大丈夫なのか？ 目眩で倒れたって聞いたぞ」

「もう大丈夫よ」

このとおりとやわんばかりに腕をぐるぐる回し始めた。確かにそれくらい動けるなら問題はなさそうだ。

「それより団長さんはどう？ 何か収穫はあったのかしら？」

「それが何も。ただ、気になることが一つあってさ。カトレアっていう人なんだけど」

「カトレア……」

ん？ 何か気になるのかな？

「ねえ団長さん。ちよつと外の空気でも吸いに行かない？」

この時のサフランの顔は、微笑んでいるはずなのにどこか暗い何かを漂わせているのを感じた。断りは出来たはずなのに、なぜかオレは一つ返事で了解してしまった。

まるで、友人だからと警戒することなく家に招き入れるように。

「はつくしよんツ!!」

応接室ではハツユキソウが寒そうに肩を震わせていた。

「大丈夫ですかハツユキソウさん。寒ければ暖炉のそばで温まったほうが」

「うーん、それなんですけどどうにも先程から調子が悪いといえますか。モミジさんは何か感じませんか？」

彼女の指摘にモミジは首を傾げる。特に違和感などはなく、身体はいたって良好だ。けれどハツユキソウは違う。

「薄々感じていたんですけど、もしかしたらこの屋敷は何らかの魔力の影響を受けているんだと思います」

「なぜそう思うのです？ あなたの不調と何か関係が？」

「はい。私が低体温症であることはご存知ですよ？ だから私は無理に厚着をして体温の調整をしているんです。だから私が外から寒

さを感じることはまずありません」

「それはつまり、あなたは——」

枯生花。かれきにばな 花騎士の適性があるにも関わらず、何らかの理由で世界花からの祝福の一部が呪いとして刻まれたもの。それがハツユキソウにもあるのだ。つまり、彼女の低体温症は枯生花という呪いにより発症しているもの。彼女が普段より寒いと感じるのは体内に流れる魔力に乱れが生じたことによる症状の悪化。

「そういうことです。私は花騎士といっても呪われているんです。今では気にしていませんがやっぱり悪化するとちよつとツライですね」
「それならすぐにここから出ましょう。外なら多少は軽減されるはず
です」

「そうですか？ それならお言葉に甘えて——」

「——っ！ ハツユキソウさん！」

無理していたのか、ハツユキソウは意識を失ってその場に倒れこんでしまった。慌ててモミジが駆け寄り彼女を抱き起すと、彼女はすぐに屋敷から飛び出した。まずはできるだけ屋敷から離れて症状を抑えることが先決だと。モミジはただ懸命に駆けていった。

そして、しらばくしないうちに人影が見えた。今一番必要とする団長の姿が。

これでもう大丈夫だと、モミジは必死に団長と叫んだ。

だが——

「あら、もうお邪魔虫が飛んできたのね」

彼女たちを待ち受けていたのは、

「出番よ、あなたたち花騎士。盛大に壊してしまいなさい」

仲間同士の殺し合いだった。

最初は罠だとは思ってもいなかった。いや、何かあるとは虫の知ら

せであつたけど。それでもオレは実際に何が起こるかこの目で見ないといけないと、妙な強迫観念に殺された。

流されるようにサフランについていき、気がつけばボウガン向けられる始末。油断していたわけではないし、警戒心はあつた。

なのにどうしてこうなつた？

「さて、団長さん。どうして私があなたに敵意を持っているかわかる？」

彼女はにやけながらボウガンを顎に当てにきた。グイツと力任せに押し上げた後には、笑つてオレの腹部を殴打する。

「わからないわよねえ。だつてまだ出会つて間もないでしょ私たち。なら答えはありそうじゃない？ 単純に、殺したいだけとかさ」

蹴り飛ばされた。次は頭を鷲掴みにして雪山に何度も叩きつけられた。おもちゃで遊ばれてるように彼女はオレを徹底的にいたぶる。

「ああ、やっぱりつまらないわ。一度は世界を救つたカルデアのマスターだつていうのにまさかこんなに脆いとはさ。所詮おまえもただの人つてことか」

!?! サフラン、今なんて言つた？

「ここまで抵抗もなく反応もないんじゃ飽きもくるつてもんだ。マスターには脅威と思うに値しなかつたクソザコナメクジだつたと報告するしかねえな」

ああ、わかつてきた。けど鈍感にも程がないかオレ。

こいつは、サフランに化けたサーヴァントだ。マスターの命令でオレを殺しにきたんだらう。

それはわかつた。けどこの現状、どう打開すべきか。

令呪はある。モミジを呼ぶには問題はない。けれどこの令呪、使つていいものかわからない。カルデアにいた時ならバックアップで令呪は一日で一画回復する。

だがここではどうだ？ 三画しかない令呪を、早々にここで使うのか？

「じゃあせいぜいあの世で後悔することだ。カルデアのマスター」
ボウガンが眉間に当てられる。指にトリガーがかかつた時、遠くか

ら頼りになる声が聞こえてきた。

「団長ツ!!」

見ればそこには、今一番頼りになる唯一の花騎士。モミジが駆けつけてくれていた。

「あら、もうお邪魔虫が飛んできたのね」

彼女もまたモミジに気がつき、ボウガンをおろしてオレのそばから離れた。

けど、アレはなんだ？

サフランの背後に見えるのは、二人の影。

一人は人形のような、情が入っていない少女。

もう一人は、紫の騎士。

その騎士が輝かせている剣は、二色五色へと輝きを放っている。

「出番よ、花騎士^{あなたたち}。盛大に壊してしまいなさい」

「命令するな。私はあの方の命のもと、ただ壊しに來ただけだ」

輝きはさらに増していく。五色に輝くその剣はついに、輝煌の虹と成って天地を震わせる。

紫の騎士は高らかに、破壊の宣誓をここに告げた。

「虹色閃光”破壊ノ大王”」

七つの色が旭光となる。目にするのも眩いそれは軌跡を描き、流星となつて降り落された。

人払いの結界は耐え切れるはずもなく一瞬にして崩壊。次々と割れた破片が散らばり、地響きとともに木々は焼け落ちていく。その光景はまるで、天上から下された裁きを目の当たりにしているようだった。

「我が名は。パファイオペディルム。音に聞こえし戦場の女神だ」

第8話 「英霊華」

モミジは足を止めてしまった。

天が割れたからではない。

大地が鳴いているからではない。

ただの一人の騎士に対し、恐怖を覚えたからである。

恐怖とは、言わば死である。なぜなら、自分の死を幻視させる力がある。死の結果だけではなく死ぬまでの過程を構築イメージしてしまうがゆえに現実味が増幅する。そうなることで迎えるべきだと描いた絶対的な死が完成し、自身の運命に烙印してしまう。結果、思考は放棄され、体もまた機能を停止させる。

そうならないようにと、モミジは死と隣り合わせになるよう自ら死地へ赴いたことが幾度もある。敵わない敵でもせめて戦えるようにと、窮地に立つて抗ってみせた。

だが今回はこれまで味わってきた恐怖とは比べ物にならなかつた。常人なら目を合わせただけでその気迫に抵抗する間もなく崩れ落ちる。モミジでさえギリギリ立つのでやつとの状態にある。

膝が噛っている。手も震えている。それがどうしたと、モミジは深呼吸し、己の弱さを掻き消すために喝を入れ、ようやく団長のもとへたどり着いた。

「ご無事ですか団長」

「モミジ、どうしてここに」

「団長もどうして……。いえ、今は説明をする時間はないのですみません。ハツユキソウさんをお願いします」

剣を構える。剣先の前にはサフランとパフィオペディルムと名乗った紫の騎士。その騎士の後ろに佇む虚ろな少女。

「サフランさん、ではないですね。何者ですかあなたは？」

「さて、私は誰でしょう？ 害虫か、人か、それとも鬼か。いえ、神様かもしれないですよ？」

「戯言を。その首落とせばわかることッ！」

サフランとの間合いを一気に詰める。剣に巻かれた包帯は瞬時に

灰となって炎とともに絶叫する。だがサフランの前に、あの紫の騎士の姿が目飛び込んできた。

「その炎の大剣、キミがモミジか」

紫の騎士、パファイオペデイルムが剣を抜く。一度は恐怖を覚えた相手にモミジは俄然力を握り剣を振り下ろした。

嵐が巻き起こる。互いの刃かがぶつかり合い激しく火花が散っていく。鏢迫り合いの中、力で攻めるモミジに対し紫の騎士は顔色一つ変えることはなかった。

「噂通りの力の持ち主だな。だが足りない。私を満足させるにはな」
途端、パファイオペデイルムの足捌きによってモミジの体勢は大きく崩れた。後方へ転倒すればすぐに追撃が、逆に踏み止まろうとすればそこで一突きされる。ならばと、モミジはすぐに剣に魔力を込め、剣先を足元に向けて膨大な炎を射出した。その衝撃はパファイオペデイルムの動きを封じ、逆にモミジは射出時の反動を利用し鮮やかに後方へ宙返りし間合いを広げた。

呼吸を整えようと体勢を取るモミジ。だがパファイオペデイルムはそれを許すことはない。彼女もまた同じように剣から放つ魔力放出の反動でモミジへ距離を詰めた。一撃、二撃、三撃と。立て続けに繰り出される連撃にモミジの顔に焦りが見え始める。受け流しこそすれど既に四十九の切り傷が刻まれていたからだ。

「どうした？ 剣先が鈍っているぞ」

「言われなくても、わかってるッ!!」

トリガーを引く。剣から噴き出る激流の炎は渦潮となって周囲を炎で飲み込んでいく。パファイオペデイルムはすぐに後退し、炎の渦が治まるまで攻勢の構えを取る。積雪の山は炎の渦による熱風で次々と蒸発して水蒸気と化し、霧となって濛々と周辺を覆い始めた。

「融雪霧か。だがそのような小細工、今の私には通用しない」

剣を掲げる。刀身は七つの色を纏い、虹色となって輝きを放つ。

「今一度我が宝具に慄くがいい。虹色閃光、破壊ノ」

「させないッ!!」

激突。モミジの投げた大剣がパファイオペデイルムの剣に直撃した。

双方の剣は宙を舞い、モミジは猛進してパファイオペデイルムへと詰め寄り渾身の拳を振りかざす。剣を捨て拳で立ち向かってきた彼女にパファイオペデイルムは顔を顰めるがすぐに口元はにやけた。剣を棄てるとは即ち自身の命を棄てること。ゆえにモミジが自ら死を選択したと、パファイオペデイルムは憤りを覚えた。だがモミジは己の拳で絶勝を獲らんと勝負に出た。

——そうか。キミも私と同じ、戦いに身を委ねる者か。拳を握る。

足を踏み込む。

直進の拳が、猛進してきたモミジに突き刺さる。

渾身の拳が、パファイオペデイルムの腹部へ突き刺さる。

唇を噛み締め、ふらついた身体を両足で踏ん張り互いに睨み合う。

双方の剣は、両者の目の前で地に突き刺さる。

「キミ、今までこういう戦いをしてきたのか」

「こうでもしないと、私が一番にはなれないから」

「なるほど、やはりキミはここで壊すには惜しい」

そう言つてパファイオペデイルムは剣を鞘に収めた。

「どういうつもりですか？」

「どうもこうも、キミをここで斬るのは惜しいと思っただけだ。キミのような戦闘狂はそうそういないからな」

「つまり逃げると」

「逃げる？ 冗談じゃない。今のキミでは私は斬れない。だから私はキミが花開くのを待つとする」

「何を勝手な」

「そうですよ。何勝手なことを言ってるんですかパファイオペデイルム！」

両者の中に割つて入ってきたサフランはパファイオペデイルムに押し寄る。

「私の命令を忘れたのかしら？ 言ったはずよ、殺せつて」

「私もおまえに命令するなど忠告した。私はあの方の命で動いただけ。破壊はした。既に命は果たされているのだからもうここにいる

理由はない」

背を向けられたサフランは顔を歪める。その顔はもはやサフランが絶対することのない歪なもの。害虫のような悍ましい何か。モミジは思わず身の毛がよだった。そんなモミジのことなど構うことなくサフランはもう一人の花騎士に迫る。

「おい、おまえはどうだトリカブト。おまえの力ならアイツなんかすぐに殺せるだろ?」

トリカブトと呼ばれた人形のような、情が入っていない少女は無表情のまま小さく口を開く。

「……確かにわたしなら楽に殺せる。でもわたしも命令されてる。あなたは見ているだけでいいって。それと」

トリカブトが天に向けて杖を掲げる。杖に詰め込まれた禍々しい髑髏が夜陰を照らすと、例えようのない無数の何かが夜光の奥から顔を覗かせる。牙を剥き出し、獰猛な獣の如く荒々しい咆哮が響き渡る。

「いつ見ても気持ち悪いなそれ。怪物や悪魔を滅した英霊様たちも一目見ただけでひくだろうよ。じゃあ早速そいつを使ってヤツらを殺し」

「今からあなたを主のもとへ返します」

「……は?」

「逝け、門よ」

影が跳ぶ。獣の形相をしたそれは大口を開いてサフランを頭から飲み込んだ。抵抗する素振りすら与えられぬまま、サフランは獣とともに跡形もなく消えてしまった。

「仲間割れ?」

「いいえ。これも命令のうちの一つです」

モミジへ振り替えるトリカブトは杖を仕舞って彼女のもとへ歩み寄る。それを見たモミジもまた敵意がない事を察して剣を収めた。

「初めまして、私はトリカブト。主から、あなたたちカルデアの者に手紙を預かっています」

一旦は戦闘が終わったみたいだ。

オレはホツと胸を撫で下ろし、モミジから預けられたハツユキソウに目を向ける。始めに見た時はハツユキソウの顔はひどく赤くなっていた。気を失っており何度呼びかけても一切答えることもない。異常であることに確信を持てたのは彼女の手を握った時。低体温症であるはずなのに人並みの体温よりも熱く感じた。

それが今ではだいぶ落ち着きを取り戻している。意識はないが呼吸は安定し、体温も少しずつ下がっている。とりあえずはこのまま寝かせておけば問題ないはずだ。

だがまた別の問題が浮上した。

偽物のサフラン、モミジを圧倒した花騎士パフィオペディルム。

そして、花騎士トリカブトが今モミジの前に迫っている。

どうしてこうもいつも突然に次から次へと問題が降ってくるのか。憎らしく感じるが今はモミジのもとへ駆けつけることが大事だ。

「モミジ、大丈夫か？」

「はい。特に支障はありません。それより」

「ああ、わかっている」

目の前にはトリカブトがジツとこちらを覗いていた。見れば何か引き込まれそうなその虚ろな瞳からは生気がないように感じてしまう。

「よろしいですか？ あなたがカルデアのマスターですね」

「藤丸立香だ。よろしく」

「敵同士だというのに随分と呑気なのですね。まあいいです。こちらが主からの手紙です」

所持していた封筒を取り出したトリカブトはすぐに封を切り、閉ざされていた手紙を開いてみせた。すると魔法陣が外側から浮かび上がりゆっくりと回転を始めた。

蒼白く輝くそれはやがて上空に一つの映像を映し出した。

『初めましてカルデアのみなさん。私は鮮薙那せんていな乃葉のは。彼女たちの主です』

映っているのは仮面を被った一人の女性だ。名前と声からしてま

ず間違いないだろう。どうやらこの人物がさっきの偽サフランヤトリカブトたちの主らしい。

『まずはお詫びを。私のアサシンがあなた方のお仲間にご迷惑をかけてしまいました。ですがこれも、弱肉強食なこの国では当たり前のことであることはご理解ください。仕方ないことだと』

弱肉強食な国？ 仕方のないこと？

『では本題に入ります。カルデアのマスター、藤丸立香』

!?

まだ会ったこともないのに名前を。

『これは警告です。すぐにこの国から退去なさい。あなたも見たはずです。パフィオペディルムの強さはあなたの側にいる花騎士ですら敵わない。英霊ですら彼女に勝てるわけがありません』

「世迷言を！ 確かに彼女は強かった。でも私はまだ負けてはいないッー！」

『特別に教えてあげましょう。パフィオペディルム、トリカブト、どちらも英霊の力を持った英霊華えいれいかです』

「英霊華？」

『英霊が持つ力を与えられた花騎士、それが英霊華。花騎士は疎か、サーヴァントすら凌駕する最強の騎士。どうです？ 力の差は歴然でしょう。それでは今日はこれにて。私たちの国からいなくなることを心から願います』

ブツン。

映像はここで終了した。トリカブトは一礼すると炎の魔術で容易く手紙を燃やし、彼女の後ろで待機しているパフィオペディルムのもとへ戻っていかうとした。

「待ってください。一つ確認させてほしい。君たちは本当に英霊の力を」

「持っていますか、それが何か？」

「何がって……」

「心配など無意味です。あなたのデミ・サーヴァントよりは完成された者ですから」

トリカブトは杖をかざして魔法陣を展開する。状況から考えて転

移魔法だろう。それを見たファイオペディルムがトリカブトのもとにきたのが何よりの証拠だ。

「それではなカルデアのマスター、それにモミジ。命が惜しくばここから立ち去ることを私も望むが、できればモミジ。キミとの再戦ははずれ必ず」

「さようなら。」 開け、門よ」

玲瓏に輝く魔法陣が二人を光に包みこむと二人の花騎士の姿は霊体化するように静かに消えた。

まるで嵐のような出来事だったわけだけど、それと同じくらい情報も多く掴めた。これは大きな収穫だろう。

けれど――

隣を見る。

モミジは俯いたまま拳を強く握らせている。

よく見れば体中に切り傷が、服にいたってはところどころに焼けた跡が出来ていた。

「ひとまず、戻ろう」

手をこまねいている時間はない。

まずは治療、次に情報整理、それから本物のサフランの搜索だ。

「わかりました。ですが団長、ハツユキソウさんは……」

『その点は心配いらないわ』

今度はどこからともなく声が聞こえてきた。頭に直接語りかけてきてるような。

でもこの声は確か――

「来なさい、モミジ。それに藤丸。私カトレアが面倒見てあげるわ」